
神々のゲームと転生者

レティウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神々のゲームと転生者

【Nコード】

N5587W

【作者名】

レティウス

【あらすじ】

贖罪のために働いてきていたと思っていた紅那岐しかし！実はこれが神々が始めたゲームであった。紅那岐は今までと同じに戦うことを約束し再び戦いへと身を投じていった

これはチート・ご都合主義・えーな内容などいろいろあります
また会話が多いのが特徴です

プロローグ

「さて、何処から話しましょうかしら・・・」

今この場所には二人の男女がいた、しかし二人の表情はまるで違う男の表情は追い詰めている顔であり、女の表情は追い詰められない顔である

「ねえ、神様の寿命ってあると思う？」

女ことトールは紅那岐を転生させた兆本神であり、紅那岐は少なからず敬意を持っている

「はあ？神に寿命があるのか？」

意味が分からず聞きなおしてしまう紅那岐

2

「そうね・・・正確には神には命の概念がないわ、死なないからね
まるでとんちをしているかのようで紅那岐は頭を捻っていた

「そうね・・・神には寿命は無いけど神としての力とかは実は上限するの・・・貴方達人間によってね」

その言葉を聞いた紅那岐はあることが頭をよぎった

「信仰か・・・？」

「そうよ、信仰によって私達の力って上限するのよ」

ある一定のヒントを得た紅那岐は結論に達したがそれでもまだ疑問は残っていた

「その信仰が一体俺の答えとどう関係あるんだ？」

「あせらないで、きちんと説明するわ」

そうやってトールは目を閉じ深呼吸した後紅那岐の眼を見ながら話始めた

「始めはね、下の神々が始めたのよ転生者を異世界に送るってのは。原作ブレイクをすればその転生者の名前が売れるということ、つまりは転生させた神自体も信仰されると同義になって力を得られるわけ」

トール転生システムについて紅那岐に話した

紅那岐はあまりの内容で驚いて声が出なかった

「そして、それが我々のような上位神や最高神まで参加し最終的に多くの信仰を得られた人物の神が時代の最高神を名乗れるゲームが始まったわ。そして能力を与えるという部分において実際は制限は無かったの・・・ただ最初のほうであげられる能力を全部上げちゃうとほとんどの子が力に振り回されちゃうから1つづつと言つことを言っただけを見て話すことにしてるのよ・・・まさか二つ目の世界でこの答えにたどり着くとは思わなかったわ」

そうやってトールは説明を終えた

「なるほどな・・・どおりで最初にいたときやさっきのことが矛盾

しすぎていてかみ合わないと思った」

紅那岐の矛盾とは・・・原作ブレイクをすればいいというのに紅那岐の敵になったりジャマをするやからと言うのがいる理由が、転生者を倒しジャマをすれば良いという事・マイナスのほうでも信仰されればそれは力になるということを言われても無いのに理解した

「で、貴方はどうするこの話をしたとき転生者はどうするかを自由にできるわ」

そう言つてトールは諦めた顔をして紅那岐を見た

「かまわんぞ？今までどおりにやってやろう、これも仕事としてやる分にはかまわないし何よりもう出会ってしまったからな・・・」

紅那岐の頭に浮かぶのは七星達だった、自分の妹・好いてくれる者・守ると決めた者の顔だった

「そお・・・ありがとう」

トールは泣きそうな顔をしながら礼を言った

「泣くな、綺麗な顔が台無しだぞ？」

紅那岐がさりげなく落としながら言つとトールは真っ赤になりながら怒鳴つた

「馬鹿なこといわないで！／＼／＼それで能力はどうするの！私の力じゃ後5個くらいしか与えられないわ」

それでも十分すぎると思う紅那岐であった

「今のところ3つ欲しいものがある」

「何かしら？／＼／」

まだ若干赤いツールが聞いてくる

「一つ目として俺の力をfortissimoに固定してくれ」

「二つ目はダイマラオ魔法球をくれこれに関しては中のレイアウトは自由にでき、時間の調整もできなおかつ老化しないものが欲しい」

「三つ目はfortissimoの能力と言ったが最低限のリリなの力と他の力も使えるようにしてくれ」

紅那岐の願いはかなり無茶苦茶であったがツールは納得した

「だましていたわけだしその条件はいいわ・・・最低限のレベルを教えてくださいるかしら？」

「空は飛べるじゃなくてその場でとどまれる位でかまわん。後は自分で移動するから、デバイスの形の七星をそのまま使えfortissimoの武器の入れ物にしてくれ、その他の力については関係ない武器を手にしても使えるようにな」

「分かったわ、ただfortissimoの能力でもニーベルングだけは与えられないは・・・アレは最高神のみの能力だから」

「やはりか・・・かまわん他の力が使えるならな」

「他のは大丈夫よ・・・ただ7個までしか使えないわよ?」

そう言つて紅那岐は納得した、正直7個もあれば十分である

「さて・・・別荘を作るのに時間がかかるから少し付き合つてあげる」

「何をだ?」

紅那岐が渋い顔をしていると関係なくトールは言い放つた

「幾ら能力を変えても使えなきゃ意味無いでしょ?だから最低限使えるようにしてあげるわ」

「お前にできるのか?」

「あげられるのに使えないつてそんな神は三流以下よ・・・というかあの力つて私達が元じゃない」

そして紅那岐はトールの特訓を受けた

「さて、別荘は作り終わったわある程度レイアウトは作つてあるから後は適当にやつて頂戴」

「世話になつたなトール」

「忘れてたわこれを渡しておくわ」

そう言つて紅那岐に一本の太刀と鬼の面を渡した

「これは？」

「貴方にあげてほしいと別次元の神から送られたものよ」

「そうか・・・最後に聞きたいことがある」

「何かしら？」

「お前達が始めたというゲームの名は？」

「・・・ラグナロクよ」

「そうか・・・ではな」

そう言って紅那岐は七星達がいるなのはの世界に帰っていった

「本当に変わった人間ね・・・この話を聞いても態度を変えないなんて」

そう言ってトールは自分の仕事に戻っていった

プロローグ（後書き）

レティ「言うわけで紅那岐の能力変更！」

紅那岐「続いて俺の能力の変換を書く予定です」

レティ「では！感想ありがとうございました」

主人公設定 ちよつと修正

赤羽 紅那岐

神によって転生した人物、実際は神のゲームに巻き込まれた人
過去の世界は異能の力を持った父と母を持つが世界は普通であった

武器

今までと異なりfortissimoの武器となった

モード1：イルアン・クライベル雷光を打ち砕くもの

ガントレット・パイルバンカーで殴りあい最適武器である

魔力サイクルの効果を持つ武器でありある程度の魔力はこれを通して自分の魔力へと変換できる

モード2：うたまる&メルセデス

白い銃（リボルバー）と黒い銃（オートマチック）である

魔力自体を弾丸に変えるため玉切れ自体は無い、弾速は訓練しだい銃口の下にはブレードがついてるため一応接近戦は可能

モード3：スウアフルラーメ

魔剣と聖剣の両面を持つ剣

通常時は黒き外殻を持つ剣であり開放時は光り輝く剣となるが強力すぎるため技は現在仕えない

モード4：グリモワール七つの大罪

七つの宝石のようなビットみたいなもの、それぞれに違った効果があり

赤Ⅱルシファー：嗅覚を奪う 青Ⅱマモン：触覚を奪う などのそ

それぞれの効果を持つが現在のはただのビット兵器のごとくそれぞれから魔力レーザーを放つことしかできない

モード5：ストリングロード

魔力のピアノ線を生成できるグロープ

線の長さは魔力量しだいで長くなる。絡み合わせて網見たくして対象を捕獲することも可能

モード6：ストリームフィールド

666本のナイフであり魔力消費量が少なく使いやすい

貫通力に長け突く攻撃にはもってこいである

また現在は使用不能だがこれの本来の能力を使えると全部のナイフと1本として打ち出せるようになる

モード7：高潔なる処女
アイキスマイデン

自分が思い描いた幻想の獣のみを召還できる、構成が不十分だと能力の劣化が激しい

現在使用とすると魔力切れを起す

スキル

fortissimoの能力を持つ、またおまけ程度の飛行能力は持っている

ダ・カーボ
復元する世界

対象を24時間以内の状態に戻すことができる

24時間以内にあつた人物を召還することができる

ダ・カーボ・セカンド
再現する世界

オリジナルにしたはずだが何故か直らなかつた

今まであつた人物の武器と技を顕現できる

ノイトウンゲ 九つの世界

此方はオリジナルに戻った能力は以下の通り
九つある平行世界にアクセス・リンクする力
命中率や結果を持つてくる。今までどおり力の差が天と地の差があると発動が失敗する

タイヒュランス 疾風迅雷

ネギまの雷天大壮と同じで自身に雷光の力を宿す、威力・速さを特に重視した能力
欠点は他の能力を使うときはこの力を吐き出すか打ち出すしかない

ヴァイス・シユバルツ 福音の弾丸

“音”を認識して追跡する能力

他は現在習得中

攻撃技

トールハンマー 総てを射抜く雷光

雷に変換した魔力を槍状にし敵へと放つ技

特筆すべきは速度、雷光の名の通りすさまじい速度を持って敵を射抜く

威力はリリなの風に言えばAAA+

シユトウラム・クロイツ 正邪必滅の流星群

魔導銃から生み出した音を追跡する魔弾を空中に固定する術式固定アインハルト
にその固定を解除する術式固定解除ラーゼンを使用する。さらに、空中に大量の魔弾を固定し、それを一斉に放つ広範囲殲滅魔法

威力はC（単発威力は低いが弾丸の数によつてはAAA以上）

ヴァイス・シユバルツ
福音の魔弾

上記の攻撃の単発版だが威力は上以上である、左右の銃の単発のため魔力を極限までこめられる
これも音を頼りに追跡をしていく

威力はA A +

フェンリスヴォルフ
神討つ拳狼の : 丸は使う武器で変わる

本来なら魔力パンチだが、あらゆる武器を使える紅那岐はこれだけはいろいろに応用を利かせた

剣や銃でもいろいろなもので代用可能

威力は魔力しだいA↘

レーヴァテイン
迷い無き光闇の剣

本来なら穢れ無き桜光の剣なのだが、光と闇を内包する紅那岐はこの力となる

簡単に言えば収束攻撃である、威力がありすぎるため反動はでかい
威力はSS↘

他は現在訓練中

その他スキル

アイテムクリエイト
武器・装飾具精製能力

恋姫世界ではまった鍛冶の延長で、魔石や鋼を練成できる
無から有は作れない

逆に素材さえあれば約束された勝利の剣クラスの宝具ではない限り
作れる

最大はBまでの宝具なら時間をかければ作れる(破戒すべき全ての
ルールブレイカ

符は使い捨てなら何とかなるが、現状それを理解してないため作れない)

その他武器

劣化版覇煌刃・劣化版崩嵐槍・鬼菩薩・豪竜胆・龍騎尖・名前の無い刀が多数

主人公設定 ちよつと修正（後書き）

レティ「こんなところです」

紅那岐「ちよい、ちよいずるが入ってますが簡便してください」

レティ「では」

主人公以外設定 修正（前書き）

飛鳥忘れてたあああああ

主人公以外設定 修正

赤羽 七星

紅那岐のデバイスの人格である

紅那岐が能力を変えても顕現できる。もちろん逆も然り

能力は紅那岐の魔力供給量しだいで変わる

能力等は一部同じだが違うのもあり

スキル

九つノートウングの世界と復元ダ・カーボする世界系が使えない代わりに無フリーシンガメンに還エイレナイオスった少女（

“現象”の運動エネルギーを変化させる能力）と踊り狂う悪魔（あらゆる物体を魔力で自由自在に動かす能力）を使える

月村 すすか

変化は無いが、紅那岐と共同で別荘にてデバイスをパワーアップ

ルナティック ルナティック・ソル

今まで紅蓮のような爪形デバイスだったが使いづらいたるところとで可変式ガントレットに変わった

またランスロットの銃のような武器も使えるようになりカートリッジシステムを搭載している

フルドライブはアルビオンと聖天八極式の間でウイング・左手にシールド型ガントレット・右に可変型ガントレットをつける

バリアジャケットは何故かC・Cの2期に着ていた黒い奴みたい
な感じ

呂奉 恋

呂布奉先のそれぞれ最初の文字を取った名字

年齢：?? 9歳

神が気を利かせて若がえらせた

【基本能力】

【筋力】 : A +

【魔力】 : C +

【耐久】 : A +

【幸運】 : C

【敏捷】 : A

【スキル】

騎乗 : C

馬や幻想種には乗れるが近代のものは乗れない

武芸 : A

武芸に精通してた為あらゆる武器を使える

飛翔 : EX

ある意味カリスマの能力、天下に名を馳せたものだけが持てるスキル

1対1の戦いにおいて能力が跳ね上がる、また兵を引き連れる戦いにおいても自身が前に出ることによって能力の補正が入る

【宝具】

ゴッド・フォース
軍神五兵：EX

5つの姿を持つ方天画戟の能力いろいろな武器になるため状況を選ばない

詳しくない人はFate/EXTRAをやってみてください

【武器】

方天画戟

神と駄神（作者）の力によってFateの方天画戟となった

また、恋姫の方天画戟の形態にもなれる・・・と言うか駄神の力で方天画戟の絵が存在してるものに全部なれる

陸戦SSSランク

赤羽 飛鳥

多重人格+それぞれの肉体を持つもの

実際は紅那岐より年齢は上だが、肉体と精神は成長しておらず見た目ともども5歳児

戦いも遊びとしてしか認識していない

魔力量が無限に存在しており自身の能力と合わせて実力はある意味最強

【スキル】

ワンオブスタイル

一つの理（能力修正しました）

基本的には見た技のコピーができる

また応用も可能であるが5歳児の精神ではそれはできない部分がある
また見た技のコピーであるが実際は・・・

自身が見た時に思った能力になる

例：相手が消える 消えることができるという事であり自分も消える（消える＝何処にもいないなので攻撃を当てることすら不可能）

主人公以外設定 修正（後書き）

レティ「その他終了！」

紅那岐「おい・・・恋は狙ってたろ？」

レティ「まあね！だって恋を仲間に入れるのは決まってる能力どうしよう？・・・あ！Fate/EXTRAの能力あるじゃん！って気づいてね」

紅那岐「ある意味チートだな・・・俊敏以外は能力まんまだし」

レティ「まあね！ただ恋は飛べない！これは決定事項だよ」

紅那岐「あっそ・・・」

レティ「では次回で！」

EP 1 デバイスを作ろう(前書き)

これから副題を乗せられるのは乗せる予定

Ep 1 デバイスを作ろう

さて、この世界に戻ってきてから少し状況整理をするのに時間がかった

とりあえず時間軸で言うと七星達は1週間くらいしかいなかったらしい(トールの使いにすっかり説明は受けていたようだ)

問題は俺だった・・・2ヶ月ってなんぞや?ぶっちゃけ俺あいつらと別れたのどれくらいかはわからんが2ヶ月のラグはひどいよね

「それにしても別荘ってこんな凄かったか?」

トールにもらった別荘に来ていて今レイアウトの確認が終わったんだが・・・

訓練スペース(広さは把握できなかった)・動物エリア(なんか多種多様な動物がいた)・幻想エリア(幻想種がたくさんいた・・・何故か其処に碎刃がいたのが驚きだ)・鍛冶場(隣にモンハンの村の採掘エリアがあった・・・魔石とかオリハルコンや宝石が一日に10個手に入るとか)・開発室(ハッキングよろしくな機材から本当にいろいろなものを作るスペースだった・・・知識がないと作れないから意味なくね?)・休憩所・寝室・ゲームエリア(取説曰く最新ゲームが発売されると勝手にあるらしい)

どうよこれ?与えられるものでくれと言ったのは俺だが自重しないじゃすまんぞ?って感じだった。しかも移動するには転送しなきゃ移動できないほど広い・・・既に別荘じゃないよね?

今はある目的のために開発室に来てるんだが

「紅くんこれ本当に凄いな!」

と瞳をキラキラさせて話かけてくるすずか・・・マッドの片鱗が今こじに

「失礼なこと考えてると抜き取るよ？」

「なにを!？」

俺がツッコミを入れても聞いてないのか機材を見てうきうきしていた

「さて、もらったこれを携帯するためのものを作るか」

俺がもらった太刀と槍と面は正直こちら辺に置いておくのも危険である・・・てか槍については絶対零度すら超えてるから迂闊において置けない、今は太刀と一緒に置いておくことで±0状態だが

「うーん・・・俺の現状を考えるとマジで王の財宝ゲイトオブパピロンが欲しい・・・」

といっても金輪際能力てきな部分ではもてないのでしょーもないので考えているんだが・・・

自分の才能の無さが恨めしくなっている時にすずかが話しかけてきた

「ねえ？私が考えたこれどうかな？」

すずかが見せてきたデータを見ると・・・

「お前マジでマッドになるぞ・・・」

データの内容が四次元空間のようなものを入れ物に対して付属するものだった

分かりやすく言えば四次元ポケットを作れるというものだった

「まあいいやすすかこのデータ借りていくね」

そう言つて俺は自分の場所に戻りデータを打ちながら作り始めた

なんやかんやで1週間くらいで作れた・・・八口とかカーペンターズとかが何故かいて作業を手伝つて貰えたんだが、気にしてはもらえなかった

「次は鬼菩薩に能力の付加をしなくちゃな・・・」

別次元の人からもらった鬼菩薩、使い方はやつぱ回りに浮かせないという意味が無いでしょ！つてことで考えていたら魔石のことを思い出した

「そついや、魔石をつけて擬似的に浮かせばよくな？」

そう言つて俺は鍛冶場の隣にある採掘所まで転送した

カーッン！・カーンッ！

ピッケルで掘つたらいろいろ出てきたがどれがいいだろう？普通の宝石だと負荷に耐えられないしかとってオリハルコンじゃ魔力伝達率悪いし・・・

と思つたらひときわ目を引く魔石を見つけた

「これは・・・ミスリルか？」

存在しないはずの鉱石として有名な奴だな

「これを使ってみるか」

そう言っただ俺は戻り鬼菩薩にミスリルを頭の部分に組み込んだら見事に成功した

ビームは出せなかったけど、何故かバリアを張れるようになって防御機能としては十分すぎるほど役に立つものが出来上がった

「後はこいつに組み込んで粒子化すれば問題ないだろ」

そう言っただ俺は一通りの武器をそれに入れた

《マスター名前をください》

忘れてたよw

名前はファフナーに決めました

能力はほとんど武器の貯蔵と非殺傷設定をつけるかつけないかのみとなりました

Ep 1 デバイスを作ろう（後書き）

レティ「言うわけで帰ってきててもいきなり別荘で一日をつぶしている紅那岐でした。また今回から紅那岐ではなく別の人の出演となります・・・どうぞ」

トール「はじめましてトールよ」

レティ「紅那岐を転生させた神トールをこれからパーソナリティーとして迎えます」

トール「よろしくね」

レティ「さて・・・やりすぎじゃね？」

トール「やるなら徹底的にが心情だからこれぐらい普通よ」

レティ「普通なのか？まあいいや聞きたいことがある」

トール「何よ？」

レティ「トールといえば神話じゃ髭もじゃなオッサンじゃないっけ？」

トール「そこはアレね需要にこたえて・・・てかアレはあの馬鹿^{オーティン}が人間に伝えるならこっちがいいだろうとか言っただの姿になったのよ」

レティ「なるほど、強さに関して言えば神の中でも最上位の位置

にいるトールですが、実際のところ紅那岐の今の實力は？」

トール「並みの転生者じゃ瞬殺できるくらいにはしたわよ？てか私と修行してダメージを食らおうものならもう一回調k・・・もとい修s・・・でもなく修行をしてもらわないと」

レテイ「怖い言葉が出てきますが時間もあれなのでこの辺で」

トール「感想ありがとうありがとね」

EP 2 飛鳥の実力は？

現在訓練スペースには紅那岐以外の関係者がそろっていた

「もう、お兄ちゃんったら何処行っちゃったのよ」

「ね〜帰ってきたらあんなことやこんなものでやってあげるんだから」

「……？」
「コテン」

「兄様何処いつちゃったの？」

七星・すずか・恋・飛鳥と各々反応は違った……違うのか？
因みにそのころの紅那岐はと言つと……

「ほらほら！その程度じゃ上位の転生者に苦戦するでしょ」

「ぎゃああああっ！」

「ほら休まない」

「くっそ！総トルハンマーてを射抜く雷光！」

「なにこれ？いい総トルハンマーてを射抜く雷光つてのはこう言つのを言つものよ」

「ちよっ！？……プスン」

とツールに拷m・・・調k・・・いじm・・・修行を受けていた

「それで私は何するの？」

と無垢に見える飛鳥が聞いた

「ん？お兄ちゃんが貴方が最強って聞いたからちよつと試してみたいな〜って（妹は一人で十分よ！）」

言葉とは裏腹に5歳児に対してかなり黒い七星であった

「遊ぶの！いいよ！」

飛鳥は飛鳥で遊び感覚でOKを出してしまう

「じゃあ行くわよ！ジークルーネ！」

《セットアップ》

ジークルーネ：紅那岐が七星に作ったデバイスで紅那岐がいないときはグランシャリオに内蔵されてるのが使えないため作ったもの
能力はランチャー・ビットのみの簡易であるがカートリッジシステム搭載しているため能力は高い（七星が紅那岐と違って魔道師として戦えるのはデバイス人格のため）

「何処からでもいいよ！」

と飛鳥は可愛くガッツポーズをしていた
見ていた恋とすずかはその可愛さにダメージを受けた

恋にダメージだと!? BY作者

変な電波を受けたが気にせず戦いは始まる

「行くわよ！そらそらそら」

七星はライン・ヴァイスよろしくな高速移動をしながら分身攻撃を
しだした

別荘の中でなら七星は紅那岐がいなくてもSS並みの実力は出せる

「えい」

飛鳥がなんとも言えない掛け声を出すと七星の分身と同じ数だけの
自分を創り迎撃していた

「ちよっ!?!」

七星が驚いて止まっても飛鳥の分身は消えていなかった

「「「「「あれ？沢山のお姉ちゃん消えちゃったね」「」「」「」

と其処に残ってる本体+分身が一斉に言った

「何で消えてないのよ!」

「だってお姉ちゃんが沢山いたんだよね?」

そう、飛鳥の理解は七星が沢山になって攻撃をしてきたという理解
だったために自分の分身を沢山作り迎撃をしただけである・・・そ
の数20

「お兄ちゃんも言っただけ、見た内容を自分の都合にできるスキルは反則過ぎる」

「今度は私の番だよ！」

すると21人の飛鳥の腕には雷光がともしだした

「うそ！？ちよつと待って！」

七星は慌てて止めようとしているけど間に合わず

「いけとーるはんまー」

言葉とは裏腹の高威力の雷光の槍が七星に襲う

「ぎゃあああああ・・・」

どんなにがんばっても紅那岐の総てトールハンマーを射抜く雷光と同じ威力のを2
1発食らえばひとたまりも無い七星・・・ご冥福をお祈りします

「死んでないよ！」

真っ黒こげで起きた七星

「あゝたのしかつたまた遊んでね」

そう言っただけ飛鳥はどっかに言ってしまった

「あんなちつちやな子に負けた・・・お兄ちゃんにお仕置きされる」

o r z

「(ぼん)・・・ドンマイ」

「・・・」なでなで

すずかと恋に励まされている七星であった

勝負の結果を知った紅那岐に訓練と言う名のやつあて・・・お仕置
きを受けたのは言うまでも無い

「誰が教えたのよ!」

「飛鳥だこのバカ!」

「ふええええええええええん・・・」

Ep 2 飛鳥の実力は？（後書き）

レティ「飛鳥上げつないないあ〜」

トール「あの子の力はある意味創造の域だから勝てるほうが少ないけど・・・5歳児ってことを考えれば勝てる方法は沢山あるけどね」

レティ「ふ〜ん、話は変わるけど紅那岐の修行はあることがきっかけでやることになったんだけど・・・実力は？」

トール「まだまだだね、私の分身（実力の5%）が手加減して漸く虐められる程度だから」

レティ「虐める言っただよこの人・・・5%ってどのくらい？」

トール「さあ？比べる相手いないし」

レティ「そっか・・・」

トール「まあ最低でも人間の枠はまだ超えていないからまだまだ強くはなれるわよ？」

レティ「何処まで持っていくんだか」

トール「さあね？では感想ありがとうございました」

レティ「次回もよろしく」

EP 3 はやてに合いに行いっ(前書き)

当分は日常編

はやての喋り方わからん！違和感あつたら教えてください

EP 3 はやてに会いに行こう

紅那岐 Side

どうやら原作開始まで1ヶ月をきったばい

ばいと言うのはだいぶ記憶から薄れてきてしまったので流石に詳しい時期まで分からなくなってきてしまったんだ

因みにアースラなどのコンピューターにハッキングをかけて分かったことだが・・・転生者が俺以外にも最低2人はいるみたいだ

ツールを確認してみたところリリなの世界は人気がありすぎて管理が神全体になったようだった

俺がいない間に海鳴に一人・アースラに一人介入していたらしい(そこでちよつとした事件があったようだが、記録がされていなくて諦めた)

まあ別にねえ？俺って悪役だしどうでもいいやと思っただけ

そんなこんなで復学手続きが滞っているので仕方なしに家で暇をもてあましている(別荘は時間の感覚が狂いそうになったので一旦自粛中だ)

「さて、今日は姉さんいないしどうすつか？」

「任せてください！私がしっかりとお世話をしますよ！」

というドジツ娘メイドのファリンが言っているが信用できんし」

「ひどいですよ紅那岐さん！」

「心を読むな！ドジツ娘！」

「声に出してたよ兄ちゃん」

飛鳥が言ってくる・・・俺としたことが

飛鳥の頭を撫でながら考えているとすずかが言ってきた

「紅くんひさびさにはやてちゃんに会わない？」

おう・・・タヌ烏を忘れてたぜ

「そうだな、久しく会ってないからいいかもな」

そう言っつて俺は携帯を取り出し電話をする

トゥルルルルルル・・・ガチャッ！

「はい八神です」

電話に出たのははやてではなく別の女性メだった

「誰だ貴様？管制名を名乗れ！」

「ええ！？」

俺のポケに対応できないなんて本当にはやての家か？

「ちょー、誰か知らんけどうちのこをいじめんといてや」

とはやてが出てきたので改めてポケよう

「少佐ですか！？准尉であります其処に不審者が現れたようです直ちに援軍に向かいます！」

「・・・分かった！器官の援軍を期待しよう」

と話し終わり電話を切る後ろのほうで「はやてちゃん何をいつてるの？」と聞こえてきたが気にしてはやっていけないぞ？

因みに訳すと「今からお前んち行くけどいいよね？」「分かった待ってるで？」と言つ内容だ

「と言うわけで行くぞ〜・・・ファリンは適当にやっついて、飯はあっちで食ってくるから」

「うう・・・ひどいですよ〜」

なんかいじけていたけど俺達は出かけた

S i d e E n d

はやて S i d e

久々の友人やたつぷりとおもてなしをしてあげようと私は電話を切って準備をしようとした

「はやてちゃんさっきの電話は？」

さっきのダメージが抜けてへんな？若干涙目や

「ん〜？友達やよ、シヤマル達が来る前に知り合ってたな最近なんやらどっか行つてたみたいやけど帰つてきたみたいなんよ」

そう言つて私は出迎えの準備をしようと思つて居間に行こうとするとメールが来た

『紅くんがなんか夕飯作つてくれるって期待していてね *。』

・（*、。 ^人）'。*』

すずかちゃんからのメールや・・・なんか顔文字すごいなあ

「なんか夕飯ご馳走してくれるみたいやから準備しよか」

そう言つて私は居間へ向かつた

Side End

飛鳥 Side

なんか今日はアスカは眠いみたいでずっと寝ていた、真夜中までゲームやつてるからだよ

だから珍しく今日は僕のばんみたいだ

兄ちゃんが友達に会いに行くつて言うから着いていくんだけど普段一緒じゃないから今日はとことん甘えるぞ〜

「えへへ〜兄ちゃん〜」

「どうした？今日はやけに甘えん坊だな」

そう言っつて僕を優しく撫でてくれる兄ちゃん大好きだ！
なんか姉様たちが見ているけどわかんないや

「よい・・しよつと！」

僕は兄ちゃんの背中によじ登り体を固定する、支えてくれないけど
兄ちゃんはいやなことはいやっつて言っつからだいじょうぶだよ

「落ちるなよ〜」

「わ〜」

そう言っつて兄ちゃんは体を揺らして遊んでくれる

でなんかお買い物してから行くっつていうからスーパーで買い物し
てる時にお菓子をお願いしたらすんなり買っつてくれた、姉様達は甘
いっつて言っつけど何が甘いの？

で兄ちゃんにおぶられながら兄ちゃんの友達の家の前に来たらネコ
さん達がいた

「あ！ネコさんだ〜」

「転ぶなよ〜」

分かってるよ！アスカじゃないからね、魔法はアスカのほうが得意

「改めて久々だなはやて」

「久しぶりや！みないうちにえらい増えたなあ」

「おお！？自己紹介しないとダメだなお互い」

そう言つて俺は飛鳥と恋をはやては今いる金髪お姉さんと犬をそれぞれ自己紹介した

「・・・呂奉 恋 よろしく(コクン)」「ピロピロ」

「赤羽 飛鳥ですよろしくお願いします！」

「私ははやてちゃんの親戚のシャマルって言います、先ほどの電話に出たのも私です」

「・・・」

「この子はザフィーラっていうんよ」

シャマルと名乗った人はなにやら警戒をしているようだ・・・さっきの電話のせいだな

ザフィーラにいたつては既にヒトリによつてもみくちやにされている

「すまんなはやて俺の親族が」

「かまへんよ子供のすることや！因みに男の子？女の子？男の娘？」

ヒトリについて聞いてくるはやてだが最後のはなんだ？お前そつち

方面もいけるのか

「気にするな！俺の家族ってことだ」

そう言っ言葉を濁す俺、飛鳥にいたっはいつどっちが出るなんて決まってないからなあ・・・普段誰かに紹介するときは関係者以外あいつはアスカと名乗るし、俺も普段は飛鳥って呼ぶし

「それにしても似てへんけど？」

考えているとはやてに更に聞かれた、どうやら兄弟っことで納得したようだ

「養子縁組で俺の戸籍に入っただけだ、因みにいなかったのはこの子を引き取るのにいろいろあってなあ、だから帰るのが遅れてしまっただ」

そう言ったら納得された

「さて、積もる話もあるだろうからな、コーヒーを入れよう」

「何でうちの家の構造把握してるんや！」

ツッコミが聞こえたが無視だ無視！紅茶は苦手なんだよ、だからコーヒーがいいんだ！

Side End

はやて Side

くーくと話をしていると面白いわ〜、ボケとツッコミを両方できるからやりやすいで

うちの子達はええこやからうちがボケても誰もがツッコミをくれへん・・・ザフィーラがたまにボソッとツッコミを入れてくれるけど私はそれじゃたりへん！

「そろそろ夕飯の支度をするか」

そう言ってくーくんが席を立つ、時間を確認してみるとまだ4時やった

「はやくへん？後1時間くらいは大丈夫やる？」

「大食らいがいるんでね、後1時間も話してたら準備がまにあわなんだよ」

そう言ってくーくんが玄関に向かっていった、材料をもってくるんやね・・・って

「多っ！？幾らなんでも多すぎや！」

私がツッコミを入れる理由は簡単や幾らなんでもスーパーの大袋6個って

「恋にとっちゃこれくらいなきや足りないんだ、まあ食わん時は食わんから大丈夫なんだがな」

そう言っって重そうな袋を難なく運んでいるくーくんにも驚きや、幾ら身長が高いからって小学生が持てる量やないで？

「お兄ちゃん手伝うよ?」「あ、私も」

そう言つて七星ちゃんとすずかちゃんが行くけど・・・

「七星は論外、すずかはガンバレ」

七星ちゃんはどうやら料理はダメみたいやね、うちのシャマルとどつちがすごいんやろ?

「つてうちも手伝うわ!」

台所に行こうとすると

「いや、俺の料理を食べて欲しいんだはやて」

とまじめな顔をして言ってきた・・・あんまみつめんといてな、流石に恥ずかしいで

実際は「今日は俺が作りたいただけだから気にすんな」と軽く言っているだけである・・・あれ?何処でフラグたったの?

そんなこんなで飛鳥ちゃん(呼び捨てかちゃんずけがいいって言われた)と恋ちゃんは手伝う気が無いのか最初からザフィーラと遊んでるな、そんな時にうちの末っ子が帰ってきた

「はやてたたいまー・・・誰だてめーら」

「なんだこのちびっ子は?礼儀がなつてねえな・・・」

くーくんがすごんでる・・・絶対悪乗りやなあれは

「うつせえ！誰がチビだ！」

ヴィータが絡むが・・・あかんよ！くーくんあほなくらい強いんだから

「遊びはこれくらいにしてこれでも食つてろ」

そう言つてくーくんは何故か持つていたチ　ツパチ　ツプスみたいなのをヴィータの口に突っ込んだ

「俺ははやての友人の紅那岐だ覚えときな」

そう言つてすずかちゃん達の自己紹介を終えて再びくーくんは料理に戻つていった

ヴィータはくーくんにもらった飴を一心不乱で舐めていた、私もちよつと舐めさせてもらったものすごく美味しかった・・・後で聞いたら手作りやつて、何処までスペック高いねん

シグナムも帰つてきたときにもちよつとひと悶着あつたが恙無く挨拶は終わりに食事

「さつきも言つたが多くあらへん？」

「ん・・・クイ

とあとで恋ちゃんをさすと其処にはよだれをいっぱい貯めて触角がピコピコ動く恋ちゃんが居た・・・マジでかわええな！

「さて揃つたことだし・・・頂きます！」

みんなで挨拶をして食事についていった
以下それぞれの反応

ヴィ「ギガ・・・いやテラうめえ！」

シャ「どうやったらこの味に・・・」

シ「うむ・・・最高だ」

ザフィ「・・・むぐむぐ」 肉系のものを作っであげている

は「負けた・・・いや勝負すらになってへん」

す「相変わらずのだね・・・」

七「お兄ちゃん結婚して！」

恋「はぐ・・・むぐ・・・はぐ」 ひらすら食っている

飛「あ〜ん、美味しい兄ちゃん！」 隣に座って食べさせて貰っている

Side End

紅那岐 Side

料理は概ね好評のようだった

「さて、これでお暇させて貰おうか」

そう言っで立ち上がるとはやてがビックリすることを言っできた

「泊まっでいかへんの部屋の準備をしてたんやけど」

「そっだよ兄ちゃん！泊まっでいけよ」

ヴィータには特になっでたな

「気持ち嬉しいんだがな、うちのメイドからさっきいじけたメールが来てな・・・」

そう言っで俺は携帯を出すと其処には

『どーせ私は存在意義の無いただのドジですよ イジイジ（ ）
（ ）』

見せるとはやてたちは若干引いていたが了承してくれだ

「じゃあな！」

「ほなまたね」

「次はぜひ手合わせを」

最後のはシグナムだが、ドンだけバトルマニアだよ！とツッコミたくなる人の気持ちがあつた。実際武道をしてるといったら俺と恋にしっこく頼んできたよあの人
そんなこんなで家路につく途中男性に引き止められた

「まで、あいつらにはかかわるな」

そう言ってきたんだが・・・マジで思い出せんな

「だが断る！なにゆえ友人について家族でもない貴方に指図されな
いといけないんですか？」

「あいつらは魔法使いだ！貴様らを呪うぞ」

うん、俺以外もきちんと痛い人を見る目になっているな

「おい聴いたか？魔法使いだってあの歳になって、きっと今「俺は
自分の夢に向かってるんだ！」とか言っつて自宅警備員してるぞあ
い
っ
」

とこそそそと（聞こえるように）言っつてると

「黙れ！いいな警告は一回だけだ」

そう言っつて消えた・・・目の前で魔法使うなバカか？
そんなこんなで家に帰っつていった俺らであった

EP 3 はやてに会いに行こう(後書き)

レティ「はやてを出してみました」

トール「きちんとした理由はあいわよ」

レティ「で今回は飛鳥について」

トール「あのこがどっちになってるか分からない人多いんじゃない？」

レティ「読んでる人いるのか分からないけどここで改めて容姿などの説明を」

トール「容姿はブラックラグーンのヘンゼルとグレーテルを5歳児にした感じね」

レティ「因みに飛鳥のくくりで出してるのは需要にこたえて女の子がいい人は女と見てもらうため、シヨタっ子がいい人はそう見てもらうためにあえて名前の表記は飛鳥としています」

トール「細かい見分け方は呼び方の違い、アスカなら紅那岐の事を兄様他の男性なら 兄様、女性陣は姉ちゃん」

レティ「ヒトリの場合は、紅那岐を兄ちゃん他の男性を 兄ちゃん、女性陣は姉様と呼びます」

トール「それ以外は基本的には喋り方は変わらないのでわからないかも？」

レティ「気まぐれで両方出る場合はあります」

トール「では感想ありがとうございます」

レティ「次回は武器を作る紅那岐になります」

トール「じゃあね」

EP 4 (前書き)

友人に東方でいいの無いと聞いたら夢想夏郷 - A Summer

Days Dream - を紹介されてみたら面白かった

意味？知らないから知識として吸収しようとしたんだw

「自分に起きた異変」

「やはり起動できないか」

そう言つて自分におきてる異変を感じながら紅那岐は己の能力の再確認を行っていた

「1・2・3・4・・・後は出ないな」

紅那岐が確認しているのは自身の武器と能力が詰まったデバイス・グランシヤリオ

何が出ないかと言うと彼の武器は全部で7個、しかし現在出せるのは4つまでであった

「トールに確認するしかないのか」

そして彼は自分で作った魔法陣の中に入ってトールのいる場所に向かった

「トールいるかぁ！」バアンツ！

遠慮もなしに思いつきり扉を開け放ち中にいるであろうトールに声をかける

「ぐっ・・・！ちょっと静かに入ってきてなさいよ！ ゲホゲホ」

中でのんびり茶を飲みながら急な来訪によって喉に詰まらせて咳き

込みながら紅那岐を睨むトール

「そんな事より聞きたいことあるんだが・・・」

そう言っただけ彼は自分に起こっているであろう異変をトールに話した。
・
・
すると驚きの回答が帰ってきたのであった

「それじゃ何か？俺の力が上がって3つは耐えられないから使えないのか？」

「端的に言えばそう言う事ね」

つまり紅那岐の能力に武器がついていけなくなってしまったのである

「・・・七星ジークルーネを貸せ」

今まで後ろにいた七星にジークルーネを借り何かの作業をしている
紅那岐

作業が終わりジークルーネを返す紅那岐

「お兄ちゃん何をやってたの？」

「4〜7までの奴をお前の奴に組み込んだ、その代わりにランチャーとかはなくなっただけだな」

「ホント!？」

《本当ですマスター今の私には七つの大罪から高潔なる処女までが
グリモワール
アイギスメイデン
組み込まれています》

「俺はガントレット・銃・剣があればいいから後はお前が使えばいい」

そう言つて紅那岐はツールを軽く睨む

「な、何よ!」

「何、少し訓練をしてくれ今までのように何でもできるわけじゃなくなつたからな」

「・・・後悔しないことね」

そう言つて紅那岐はツールと別の場所に向かつていった

「でもお兄ちゃんグリモワール七つの大罪使えるのに何で私に?」

《マイスター曰くそれだと遠距離の武器が無くなってしまうからだ
そうです》

「お兄ちゃん・・・」

なにやら感動をしている七星

「ますます食べなくなつちやつたじゃん!」

・・・何処まで行つても変態妹であつた

「シマツジメン極光の断罪者は惜しかつたな・・・」

「ほらほら 余所見をしてる暇は無いわよ」

「しまっ！？ぎやああああああ」

薄れいく意識の中で新しい刀が必要だなと思っていた紅那岐であった

End

く刀を作ろう

カーン！カーンッ！

其処に響き渡るは金属同士がぶつかる音だった

「・・・」

邪念を持たずただ無心にハンマーを振るう

カーン！カーンッ！

「後は研いで終わりだな」

出来上がったものをみて次の場所へと向かっていった

「完成した、今度こそうまくいってくれよ」

そう言って次は訓練スペースに向かっていく

ヒュンッ ヒュッ

「普通に振る時は問題は無いな・・・じゃあ！」

すると体からは莫大な魔力が噴出してきた、刀は今までと変わりふるふる震えていた

「ちっ・・・やっぱダメか」

舌打ちをし魔力を止め刀を見ると何もしていないのに罅が入っていた

「これで何本目だ？いい加減魔力に耐えられる刀を作らないと原作介入ができないぞ」

面白くなさそうに言い放つ、彼が今持っている剣は西洋剣であり彼が好きな剣は刀という風に矛盾している

「玉鋼だけじゃ流石に無理があるかな、重ね刃にしてもこれじゃあ・・・魔石を混ぜてみるかな？」

妙案が浮かんだらしくまた火事場に戻っていった

・
・
・

そして別荘内で1ヶ月ほどたつと其処には5本の刀が並んでいた

「満足に作れたのはこれだけか、後は耐えられなくて打ってる段階で砕けちまった」

彼が満足そうに見ている刀は黒・蒼・白・翠・紅のそれぞれ刀にしては変わった色を持つ物だった

「とりあえず振ってみるか、これでダメならスウアフルラーメを開放しないで使うしかないな」

訓練所にやってきてみると其処には多種多様なが存在をしていたのはずか謹製である程度自分が望む動きをしてくれるものである

「では行くぞ！」

刀を持ち的に向かって走り出していった

・
・
・

「ふ、フフフ・・・やっとできたあああー！ー！ー！ー！」

歡喜の雄たけびを上げながらガッツポーズをしている

「長かった・・・本当に長かったよ」

なにやら感涙しているようだったがここには誰もツッコミを入れてくれるものはいなかった

「さて、後は名前だな」

そしてそれぞれの刀に名前をつけていった

黒 〓 絶影
白 〓 白凰
蒼 〓 蒼麟
翠 〓 天翠
紅 〓 輝紅

とそれぞれ名づけていった

「・・・これって質量兵器になるのかな？」

最後の最後でどうでもいいことが頭に浮かんでしまった

Ep 4 (後書き)

レティ「言うわけで紅那岐の能力が劣化した!？」

トール「劣化と言うよりより選定をしたといったほうがいいんじゃない?」

レティ「私が作ってるのにどんどん変わっていく紅那岐w」

トール「ひどい人ね」

レティ「沢山能力あっても使わないかな?って思っちゃってさw」

トール「だめな人」

レティ「そういうな、では感想ありがとうございました」

トール「またね」

EP5 AS 最初の介入前編（前書き）

原作始まります

EP 5 AS 最初の介入前編

その日の夜紅那岐はなんとなしに本を読んでいた、近くにはさすが・七星・恋がいる

飛鳥は既に寝ておりのんびりとした時間を有意義に過ごしていた紅那岐だったのだが・・・

ピンッ！

どこかで魔法が発動したのを感じた

「ふ、フフフ・・・そうか俺には平穩は訪れないのか、フフフ」

どこか据わった目をしながら怪しく笑う紅那岐、さすが達はそれを見て相手に同情した

最近何故かボロボロの状態が多い紅那岐であるがその分ストレスが異常に溜まっていることも知っているからである

「まあ、俺が出ないのが一番だけどな・・・もし俺が出ることがあるなら、フフフ」

やはり精神的に安定してないのが分かる一行だった

現場に着くとちょうどなのはが撃墜されたところだった

「ありや、なのはが撃墜されるなんてな〜・・・アレはヴィータか？」

どちらとも知り合いな紅那岐はのんびりと状況を見守ってた

「そんな事より助けてあげようよ！さすがに分が悪いよ！カートリッジ無いのに戦うのはきついから」

なのはの親友のすずかはなのはを助けようと提案するが紅那岐は却下する

「ダメだ、てか知らん奴がなのはのそばにいるから大丈夫だろ？」

視線の先には今までいなかった魔道師がいた、それにおいて助ける意味が無いなと判断する紅那岐である

(アレはフリーダムか？なんかいろいろ付いているが？)

Side End

フリーダム？ Side

始めましてだな！俺はちょっと前にこの世界に転生してきたいわゆる転生者だ！神の奴が力をくれるって言うからそこでガンダムでフリーダムの力を人間の姿で使える力をもらったんだ！しかも神がズルをしたらしく能力はオールSSSだったらしい

前から夢だったリリなのの世界にいけるって言うんでそりやもう興奮したね！これで憧れのなのはを落とせるぜ！今回はちょっと遅れちまったがこれから助けてあげればそりや高感度も上がるね！

手な訳で、ヴォルケンリッターには悪いが俺のためにの布石になつて貰うぜ

「よくもなのはやってくれたな！覚悟しろこのチビ！」

そう言つて俺は背中中の羽を広げて飛び上がる！フルドライブは必要ないなこんな奴に

「うつせえ！てめえも敵だ」

そう言つてロリやろつは俺にハンマーを向けてくるが、PS装甲のジャケットに打撃が効くと思うなよ？

ガキーンッ！

「なんだって！？」

あ、衝撃が吸収できないの忘れてた、すげえ痛いぞ……この痛みも含めてお返ししてやる

「痛えなこいつ！」ブンッ！

ビームサーベル（魔力剣）を抜いて相手を斬る

「ちっ！」

くそ、すんでのところで避けられちまった

「てめえ何者だ！」

「俺の名前はキラ・ヤマト（大和 吉良）覚えておけ！」

そう言っ羽のバラエーナを撃とうと魔力を貯めているとピンクの髪の剣士と青い犬男が現れた、アレはシグナムとザフィーラだったか？シグナムはいい女だ

「大丈夫かヴィータ？相手を見る一人ではやられるぞ！」

シグナムが此方に構えながらヴィータに説教しているとこっちの援軍も到着したようだ

「大丈夫かキラ？」

其処に現れたのはダブルオーの姿をした俺の相棒だった

Side End

ダブルオー？ Side

やっと俺のターン！俺もここにいるキラ同様転生者の一人だ！どんなテンプレ？って最初は思ったが世界がリリなのなら話は別だ！最終的にあのエロエロボディのフェイトを落とせるってなら転生なんてこっちからお願いしたいぜ！

神の奴が力をくれるって言うんで俺はダブルオーの力を望んだんだ、だって最終的に最強あいつだべ？それを人間として使えるならヒーローなんてちよろいぜ！

って思い転生したらなんか他の転生者がいたんだよね、で話してみるとなのは落としたいらしいから俺達は協力することにした、実際一緒に戦うとこれほど頼りになる奴もいないしな

さて、フェイトにいつちよいいところ見せてフラグの強化をするかな

「遅れてすまねえ!」

「気にすんな俺達2人がいればあいつらなんて楽勝だぜ!」

相棒がいう、そうだな俺達に敵う奴なんているわけねえ! ってな訳で行かせてもらうぜ

って話をしていたらフェイトが突っ込んでいた

「フェイト何を先走って!?!」

「きゃあああああつ!」

一瞬目を離すとフェイトはデバイスごとシグナムを斬られていた
ぜってえ許さねえ・・・ぶっ殺す

「相棒いくぞ!」「おう!」

相棒もなのはが落とされていたらしく切れていて今ので完全に切れたな

「刹那・F・セイエイ目標を迎撃する・・・まずはこいつだ!」「
なら俺はこれだ!」

俺はGNソード?のライフルモード、相棒はビームライフルを構えて撃とうとしたとき何かが来るのを感じた

Side End

紅那岐 Side

どうなっかな？とみているとフェイト達 came たら案の定また転生者が来ていた

・・・アレはダブルオーか？何でガンダムなのかな？まあ二人ともガンダムだしバランスは取れてるな

それにしても二人とも殺る気まんまんだな、ここでがんばりすぎると原作崩壊しすぎるしなあ

「しょうがない、茶々入れるかな」

そう言っつて俺は双銃を取り出す

魔力をこめるとそれぞれの銃に同じ色の魔力に変化をしていく

狙いは・・・あの二人でいいか、能力高そうだし

「さて、久々の登場は一人でやるから帰っつていてもいいよ？」

「ここで見てるよ」「私は一緒に行きたかったけど我慢するよ」「・・・ん」(コクン)

七星・すずか・恋が頷いてくれた・・・さあ久々の登場だ派手にいくなあ？

「じゃあ景気づけに『ヴァイス・シユバルツ福音の魔弾』！」

狙いをガンダムに向けて白い弾丸と黒い弾丸を発射する、そして俺も駆ける

Side End

シグナム Side

目の前の装甲を着た魔道師たちが私達に攻撃をしてこようとした瞬間白と黒の魔力弾があの人二人に直撃をした、弾丸が飛んできた方向を見ると其処にはバイザーをつけた双銃を持つものがいた

「貴様、何者だ！」

「貴方は始めましてですね、私は永劫アイオーンと申します」

仰々しく挨拶をしてくる永劫という男

「お前は味方なのか？」

今の私達は目の前の奴らと戦えるほどの力はない、なのでどうしても戦力が必要なので聞いてしまった。ヴィータは「なにしてんだよ！」と言ってるがこの際体裁にこだわっても勝てない、なので聞いたが返ってきたのはやはり否定の言葉だった

「違いますよ」

「そうか・・・なら」

命をも捨てる覚悟で私の剣レヴァンティンを構えるが

「しかし、あちら側の味方でもありません、今回はあなた方が不利すぎるのであの方達と戦うのを譲って貰おうと思っただけですよ、なのでかかってくるなら貴方も相手をしてあげましょう」

そう言っどこか余裕を感じる男は私を無視し先ほどの装甲をつけ

た魔道師のほうを見た
私はどうやって逃げるかを考え出していた

Side End

三人称 Side

紅那岐がシグナムの話を終えるのと同時になのは達サイドの転生者達も同じように復活を果たした
ほぼ不意打ちに食らった魔弾だったがなんとかなったようだった

「てめえ何者だ！」

「其処をどけ！」

二人の転生者は激高していた、突然食らった不意打ちだった何が何と
か持ちこたえられたしかし、見せ場を作ろうとがんばっているのを
邪魔されては怒るのも当然であった
紅那岐が再び名乗ろうとすると

「永劫！？（さん！？）」

なのはとフェイトが声をかけてきたのであった

「お久しぶりですねお二人とも、怪我は大丈夫ですか？」

「大丈夫なの、でも何でここに？貴方もそっち側なの？」

「お久しぶりです、あの時お礼を言えずに申し訳ありません・・・
でも、もし貴方が敵なら容赦をしません」

まっすぐに紅那岐を見つめる二人、しかし紅那岐は小さく笑っていた

「それならジュエルシードの時も同じようにフェイトさんの味方をしていたでしょう？今回も前回と同じですよ」

そう言つてクスクスと笑っている紅那岐、それを見た二人は苦い顔をしながら思い出していた

「おいお前！なのはに話しかけんじゃねえ！」

「フェイトにもだ！」

二人の転生者は無視されていたことと自分達が好きな者と話しているのが気に食わなく怒鳴り散らしていた

「そう思うなら掛つてくれば良いでしょう？何故律儀に待っているのですか？」

分からないという態度で聞いている紅那岐を更に怒り心頭の二人

「さて、貴方達の力を見るには銃よりもいいものがあるのでそちらを使わせてもらいましょう」

そう言うと紅那岐は双銃をリリースした

「さあ初公開！とくにご覧あれ！ファフナー、セットアップ！」

《セットアップ》

セットアップが終わると其処には赤い鬼の面が浮かんでおり手には

太刀を持っていた

「鬼菩薩・覇煌刃、初めての実践ですが共に行きましょう！」

太刀を抜き放つと周りには信じられない熱気に包まれる
それが太刀からと言うのに気づかないものはいなかった

Ep 5 AS 最初の介入前編（後書き）

レティ「戦いの前に区切る！これ以上は長い」

トール「さて、紅那岐？被弾なんて許さないわよ？フッフ」

レティ「コワッ！？時空の旅人様から頂いた武器覇煌刃と畏無さまから頂いた鬼菩薩が登場しました」

トール「この子達とは私は戦ってないからどうなるか楽しみだわ」

レティ「では次回で！」

EP 6 AS 最初の介入後編（前書き）

なんか文章構成がぐっちゃになってるかな

EP 6 AS 最初の介入後編

「さて、お手柔らかに」

丁寧に挨拶をしているのはなのはサイドVSヴォルケンリッターの戦いに割って入ってきた紅那岐

「ざけんな！」

「ぶっ殺す！」

紅那岐に大して憎悪の視線を向けてるのは最近転生をしてきた転生者今まさに規格外同士の戦いの火蓋がきつて落とされようとしていた

「行けえ！」「食らえ！」

先に仕掛けたのはガンダムの装甲を纏った転生者達、紅那岐の装備を見て遠距離が苦手と思い魔力ビームを撃ってきたのである

「鬼菩薩」

紅那岐が呟くと同時に直撃する、威力が高かったためか当たりは煙が舞い上がり紅那岐の安否が分からなかった

転生者達は勝利を確信していたが、一度でも戦ったことがある者たちはこの程度で終わると思っていなかった
煙が晴れると其処には無傷の姿があった

「なっ!?!」「馬鹿な!?!」

驚きの声を上げる中紅那岐は自身の横に浮いている鬼の面：鬼菩薩の状態を確認していた

「ふむ、どうやら機能は十二分に発揮できるようですね。しかもセミオートで動くのもいい感じですよ」

満足そうに頷いている紅那岐、逆に転生者達はイラついた表情をしていた

「遠距離がダメなら接近戦だ！」「援護する！」

そしてダブルオーの少年はGNソード？を剣モードにし突っ込み、フリーダム少年は搭載されている武器を乱射し回避場所をなくした遠距離からの魔法は鬼菩薩によって防いだため余裕でダブルオーに対応する紅那岐

「ちっ、くそっ、アタラネエ」

剣を振り回すが一向に当たる気配は無かった

（おせえ・・・なんだこれ）

紅那岐もまたあまりの遅さにビククリしていた

それもそのはずでここ最近はずっとツールと訓練をしており自分の何倍も強い相手の攻撃を受けてたため目の前の攻撃は止まって見えるまでになっていた

「これならなのはさんとフェイトの方がよっぽど強かったですね」

「つざけんなあああ！」

挑発され渾身の一撃で攻撃をしてきたので紅那岐は太刀で受け止めようとしたら

スツ・・・

相手の剣は紅那岐の太刀に触れたらバターの用になんの抵抗もなしに切れてしまった

「・・・」

場に沈黙が訪れる、紅那岐を除く他の者たちは驚愕して紅那岐はその性能に驚いていた
チンツ！

と紅那岐が太刀を納刀すると全員正気に戻る

「てめえ！何でしまってるんだ！」

「俺達を嘗めてるのか！」

怒り心頭の転生者コンビだが

「いえ、この太刀ですとどんなに手加減しても殺してしまうレベルなのでやめます」

（ありえねえw流石10000の熱を持つ太刀だまさか斬ってる抵抗すら感じないで切れるとは）

簡単に言えば金属の融点を超えてしまっているのでも刃が触れると其刃は防御を超えるのが目に見えてしまっているのでやめたのである、同様に鬼菩薩もリリースした紅那岐

「さて？次からは私本来のスタイルで特別に相手をしてあげますよ。

この力はなのはさん達すら知らないので貴方達は運がいいですね」

そう言つて紅那岐は右腕にパイルバンカー型ガントレットを装備した

「さあ！逝きますよ？」

Side End

なのは Side

永劫さんは相変わらずの強さだったの、気持ち悪いとは言え吉良君は私より断然強い、それなのに赤子の手を捻るくらいの感覚で二人を相手にしていてもどこか余裕を感じるの

「なのは回復は終わったけどレイジングハートの方が参っちゃってるからあまり無理はしないで」

ユ一ノ君に声をかけられレイジングハートをみると全体に罅が入っていたの

「ごめんね、私が弱いばかりに」

《いえ、私の能力不足によるものです。マスターはベストを尽くしていました》

そう言つて慰めてくれるレイジングハートだけど、今回は私が相手の力量を測れなかったミスなの

前に永劫さんが言っていたの、相手の強さが分からず気持ちだけで向かつて負けるって

なのに同じ事を繰り返しちゃった・・・

《マスター？》

「な、なんでもないの！」

《・・・》

レイジングハートが心配してくれるけど、それでも私は・・・

Side End

フェイト Side

永劫、姉さんと母さんを助けてくれた私の恩人であり敵であった人
今また敵として立ちふさがると言ってきた、私も前より強くなった
つもりだったけど永劫はその上をいつていた

セツナが私達に合流した時のランクが既にSSSだったのに永劫は
SSS二人を相手にしても疲れを見せてない、それどころか時々私
達やあの人たちが巻き込まれないように場所をうまく移動しながら
戦っていた

「すごい・・・」

「フェイト大丈夫かい！？」

私が戦いに見ほれているとアルフが来てくれた

「うん・・・でもバルディッシュが」

そう言つて手元にはあの女の人に斬られてしまったバルディッシュ
が、淡く光っているから完全に壊れたわけではないけど完全に油断
した私が悪い

《気にしないでくださいサー。私の力不足です》

私は弱いな・・・なんでいつも誰かに心配をかけちゃうんだろう
永劫見たく強くなりたいたいと思ってたとき落雷と同じような轟音が響
き渡った

Side End

紅那岐 Side

さて、もらった物の性能の把握はできたから次は俺のスタイルで戦
うか、と言ってもこの力にしてからのスタイルだけだな！

「貴方たちには勿体無いですが特別に見せてあげますよ、タービュラ疾風迅
雷インス」

轟音と共に俺は自身に雷光化する、俺のスタイルの一つの疾風迅雷
ネギまを知っている人にはなじみが深いかもしれないが、簡単に説
明をすると俺のフェイバリットアーツトルハンマーの総てを射抜く雷光のエネルギーを体内に取り込み身体能力を倍化するスキルだ、ネギまの用に
副作用なんてものが無いのが特徴だな・・・誰に説明
してるんだ？

この姿になると髪の色が金髪になり、目が碧眼になるってのを忘れて
た・・・だから誰に？

「それがどうした！」「防御を無くしたのを後悔しろ！」

そう言つて二人は再び攻撃を開始してきた・・・実力差まだわから
んのか

さっさと終わらすかなと思いつながら俺は風舞で相手を交わし被害が
出ない場所まで移動した

「消えた!?」

と叫んでるころには俺の準備は終わっていた

Side End

三人称 Side

其処にいる者たちは信じられない光景を見ていた

圧倒的に有利かと思つた2人組みは結果を見てみるとボロボロだった轟音と共に姿が変わつた紅那岐が相手が捕らえられないスピードで攻撃を繰り返し既に装甲はボロボロで息も絶え絶えであつたのである

「終わりですよ!」

急に現れた紅那岐の腕には槍の形状をした魔法が準備をされていた、その魔力量を感じた二人は慌てて逃げようとしたが

「トルハンマー総てを射抜く雷光!」

紅那岐の腕が振りぬかれ雷光の槍は逃げようとした二人を一瞬で貫いていった・・・結界もろともに

直撃した二人は落ちて行き地面に倒れてるとリンカーコアが浮かんでいた、どうやら蒐集されたようだ

紅那岐はなんとなしに見ていると急に胸に手が生えてきた

「・・・どうやら貴方達も痛い目を見たいようですね」

胸から生えている腕を掴む紅那岐、どこかで「うそっ!?!?」「と言っ
声が聞こえたかもしれない

「『ダ・カーボ復元する世界』」

手をお前にかざしながら呟くと其処にはゲートに手を突っ込んでい
る緑のジャケットをきている女性がいた

「そんなどうして!?!?」

驚いているのをよそに紅那岐は女性に近づき思いつきリグナムの
方に投げ飛ばした

「きゃっ」

小さい悲鳴と共にザフィーラに受け止められたが、自体が悪くなっ
たのを悟ったのか青い顔をする一同

「少し反省をなさい!」

先ほどの雷光とはかわり今度は青い魔力が腕に集中していた

「大丈夫ですよ先ほどよりは手加減してあげます」

そう言って先ほどと同じように腕を振りぬく

「フェンリスヴォルフ神討つ拳狼の蒼槍」―――っ!
―――」

青き魔力光はさながら大顎を開いている狼のごとくヴォルケンリッ

タワーに襲い掛かった

紅那岐は結果を見るまでもなくなのは達に戻り別れを告げた

「では、今回は私の立ち位置は微妙ですが再び戦うかもしれません・
・己が力量を持って掛つてきなさい」

そう言つて紅那岐は消えていった

Ep 6 AS 最初の介入後編（後書き）

レティ「後書き座談会！って思ったんだけどツールがおらんし」

????「ツール様でしたら紅那岐さんの訓練に向かいましたわあ」

レティ「あんたは？」

????「申し送れましたあ〜私^{わたくし}はあ〜ツール様の部下のジークルー
ネと申しますう〜」

レティ「え？オーデインじゃないの!？」

ジークルーネ（以降ルーネ）「はい〜何でも昔の戦いが終わったと
きに私の仕事能力が欲しいと言ってえ〜引き抜かれましたあ〜」

レティ「のんびり屋さんなのに仕事できるんだあ」 うつつた

ルーネ「はい〜、で、伝言なのですがあ〜」

『あのバカ、能力確認なんてやる余裕あるのね 偉くなったものだ
わ』

と言つてうきうきしながら行きましたよあ〜」

レティ「(. . .) ナムナム」

ルーネ「でわあ〜感想ありがと〜ございますう〜」

レティ「次回はコラボ予定」

EX1 コラボ 紅那岐VS神威(前書き)

時空の旅人様とのコラボ

EX1 コラボ 紅那岐VS神威

女神 Side

私は今自分が転生させた転生者の神威君の能力を上げるにはどうするかを考えていた

もともとチートとして送ったけれど、彼が『知っている』魔法しか普段は使えないから知らないのを覚えさせてあげるのも良いかな？
って思っていたときに扉が開かれた

「やつほー、相変わらず真面目ね」

入ってきたのは別世界の管理を担当してる神ツールだった

「珍しいわね、貴方がこっちに来るなんて・・・あと それ何？」

ツールが引きずってきたのは黒い炭の塊だった

「これ？私が転生させた子でさっきまで鍛えてあげていたんだけど
ね力加減間違えてこうなっちゃった」

じゃ無いでしょうに、神の中では最強の力を持つのは知っている
けど人間をここまでするかしら？

「で？それを見せる為に来たのかしら？」

「違うわよ、たまには私以外の人とも戦ってもらいたいからわざわざ来たのよ」

なるほど、確かに戦いにおいては色々な人と戦ったほうが経験値は稼げるわね

「ちょっと待ってね聞いてみるから」

Side End

神威 Side

今日は珍しくなのはと優奈と一緒に出かけられて俺は一人暇を持て余していたら

『神威君聞こえるかしら?』

『女神様珍しいですね?どうしたんですか』

女神様が本当に珍しく念話を送ってきた

『貴方と戦いたって人がいるけどどうする?』

暇だし良いかな?

『大丈夫ですよ』

そう返事をすると足元に魔法陣が現れて俺は転送された

転送されたところに着くと女神様以外に知らない女性と炭があった

「えつと・・・此方の方は？」

「紹介するわね知神のトールよ」

紹介してくれたのは良いけど戦うのってこの人？

「ちよつと待っていてね今対戦相手起すから」

トールさん？が近くの炭に近寄ってなにやら叩いてると炭から声が聞こえた

「だ・・・」

「だ？」

「『ダ・カーボ復元する世界』」

魔法陣が展開されると今まで炭だったものが人間になった・・・人間だったのか

急に立ち上がるとトールさんに詰め寄って怒鳴り散らしていた

「トール！いい加減訓練で瀕死に追い込むのは勘弁しろ！意識失ってる時変な花畑がいつも見えるんだぞ！」

つまりいつも臨死体験しているって？俺は流石に勘弁してほしいな

「弱い貴方が悪い、てか今日は私達来訪者だから行儀よくしてよ」

「だから……ん？此方の方々はどなたですか？」

急に口調が変わったなこいつ

「今日は私以外にも戦ってもらおうと次元の壁壊して違うところの神の転生者と戦ってもらうために来てるのよ」

「なるほど、ツールが迷惑をかけてスイマセンね」

謝ってくるけど、戦うためにきたんじゃないのか？

「いいわよ、神威君も鍛えられるし」

「神威さんですね、私は紅那岐つて申します」

丁寧に挨拶をされてしまったから此方もしなければ

「気にしないで良いですよ。それと俺は呼び捨てでかまいませんよ？」

「それなら私も紅那岐と呼び捨てに」

お互い少し話して丁寧に喋るのも禁止となった

「さて、話を聞く分模擬戦をすればいいのか？」

「そうね、後はできるだけ貴方のスキルを見せて貰えないかしら？」

「????かまわんが」

分かってない様子だなあれは

「彼は見ただけで相手の力を覚えることができるのよ」

「ふん」

え！？驚かないのか？持つてる俺でもチートすぎると思ってるのに

「うちの飛鳥と変わらんしな」

誰だそれ？まあ何だかんだで場所を用意してくれたから其処でやることになった

「さて、まずはファフナー輝紅を出してくれ」

指輪が淡く輝くと其処から一本の刀が出てきた

「それがお前のデバイスなのか紅那岐？」

「そんなもんだ」

お互いの世界がリリカルなのは世界って聞いた時はビックリしたが、次元が違うから会うことは無いそうだ

「じゃあ俺もナイトソウル ファーストモード！」

俺は天鎖斬月を出して構える、紅那岐は左手で持っているだけで構えてなかった

「構えないのか？」

「これが俺が刀を持つときのスタイルだ」

そう言っつて今も自然体のままで俺と対峙をしていた

「準備は良いわね？では・・・始め！」

女神様の合図で俺は一気に駆け紅那岐に斬りつけようとした

「早いな、目で追うのが大変だぞ？」

見えてるのかよ！最速ではないにしろ相当のスピードのはずなのにかわされてしまった

「トールのほうがえげつないからな、次は俺の番だ」

すると急にあいつの体がぶれ始めた

「フッ！」

殺気を感じその場に斬月を振るうと紅那岐がいつの間にか

「今のは風舞って言って相手の視線を利用してぶらす動きで場所を掴めない様にする技だ・・・速さは瞬動の半分くらいかな？」

言い終わると急に刀をしまっていました

「どうしたんだ？」

「刀を使ったスキルは今のでおわりだぞ？俺がもらったものって刀使わないし」

なんだそれ！？つまりは身体能力だけで俺と対抗できたのかよ

「次はこいつだ！」

すると今度は白と黒の銃を取り出したんで俺も魔導双銃を取り出した

「そんなものまで持つてるのか、スキル沢山だと使う機会あるのか？」

それは俺も知らない

「んじゃ行くぞ？」

そういうと銃で魔力弾を連射してきた、威力は高くないけど数が多
いな

「だがこれ位なら！」

俺は双銃から虚閃を発射して紅那岐を貫いた

「ぐふ……」

どうやら致命傷は避けたようだけど、左腕が完全に逝ってしまったようだ

「これで終わりかよ」

あまりな結果に少し残念に思っている

「お前は何を言ってるだ？」

するとまた魔法陣が展開すると左腕は直っていた

「その力は……」

「これはさっき見たんじゃないか？俺の力の一つで『ダ・カーボ復元する世界』
って言って24時間以内に対象を戻すことができる能力だ」

後は使い方しだがなと言っているが、つまりは再生魔法に近いのか？

「さて、再開と行こうか……ラーゼン術式固定解除！『シユトゥルム・クロイツ正邪必滅の流星群』」

紅那岐が急に言っていると俺に魔力弾が何処からとも無く襲ってきた
避けようと瞬歩を繰り返していても魔力弾は何処までも俺を追い

けてくる

「まだ終わりじゃないぞ？」
『ヴァイス・シユバルツ 福音の魔弾』！」

紅那岐は今まで以上の威力があるであろう魔力弾を俺にはなくあらぬ方向に向けて打ち出した

「何処に撃つていやがる」

そう言つて油断したのがいけなかったのか、魔弾は急に角度を変えて俺に向かつてきた

「俺のスキルの二つ目福音の弾丸は相手の音を頼りに向かつていくものだからな、無機物以外はどうやっても音が出るから何処までも向かつていくぞ？それに俺も撃つて終わりじゃないしな」

紅那岐はまた最初と同じような魔弾を撃ちまくってきた、俺は虚閃や鬼道を使い総て打ち落とした

「・・・凄いな」

素直に褒めてくれるのは嬉しいが、そっちは疲れを見せてないから結構ムカつくぞ？

「最後は俺の最大のアーツで決めようかな？」

するとあいつは銃をしまつと今度はガントレットを装備していた

「行くぞ？今度は殴り合いだ！」

面白い、だったら俺もそれに乗ってやるよ！

Side End

紅那岐 Side

最後のアーツで決めようとしたら神威の奴も同じように殴り合いに来るらしく双銃を消して俺に向かってきた

「ハアツ！」

拳と拳がぶつかり合って周囲に衝撃波が飛ぶ、こいつは本当に色々な能力を持っているな

だったら俺も最大の力で戦ってやるか

一旦距離をとって話しかける、理論は違えど知ってる奴は多いからな

「神威ってネギま！の雷天大壮って知っているか？」

聞くと頷いてるから知っているみたいだな

「これから見せるのは似たようなものだ、副作用がない分こっちのほうがいやすいが、欠点とすればツールに許しをもらってくれ」

そう言っただけ俺は自身の魔力を雷光に変え唱える

「タイビュランス疾風迅雷！」

轟音と共に俺は雷光化し身体能力を跳ね上げる

「今までの100倍早いからな？」

そう言っただ俺は雷舞・瞬動などを使い殴りかかるが同じようについてきて俺と殴り合っている
今まで転生者と戦ってきたけど、ここまで強い奴は始めてだな

「食らえ！『トルハンマー総てを射抜く雷光』！」

「食らうか！『雷吼炮』」

俺は自身のフェイバリットを出すも相手も似たような技を出して相殺された

「おいおい、威力は同じでも速度は光速だぞ？よく打ち落とせたな」
感心しているとなにやら睨まれる

「お前全力か？なにやら余裕を持ってるように見えるんだが・・・」
ああ、そういうことか

「トルと戦ってるとな辛そうな顔をしていると恍惚とした表情で更に熾烈な攻撃してくるんでな、だから常に余裕な表情をするようになったちまったんだ・・・まあ模擬戦だから限界まで力は出さないのもあるが」

そういうと同情と納得できないと言う表情で俺をみってくるが、悪いが俺一回でも死ぬとそこで終わりなんだよ

「さて、そろそろ終わらせようか？お互い最大の一撃でやろう」

「分かったよ」

俺は魔力を貯める

「俺は時間がかかるからお前から攻撃してきていいぞ」

「その言葉後悔するなよ？はあっ！」

すると神威は俺に接近すると思いつき殴ってきた

「・・・それが最大の攻撃か？」

「馬鹿な！？クラッシュが聞いてないだと!？」

クラッシュって随分危険な名前だな・・・まあいい俺のチャージも
終わったからこれで最後だ

「終わりだ『レーヴァテイン迷い無き光闇の剣』！」

俺の神話魔術（魔法）に完全に飲み込まれた神威は見事吹っ飛び模
擬戦は終了した

「大丈夫か？」

気がついた神威を起しながら聞いてみると

「お前なんでクラッシュが効かなかったんだ？使った俺が言えるものじゃないがアレは総てを壊す攻撃だぞ？」

おいおい、人間に使うようなものじゃねえだろ

「ああ、復元ダ・カーボする世界を常時発動してしてから食らう前の俺に戻し続けた結果殴られたダメージしか入らなかったのか」

「それなんてチートだ？」

「魔力が切れたらそれで終わりだからな、チートでも限界はあるぞ」
なにやら納得してくれたようだ

Side End

神威 Side

「もう良いかしら？そろそろ戻すわね」

「女神様早いですね」

「・・・あっちみて御覧なさい」

言われてみると紅那岐がツールさんに首根っこをもたれていた

「さて、アンタの課題も分かったことだし帰ったらまた修行ね」

「待て！模擬戦で疲れたから勘弁しろ！」

なにやら凄く哀れに思えるんだが・・・

「黙れ」ガスツ！

あ、殴られて沈黙した

「じゃあ、ありがとね またね」

そんな感じで二人は帰って行った

「・・・送るわね」

「お願いします」

そうして俺も帰って行った

S i d e E n d

予断だが神威が帰ったのならのは既に帰っており何処に行っていたか問いただされたとか？

EX1 コラボ 紅那岐VS神威（後書き）

レティ「終了、実は紅那岐は顔に出てなかったけど相当きつかった状態です」

ルーネ「そうだったんですか〜因みにツール様は紅那岐さんの修行でおりません〜」

レティ「人様のキャラを書くのは難しいと思った」

レティ「違うところがあつたら言ってください、大幅修正も辞しません」

ルーネ「感想ありがとうございますあ〜」

レティ「ではまた〜」

レティ「因みに、神威に使ったのはアインハルト術式固定・ラーゼン術式固定解除・シユ正邪トルム・クロイツの流星群・ヴァイス・シユバルツ福音の弾丸・ヴァイス・シユバルツ福音の魔弾・タイピュランス疾風迅雷・トルハン総てを射抜くマレーヴァテイン雷光・迷い無き光闇の剣です、使うかどうかはお任せします〜」

EP 7 何故こいつらいるし!?! (前書き)

2話投稿です

Q: 何故このキャラを出した?

A: 気まぐれです

EP 7 何故こいつらいるし!?

「ふうふうふう・・・」

ゆっくりと息を吐きながら目を瞑り瞑想する

前回神威との戦いでは偶然勝ちを拾えたものだった

俺の力は今はまだ持っている力を使っているだけに過ぎない

なら、俺が使える力を更に俺自身専用までもって行かなければこれから先もしかしたら負けてしまう可能性がでかい

どうすれば勝てるか・どうすれば良いかをこれからの課題にしつつ修行をして行こう

「紅くんそろそろ時間だよ」

すずかが声をかけてくる、そうだったな今日はフェイトがこの海鳴市に来るって言うんで会いに行くんだったな

「分かった今行く」

俺は瞑想をやめて立ち上がりすずか達の下へ行く

やってきました翠屋今それぞれが注文をしている最中だ

「俺はアレとガトーショコラで、飛鳥はショートケーキと飲み物はアイスティーで」

「私はショートケーキとアイスティーで」

「恋は・・・ここからここまで」

「私は紅くんと同じで飲み物はアイスティー」

一人おかしいのがいたが気にしない、どうせ俺の金だ
今ここには俺達月村組+なのは・ありさ・テスタロツサ姉妹がいる
注文を待つ間に改めて自己紹介タイムとなった

「はじめましてですね、私は赤羽 紅那岐と申しますよろしく願
いしますねアリシアさん、フェイトさん」

「私は妹の七星だよ」

「私は飛鳥ですよろしくお願いします」

「・・・恋よろしく」

と初めてあう俺達はそれぞれ名乗った

「それにしてもアンタ初対面の人に必ずその敬語を使うのいい加減
やめなさいよ、知っている私達からしてみれば気持ち悪いわよ」

なんか久々の登場のバーニングスが言うてくるが・・・大きなお世
話だ」

「アンタぶっ飛ばすわよ！」

な、何故心を読める!？」

「声に出てるよ」

「え、えつとその・・・」

「フェイトちゃん気にしていると疲れるよ? こういうのはスルーってのをすると疲れないの」

「おもしろい」

マジか!? ワザとだけどな・・・あとなのは黙れ、アリシアは既に順応しているな

てかおいアリシアお前5歳で止まってなかったか? フェイトと同じ身長になってるぞ?

「まあ、アリサ弄りはここら辺にして改めて紅那岐だ好きなように呼んでくれ」

「分かった・・・く、く・・・」

くなぎって呼びづらいのか? 確かに同じ名前って聞いたこと無いからな

「ナギでも、なっちゃんでも好きに呼んでいいぞ?」

「じゃあ、なっちゃんです!」

アリシアはそれを選ぶか、俺と同じセンスをもってそうだ

「じゃあナギで」

フェイトも決まったようだな

「それでアンタは助かったとでも？」

なんかバーニングスがうるさいな？

「どうしたアリ・・・バーニングス？」

「あんなんで言い直すのよ！」

決まってるだろう？お前の反応が面白いからだ

「お待たせしました」

俺とアリサがキヤイキヤイ騒いでいると注文をした品物がきた

「・・・はあ！？」

俺は驚いて声を上げてしまったが・・・何故いる？

もって来てくれた人は栗色のウェーブのかかった髪、恋みたいに触觉を持つており翡翠のような綺麗な緑色の瞳の女性がいた

「そんなに驚いてどうしたの？」

えー本当になんでいるの？

「なのはちゃんこの人は？」

「紹介するね、お父さんの友人の娘さんでフィアッセさんっていうの」

「」「」「よろしくお願いします」「」「」

「うん、よろしくね」

俺が固まっている間に挨拶が終わったようだ

「それで君はどうしたのかな？」

「あ……すみません、フィアッセさんってクリステラ音楽スクールの？」

「よく知ってるね、ママがやっているのがそうだよ」

あーマジでビックリした

そんなこんなで喋っているとプレシアが来たんだがここでまたビックリしたと言うことを先に言っておこう

「アリシアー！フェイターー！」

行き成り美人の女性がテストアロツサ姉妹に抱きついてきた

「ママくるしいよ」

「母さんビックリしたなあ」

……マジで？

「あらこの男の子は？アリシアとフェイトはあげないわよ？」

「母さん何言ってるの!？」

「ママ失礼だよ？」

「本当に母親ですか？」

こう言っちゃなんだがプレシアって最初あったときは既におばさんに近い外見だったのが今はどこをどう見ても20台なんだが？リリなの世界の母親は若いのが定番なのか!？」

「うふふ・・・子育てって良いものね、若返っちゃったわ！」

「分かります、いいものですよね」

「にゃ!?!お母さん!?!」

桃子さん登場、若いねうん

てか、プレシア若返ったレベル超えてるよ？化学か？化学なのか？

「あ、紅那岐君士郎さんが呼んでたよ？ブレンドがもう直ぐ切れるから作りたいならおいでって」

「分かりました」

因みに俺が翠屋で頼んでいるアレというのは俺オリジナルブレンド
コーヒーだ

前にサッカー試合の助っ人で出たときの頼みで俺オリジナルブレンドを作らせてくれて事だ

帰ってきた

「はい主、心配をかけました」

シグナムがそういつてくるけど、心配になってしまっわ

「それではやてちゃんごめんなさい今度の病院の時ついていけなくて」

シヤマルが謝ってくるけど

「大丈夫や、シヤマルたちが来る前の時は一人で行っていたしな」

私が言ってもまだ心配顔のみんな

「そっだ！兄ちゃんにたのもうよはやて」

ヴィータが言ってくる・・・この前の飴で完全になつたヴィータ、かわええな

「くーくんか？迷惑になるんちゃうかな？」

なんだかんだで忙しいからなくーくんは

「聞いてみましょう」

シヤマルがパタパタと電話に向かっていくと直ぐに帰ってきた

「はやてちゃん〜」

涙目まシャマルが帰ってきた・・・またやったな？くーくん

「くーくん、いい加減うちの子泣かさんといてな」

『はやての家だつてのにボケによわいとは、この先やっていけるのか？』

全く反省の色が見えないくーくんが最初に言ったのがこれって・・・

「大丈夫や！その内イヤでも慣れるわ」

「ちよっ！？はやてちゃん？」て言う声が聞こえてくるけど今は無視や

そんなこんなでくーくんが病院に着いてきてくれることになった

「ごめんなあ？うちの子が無理言つて」

「かまわんよ？友人の頼みだし」

こともなにげにいつてくれるのはうれしいわあ

「でね、石田先生が新しい先生を呼んで助手になるらしいんよ」

私はある程度の事情を説明しながら病院に着いた

「八神さーん」

呼ばれたからいかんとな

「はじめまして、これから八神さんの担当になるフィリス・矢沢です」

中に入ると銀色の長髪の綺麗な人が居った・・・くーくんが固まってるな、美人なのは分かるけど見とれすぎちゃうか？

「本当はカウンセリングが専門なんだけど、八神さんの症状が不明って点で私も協力することになったのよろしくね」

「よろしくお願いします」

くーくんはまだ固まってるな
診察が終わり帰り道くーくんをからかおうとさっきのことを掘り返してみた

「くーくんってああいう人がタイプなん？」

「あー確かにタイプであるが固まってた理由は別だ」

ってホンマにタイプなんか！

これから先銀髪さんには要注意やな

「その理由って？」

「秘密だ」

その後どんなに聞いても教えてくれなかった・・・いつか絶対聞い

てみせるで

その後うちで夕食を^ご馳走して^{くー}くんは帰って行った

予断だがヴィータが^ぬ飴をねだって5本ほど貰ってたのは^{うら}やまし
かった

EP 7 何故こいつらいるし!?(後書き)

レティ「日常編終了」

トール「とらハキャラを出したのは本当に気まぐれらしいわね」

レティ「んだ、まあいいんじゃないかね?って理由しかないけどね」

トール「つたく、この後大して出さないのにひどいわね」

レティ「好きなキャラだから出すかも」

トール「あつそ・・・」

レティ「では感想ありがとうございました」

トール「またね」

EP 8 テスタロツサ姉妹が転校してきました

久々の私の出番なの！この小説主人公がメイン過ぎて私達なんておまけになってるのは許せないの！・・・私誰に話をしてるんだろう？

「みなさん、本日は転校生がやってきました・・・それでは入ってください」

今日はフェイトちゃんとアリシアちゃんが転校してくの、朝から私はわくわくして止まらないの
そして入ってくる時に・・・

「へぶ・・・」

フェイトちゃんが足を絡ませてこけちゃった・・・顔を真っ赤にして起きたけど萌えるの！

「・・・のは・・・なのは！」

「はっ!?!」

アリサちゃんが声をかけてくれたんだけど私一体？

「何を恍惚とした表情でトリップしてるのよ」

呆れ顔のアリサちゃんだけど私どんな顔をしていたの？

それはもう変態的な by 作者

『ちよつと頭冷やそうか?・・・ディバインバスター!』

えっ!?!それはちよ・・・てかどうやって?・・・ぎゃあああ

ああああ！ by死体

悪は滅びたの！そしてフェイトちゃん達の自己紹介が始まったの

「アリシア・テストロッサですよろしく」

「フェイト・テストロッサですよろしくお願いしましゅ・・・あう
／／／」

「刹那・F・セイエイだ」

アリシアちゃんはフェイトちゃんとは正反対の性格で明るく挨拶をしたんだけどフェイトちゃんは最後の最後で噛んじゃってまた顔を真っ赤にしたの・・・お持ち帰りしたい！あと一人いるようだけど気にしてはいられないの

「なのは帰ってきなさい！」

「そつよなのはちゃん！そういうのは私の役目でしょ！」

「七星ちゃん・・・紅くんに報告しとくね？」

「ちよ！？すずかやめて！」

言っている間にすずかちゃんは目に見えないほどの速度でメールを打っていた・・・先生に怒られるの

「はいはい、聞きたいことがあるでしょうけどHR終わった後にしてね」

先生がそう言ってHRをはじめたの

質問やらなんやらあったけど今は屋上でお昼になったの

「たく、このバカはいつも言ってるだろうが」

紅那岐君が七星ちゃんを説教しているところだった、
大きなたんこぶがとても痛々しいの

「さて、飯にするか」

そう言っつて紅那岐君が弁当箱らしいものを取り出したんだけど・・・
でか!?

「恋とすずかは食って良いぞ、七星はしばらく正座してから食え」

「お兄ちゃんなくなっちゃうって」

幾らなんでもそんなこと・・・半分くらいもうなくなってたの

「はぐ・・・むぐ・・・はぐ」

恋ちゃんが口いっぱい食べ物詰め込んでハムスターみたいにな
つてっただけど・・・カワイすぎなの

「ほら恋、無くならないからそんなに慌てるな」

そう言つて口を拭いている紅那岐君……うらやましいの」

「ん？なのはも口を拭いて欲しいのか？」

「ふえ？どうしてそれを」

「声にててたぞ？」

「／／／」

恐らく私は真つ赤になっていると思つたの、顔が熱くてしょうがないの

「お前なのはに何言つてるんだ！」

だれか知らないけど、紅那岐君に向かって罵詈雑言をはいてる奴がいてとてもわずらわしいの

「あ？年上に向かつてその口の利き方……修正をしてやるつ」

「やれるもんなら……は？ぎゃあああああああ」

そんな事を思っていたら紅那岐君はモブA（キラ・ヤマトです）にアイアンクローを決めて沈めていたの
相変わらず変なところで強すぎるのと私は思ったの

Side End

フェイト Side

初めての学校で緊張してちょっと失敗しちゃったけど、みんな良い人でよかった

今は屋上でお弁当を食べてるんだけど、ナギって何だかんだでみんなの中心なんだってのが話していて分かった

すずかの家に居候つてのをしてるらしいからすずかや七星と仲がよいのは分かっていたけどなんだかんだでアリサやなのはも楽しそうだ

「どうしたフェイト？俺の顔になんかついてるか？」

あう、見つめちゃっていたのがばれてたみたいだ

「きっと一目惚れってやつだよなっちゃん！」

「そうかそうか。プレシアさんを何とかしてから考えよう」

「ぶーなんか余裕あるね」

「ハハハ！女の子に好感もたれるのは悪くないからな」

「あうあう・・・／＼／＼」

うう・・・アリシアじゃないけど余裕がありすぎる

それにすずかや七星、恋がいつもいるってことは常に女の子と一緒に
つてことでしょ？・・・アレ殺意が

「おおう、フェイト怖いな」

え！？私なにかした！？

「フェイトちゃん黒いオーラがでていたの」

なのはが言ってくるけど私そんなのでてないよ

「次の時間は体育のドッチボールだったね」

さすがが話題転換と言った感じで話を変えてきた・・・ナイス！

「懐かしい思い出・・・」

え？紅那岐が遠い目をしてどこかを見てる

「あゝ紅くんっていつも1対その他全員ってのをやってるから」

「ドッチのときはひどかった、ボールが3つ使われてな」

「でも、あんた全員倒したって言ってなかったっけ？」

もちろん！って言ってるけど小学生で其処までできるものなの？

「ま、お前らはがんばってやってくれ」

そう言っただけは弁当を片付けながら言っていた

「お前らもそろそろ食い終わらないとベルなるぞ？」

ウソ！？時計を見るとほとんど時間が無かったから私達は急いでご飯を食べたのであった

EP 8 テスタロッサ姉妹が転校してきました（後書き）

レティ「なのはを変態にしてみました」

トール「いいのそんな事して？」

レティ「いいんじゃない？なのはは百合属性もちなのは一般常識だし」

トール「それにしても紅那岐はフラグを乱立してるわね」

レティ「最初は二人はつけるつもり無かったけど・・・気づいたらこうなった」

トール「これ以上増えないことを祈りましょう」

レティ「感想ありがとうございます」

トール「もう一話日常はさんだらコラボをするわ」

レティ「お楽しみにはでは」

EP 9 ドッジと携帯

（ドッジ対決）

お昼が終わり午後の最後の授業

其処には今はもう絶滅種といわれるブルマを履いた少女達とその他が校庭で集まっていた

「チーム分けはくじ引きにて厳正に行うわ」

そう言つて先生は用意していた箱をだしみんなの前に出す

「うっ、みんなと別れたら私どうしょ」

「だよね、すずかや恋と分かれたら死んじゃうかも・・・」

運動音痴のなのは他の人間よりは動けるが基本スペックが低い七星はひたすら分かれないうちに祈っているだけだった
くじの結果はこうなった

Aチーム：恋・なのは・フェイト・アリシア・その他の皆さん

Bチーム：すずか・アリサ・七星・その他の皆さん

面白いくらいに丁度いい感じに分かれたのであった

「じゃあはじめ！」

先生の合図で始まった

以下台本形式にて

アリサ「行くわよ!」「シュッ

なのは「にゃああ!」「ヒュン

アリサ「ちっ!避けたか」

なのは「舌打ち!?!」

フェイト「今度はこっちの番だよ」「シュッ

すずか「甘いよ、それ!」「パシ シュッ

アリシア「きゃっ」「バン アリシア・アウト

フェイト「アリシア!?!よくも!」「シュッ

七星「あぶな!?!」「ヒュン

フェイト「くっ……」

七星「私にうらみあるの!?!」

フェイト「なんのこと?」「黒

一同(「コワッ!」)

ナレーション:そんなこんなで内野陣は減っていきました

アリサ「それ！」シュッ

なのは「きゃっ」「バン

フェイト「任せて！（アレなら魔法使わず取れる）狙うはさすが！
ファイア！」シュッ

すずか「ふっ……それ！」シュッ

フェイト「あう……」「フェイト・アウト

アリサ「ついでになのはも！」シュッ

なのは「にゃあああ」「バン なのは・アウト

アリサ「これで勝ったわね」

恋「……まだ終わりじゃない」

アリサ「げ……恋忘れてた」

恋「逝く」「ゴウン

アリサ「字が違う……きゃあああ」「ドゴウン アリサ・アウト

七星「ちょ！？私まで？出番少ないよーっ！」「ガン 七星・
アウト

ナレーション：恋とすずかの活躍で残りは二人に

すずか「恋ちゃん今日こそ決着をつけよう」

恋「・・・負けない」

ナレーション：この後決着がつかずそのまま授業は終わりとなると
思ったが・・・

すずか「まだまだあ！」

恋「・・・えい」

ナレーション：結局勝負がつくまでとなり先生も最後の授業と言う
ことでやらせていたら、他の学年は終わっていたのか歩いている生
徒がいた

恋「・・・たあ」

すずか「甘いよ」

モブ「ちよつと私取れないよこれ！」

ナレーション：恋が一際威力を持ったボールを投げたがすずかは避

け外野は取れずボールはなぜか威力を落とすことなく歩いている生徒に直撃した（ギャグ補正によりボールへの反応ならびに危険だという声に気づけず）

すずか・恋「あ……」

ナレーション：しかし、当ててしまった相手が悪かった
当てた相手は何を隠そう紅那岐である。紅那岐は身体能力などは普段出さないで優に一般格闘家の能力を超えるものを持っている

紅那岐「お前ら覚悟はいいな？」フラリ

すずか・恋「う……」

紅那岐「くたばりやがれ……」

ナレーション：ギャグ補正のせいか能力を超えた一撃を貰いすずか・恋は撃沈しこうして体育の授業は終わった

End

（携帯を買いに行こう）

翠屋にていつものメンバーがお茶を楽しんでいた
するとその時誰かの携帯電話が鳴ったのである

P i p i p i p i p i p i p i

「すまん俺だ、ちょっと出てくる」

そう言っつて席を立つ紅那岐

「えっと、今のは携帯だっけ？」

フェイトは良く分からず質問をしていた

「そうよ、フェイトやアリシア、恋は携帯持ってなかったわね」

アリサがそういえばと言う感じで行った

「うん・・・今まで必要なかったし」

「だね、それに何だかんだで難しそうだし」

「むくむく」

フェイトはなんだか悔しそうに、アリシアは難しそうに恋は興味が無いのかひたすら口にお菓子を詰め込んでいた

「あんた達も持ったらどう？あると便利よ？」

アリサが提案する

「でも、母さん忙しそうだし」

「ママって研究者で今なんだか色々やってる最中で話しかけづらいんだよね」

「呼んだかしら？」

「母さん!?(ママ!?)」

話をしていた忙しいはずのプレシアが何故かそこにいた

「娘が私を呼んだっぽかったから、来てみたの」

「一同はその言動を聞きながら思った・・・」どうやって?」と

「それで携帯だったかしら?良いんじゃないかしら、お友達も持っているなら持っておきなさい」

そう言っつて二人の娘の頭を撫でながら微笑むプレシア

「あう・・・」

「恥ずかしいよママ」

恥ずかしそうに頬を赤く染めながらも嬉しそうな二人

「むくむく」

「恋・・・アンタって本当にマイペースね」

「・・・ん?」コテン

「ブハ・・・」

ツッコんだアリサだったが頬をパンパンに膨らませながらコテンと首をかしげる恋の様子を見たら吐血してしまった

「お〜い戻ったぞ・・・プレシアさんいつの間にか？」

「こんにちわ紅那岐君、娘はあげないわ！」

いつものやり取りに苦笑いするしかない一同だった

何だかんだで買うことになった携帯、そして其処にはいつものメニューが集まっている

恋も何だかんだで持つと言ったことになった、ただ恋の場合は必要な書類を持つてくると言う形になっている

「さて、どれがいいんだろう・・・」

「いっぱいありすぎてわからないよ〜」

「・・・？」

三者三様の意見で中々決まらない一同
アリサたちも機能の説明やデザインなどを説明したが、余計決められないようであった

「紅那岐のはどれ？」

「俺か？俺はこれだが」

恋が聞いてみると紅那岐はポケットからなにやら平べったい形の携

帯を出した

「アンタそれって高くてあまり出回ってない奴じゃない」

紅那岐が出したのはGALAXYSと言うタッチパネル式の携帯だった

「そうなのか？正直金には頓着してないからな」

そう言って再びしまつ紅那岐

「じゃあ、恋それでいい」

「」「」「」「！！？」「」「」「」

そう言って恋は紅那岐と同じのを選ぶとした

「ちょっと恋ちゃん？それ高いよ」

「そ、そうよ他のにしたら？」

「お兄ちゃんと一緒なんて・・・」

「ず、ずるい！」

などの意見が聞こえてるが恋は気にせず向こうに行った
因みに恋や七星の食費やその他もろもろは基本的に紅那岐の財産から出しているのでここで何を買おうと問題なかったりする

「ナギはアレ以外に使ったこと無いの？」

と其処にフェイトがやってきて質問する

「ないなあ、携帯持ったのも実は最近だし・・・ここら辺いいんじゃないか？デザイン・機能とかいい感じだし値段も丁度良いだろ？」

紅那岐が選んだのスライド式の携帯電話だった
それをみたフェイトとアリシアは迷うことは無かった

「ナギが選んでくれたからこれにするね」

「私は色違いで〜」

二人はその後プレシアに頼みに行ったのだが・・・

「紅那岐君ちょっと良いかしら？私の実験動物・・・実験動物で良いわ、にならないかしら？」

「あんだ、選ばうとして結局それしかないんかい！」

と親馬鹿にツツコムしかなかった紅那岐であった

EP 9 ドッジと携帯（後書き）

レティ「なんかドンドン紅那岐がフラグを立てて行ってる・・・」

トール「アリスなんかもたってるっばいわね」

レティ「おかしいなあ〜？」

トール「自重？何それ？美味しいの？状態ね」

レティ「まあいいや苦労するの紅那岐だし」

トール「因みに紅那岐が持つてるお金は生前稼いでいたもので億単
位持つてるわ」

レティ「ガキには過ぎた金額だ」

トール「ヤサグレんじゃないわよ」

レティ「（、（ケツ！」

トール「（無視）感想ありがとうね〜 またね〜」

EX2 コラボ 紅那岐VS霧夜(前書き)

畏無様とのコラボ

EX2 コラボ 紅那岐VS霧夜

『ちょっとこっちにきて貰えるかしら？』

家で本を読んでいたら急にトールに呼び出されていってみると其処には男の娘と神らしき女性がいた

「トール？此方の方々は何方ですか？」

トールに説明を求めるとどうやら神威と同じで別の次元の神と転生者のようだ

「初めましてですね、私は紅那岐です。気軽に名前で呼んでください」

「ん？ 俺は霧夜だ。名字はとりあえず遠坂な」

お互い自己紹介を簡単に済ませ、話していると

「んじゃ、模擬戦でもしてちょうだい」

うちのトールが言ってきた・・・かまわんが何故にいつも模擬戦なんだ？

「仕方ない、お互いがんばろう」

「おう」

男の娘にしては口と態度があれだなあ・・・もっとかわいいこぶって

相手を油断させるのも一つの手だと思っただが

「今、なんか考えたら、お前」

勘が鋭いようだな、これからはマジメにやりますか

「さてね・・・ファフナー、輝紅を出してくれ」

《了解しました》

ファフナーが俺の愛刀の輝紅を出して左手に持つと霧夜も太刀と鬼の面を出した

「ああ、お前が鬼菩薩送ってくれた奴か」

「お前が送った奴か」

そう言うってお互い確認しあうと俺も鬼菩薩を出した

「使えるのかお前も？」

「まあ、防御しか使えないけどそれでも便利だからだな」

そう言うって俺はツールに視線を送るするとツールも分かったらしく頷いてくれた

「では始め！」

合図と同時に俺達は駆けけた

Side End

三人称 Side

キンッ!

金属と金属がぶつかり合う音が響きあう

「ギアをあげさせて貰おう」

紅那岐は今まで以上のスピードで駆ける

「甘いな… - 斬空閃!」

霧夜が紅那岐がいるであろう場所に放つと紅那岐は避けて驚く

「うお!? 神鳴流の技使えるのか?」

「知ってんのか?」

「生前オタクなめるな」

そう言つて紅那岐は同じよう霧夜に近づき斬りにかかる

「はあっ!」

キンッ!

金属音が鳴り響き鏝迫り合いに持ち込まれた

「お前今の状態が全力か?」

「うんにゃ、実力見たかったからな」

そついうとお互い突き飛ばす形で距離をとった

『ナラ全力で殺ツテヤルヨ』

すると霧夜が異形の姿に変わった

「おお！ペルゼインかカツコいいな」

紅那岐は霧夜が変わったことに驚くことより感動していた

『才前知ツテイルノカ、ト言ウカ驚カナイノカ』

「そつか？まあ俺も全力で行こう疾風迅雷」
タービュランス

紅那岐は自身に雷光の魔力を取り込んだ

『逝クゾ』

「さあ、来い！」

そしてお互い再び斬り合いが始まった

「はあっ！」

『オラ！』

紅那岐は雷の力を頼りに体を活性化しスピードと威力を上げていた

しかし、霧夜はペルゼインになる事で体長が2mになり身長的に不利なっていた

『チヨロチヨロ鬱陶シイナ』

すると霧夜の鬼菩薩や鬼墓参に光がともりだす

『食ラエ・・・ 鬼牙流・殲滅せんめつノ型 雷迎枝らいごうえ!!』

「マジか？鬼菩薩モードバリア！」

霧夜からの無数の魔力ビームを紅那岐は鬼菩薩を操りバリアを展開した

「あぶねえ・・・お前手加減ないのな」

『鬼菩薩ヲソクナ風ニ使ワレテイルホウガ驚キダ』

それぞれ、言うことを言うと再び駆け出した

『次ハコレダ！ 鬼牙流 眩異断血まふいたち!!』

「その斬撃貰った！」

霧夜が斬撃を放つと紅那岐は刀を振るうと斬撃は消えてしまった

『ナニ？』

「驚いてる暇は無いぞ!! 鬼牙流 眩異断血まふいたち!!」

驚いている霧夜をよそに紅那岐は霧夜と全く同じ斬撃を放った

『チイツ!?!』

霧夜はなんとか避けたが驚きが大きかった

『何ダイヤモンドハ』

「この刀の特性でな、相手の斬撃や衝撃はなどは刀に纏わせて同じように返すことができるんだよ」

そう説明すると紅那岐は刀をしまっってしまった

『モウ終ワリカ?』

「うんにゃ、お前相手に普通の刀だと力負けが明白だからなもう一本の奴を使おうとな・・・ファフナー、蒼麟を出してくれ」

《了解です》

すると紅那岐の手には一本の刃が蒼い野太刀が握られていた

『才前・・・色々持ッテンダナ』

「ああ、昔から武において才能は持つてるんでな」

そう言っつて蒼麟を構える

「さあ逝くぜ?なんちゃって真・雷光剣!」

紅那岐は自身の雷のエネルギーを刀に纏わせて振り落ろして霧夜を

攻撃した

「鬼牙流きがりゅう 眩忌まふい獲愚えくり璃」

霧夜は本来対人で使うはずの技を使い紅那岐の雷光剣を切り伏せた

「今のもだめなのかよ」

「・・・ナンチャッテッテ言ウ割二、凄イ魔力量ダツタンダガ・・・」

紅那岐は自身のエネルギーの大半を使った攻撃をかき消されたことがシヨックで

霧夜は霧夜で今の攻撃を何とか退けられたがダメージも受けていた

「さて、そろそろ終わりにしようぜ？」

「・・・イイゾ」

お互いある程度距離をとり力を貯める

その時間が1分かはたまた一瞬なのかはわからないがお互い限界まで力を貯めていることが分かった

「鬼牙流きがりゅう・斬撃ざんげきノ型 千慄せんりつ桜華おうかのまいノ舞！！」

「櫻舞・瞬華終刀！！」

お互い舞うように斬撃を放つ

それぞれの一撃はお互いの命を奪うのには十分な威力を持っていたがそれぞれの攻撃で迎撃をしているので決定打は与えられないでいた

「はあっ！」

『オラアッ！』

しかし、お互い防御を捨てた形で攻撃を繰り出した

「くっ……」

『ガハツ……』

そしてお互いの一撃が決まり二人とも倒れてしまった

「はい終了、結果は引き分けね」

トールが決着を言うがお互い気絶していた為聞こえていなかった

Side End

紅那岐 Side

いやあ、刀を使う相手に何処までやれるか試したかったから良かったが最後のは正直きつかった

聞けばお互い胸が奇跡的にくっ付いてるだけだったそうだ

「楽しかったよ、次は俺本来の戦いでやるっ」

「お前、アレで本気じゃなかったのかよ・・・」

面白くなさそうに言う霧夜だが

「全力だったぞ？ただ俺のスタイルはいくつもあって状況によって使い分けるだけだ、今回はお前が刀を使ってたんでなあわせてみた」

「ハア・・・次は、そんな事言わせねえからな？」

「次までに俺も強くなっているさ」

そう言ってお互い笑う、そういえばアルテミスがいないが？

「ああ、彼女ならなんか呼び出された〜って言って途中で帰ったわよ」

心を読むなよ・・・

「霧夜はどうやって返すんだ？お前無理だろ」

そう言っていると其処に・・・

「霧夜さん迎えにきましたよ」

「「「あ、幼女」「」」

「幼女じゃありません！」

なんか幼女がやってきた、霧夜の名前を出してることとは知り合いか

「幼女なにをやってるんだ」

「幼女じゃないもん！」

「幼女でしょ」

「トール様！？あなた前から私知っているのにその言い方ひどくないですか！」

「だってねえ〜？ルーネに比べると」

「呼びましたか〜」

話しているとルーネがやってきた

「・・・紅那岐知り合いか？」

「ああ、トールの部下のルーネだ、戦乙女・・・まあ天使みたいなもんだな」

「なるほど、幼女と言う理由が良く分かるな」

そう言つて霧夜は幼女弄りをしていた・・・因みにルーネは分かりやすく言つとボン・キュツ・ボンだ世の女性は羨ましがる体系をしている

トール？美女と美少女の中間だな

「さて、帰るとするか」

そういつって霧夜が帰ろうとする

「あ、霧夜これやるよ」

そう言っつて俺は一本の刀を渡す

「・・・これは？」

「絶影っつて言っつてな、影を纏わせることによつて刀身の形を好きにすることができ、ぶつちやけ斬艦刀みたいなもんだな・・・お前今の姿で鬼蓮華振るうとき両手だろ？だったら刀身の長さ変えて片手でも持てるようにすると良ささ」

「そつか・・・んじゃ、ありがたく貰つとくよ」

そう言っつて霧夜は帰つていった

別次元だがいい友人がまた増えたな

EX2 コラボ 紅那岐VS霧夜（後書き）

レティ「幼女」 幼女」

トール「最低の性癖ね」

レティ「私的には男の娘・ロリータ・幼女・ロリ巨乳が好きだ」

トール「最後の3つは一緒でしょうが」

レティ「違う！いいか？

幼女＝10歳までの女の子（見た目も含まれる）

ロリータ＝年下でカワイイ子

ロリ巨乳＝20歳代までの女性で身長とはアンバランスな巨乳（美しい体）

のことを言うんだ！」

トール「あつてるのかしら？」

レティ「しらん！私的の解釈だからな」

トール「それは別として、霧夜の口調とか気になったところは教えてね」

レティ「全力を持って直させていただきます」

トール「では感想ありがとうございます」

レティ「次回は漸く4話あたりに行くかな？では」

EP 10 本編か・・・久々じゃね？

とあるビル郡の屋上で少年と少女が現在起こっている所を見守っていた

「さて、データは使ってくれたのかな？」

「・・・」

少年は少女達のこれからを見守っており少女はただ黙って見守っているだけだった

「聞いて頂戴、何処からかは分からないけれど貴方達のデバイスの強化案が流れてきてそして2基は望んだのもっと強くなって主を守りたいって」

盗聴をしているとそんな内容が聞こえてきた

「言っただけなさい、貴方達のパートナーの新しい名前を」

「レイジングハート・エクセリオン！」

「バルディッシュ・アサルト！」

「セットアップ！」

それを聞いた少年は嬉しそうに頷く

「どうやら採用されたようだな、まだまだカートリッジシステムに

ついでには甘い管理局だからなこれでは達も少しは大丈夫だろ」

「……ん」(コクン)

少年……紅那岐は確認すると少女……恋に確認をする

「いいか恋？間違っても怪我させるなよそれ以外なら好きにすれば良いさ」

そういうと紅那岐は双銃を取り出した

「動くようだな、行くぞ！俺はなのはの所に行く」

「恋はフェイトの所に行ってくる……」

そうして二人は屋上を駆けた

Side End

なのは Side

レイジングハートがパワーアップした……これでヴィータちゃんともお話できるの

前に永劫さんとやったときよりうまくやりたいなと思っていたら

「なのは下がってるここは俺がやるよ！」

そう言ってキラ君が前に出て行こうとするけど私の邪魔しないで欲しいの！

「おやおや、女性のやる気をそぐとは男の風上にも置けませんね？」

「なっ！？ガハッ」

すると急に現れた永劫さんがキラ君をぶっ飛ばしたの・・・本当に永劫さんの言うとおりなの

「永劫さん！」

「なのはさんはあちらの方と戦いたいんでしょう？だったらお好きに殺ってきなさい、無粋な輩は私が止めてあげますよ」

「字が違うの！」

「気にしてはだめですよ？」

でもありがたいの！

「では願います」

そう言っつて私はヴィータちゃんに向かって飛んでいった

Side End

紅那岐 Side

なのははヴィータの元へ向かったか

「てめえ！一度ならず二度まで邪魔するんじゃないねー」

そう言ってガンダム君（彼の名前しりません）が向かってくるけど

「・・・」ドンツ！x???

無数の魔弾を放ち迎撃する

「チツ、これなら！」

ありゃ、アレはフリーダムのハイマツトか？半分くらいしかあたらんかったな

「ゲホツ、なんだこの威力」

まあ一発になのはのディバインバスター程度の魔力を込めてるからな半分でも落とされたのはショックだな

「まあいいです」

すぐさま雷舞で横に回って蹴りを入れた

「なっ！？ガハッ」

うゝむ、特性でPS装甲なのか？砕くつもりで蹴ったのに罅で終わっちまった

「硬いですね、肋骨全壊のつもりで蹴ったのですが」

「テメエ・・・」

さっきから、「テメエ」とか「なッ」とかしか言っていないなこいつ・

・神威や霧夜見たく面白くもなんと無いから終わらせるかな
双銃をしまい輝紅を出す

「行くぞ輝紅！・・・見よう見まね！！ 鬼牙流 眩異断血まぶいたち！！」

この前の霧夜るときに使われた斬撃を俺流にアレンジして放ってみた

「ガハア・・・」

斬撃を食らい装甲を全壊にしガンダム君は落ちていった

「恋はどうなってるかな？」

俺は刀をしまいながらうまく手加減できてるか心配だった

Side End

三人称 Side (恋側)

其処には防戦一方の恋の姿があった

「邪魔するなーーーーーあ！俺はフェイトの元へ行きたいんだよ！」

そう言って自身が持っているソードで切りまくっているガンダム（
刹那）

そんな攻撃を方天画戟（恋姫版）で防いでいる恋

「とつとと落ちやがれーーーーえ！」

一際強い斬撃を放つも恋は無難に避けた

「くそ、何で華蝶仮面なんて居るってんだ。それに攻撃してこねえし」

面白くなさそうに言う刹那である

一方恋はというと

(・・・手加減難しい)

と上手く手加減が出来ずに攻めあぐねていたのであった

「まあいい、これで終わりだ！ロードカートリッジ！」

《カートリッジロード》

デバイスが合図すると刹那は全体的に赤く輝きだした

「食らえ！トランザムライザー！」

すると刹那はトランザムを使いライザーソード(GNソード?版)を放ってきた

「・・・ん！」

しかし、隙が多すぎだった。恋は簡単に範囲から離れると真横から刹那に一闪

「ふっ！」

一撃で刹那を撃墜したのであった

「・・・疲れた」

そう言っつて恋は紅那岐の元へ向かったのであつた

Side End

三人称 Side (全体)

紅那岐達の介入により原作と同じようにそれぞれの戦つべき相手と戦えたのであつた

また、同じようにクロノが闇の書の所持者を見つけ捕まえようとした時に仮面の男の介入も受けていた

「使え」

そう言っつて闇の書を起動し結界を破壊しヴォルケンリッターは撤退をしていったのであつた

すずか達はと言つと

「おいしーね!このカニ」

「だねー、紅くんも恋ちゃんも何処いったんだろ?」

「やなー、これを食べられへんつて勿体無いわあ」

すずかの家で美味しくカニ鍋を食べていたのであった

「でも、お兄ちゃんのことだからこれより美味しいの作ったりして・
」

「「ありえる!」「」

と取り留めの無い話をしていたのであった

Ep 10 本編か・・・久々じゃね？（後書き）

レティ「今回は恋を少し書いてみた」

トール「本当に活躍らしい活躍ないわね」

レティ「それと畏無様無断で技使ってしまったんでイヤなら言うて
ください、修正します」

トール「それにしても、転生者弱いわね」

レティ「能力におんぶに抱っこに負けるわけ無いでしょうが」

トール「負けたらお仕置きだしね」

レティ「おー怖っ・・・それは置いといて感想ありがとっござい
ました」

トール「またね」

EP 11 修正力ってのは何処までも存在(前書き)

タイトルと文章が微妙に食い違ってるのはデフォォw

EP 11 修正力つてのは何処までも存在

とある管理外世界にて今白き魔道師・ガンダム（フリーダム）・鉄槌の騎士そして・・・紅那岐が対峙していた

「やっぱり、お話を聞かせて貰うわけにはいかないの？」

「なのは！こんな奴の言う事なんて聞いても意味ねえよ！」

「うるせえ！テメエに話すことなんてねえよ！」

「やれやれ、相変わらず無粋ですね」

4人とも違う反応でそれぞれの思いを言っていた

「て言うか、テメエは一体誰なんだよ！俺達の邪魔ばかりしやがって！」

ガンダム・・・キラが紅那岐に怒鳴りつけるように聞く

「・・・（ガン無視）さて、なのはさんは相変わらずO H A N A S H I！好きですね？まあやり通すと言うなら邪魔はしませんよ」

「なんか響きが失礼な気がするの」

聞き流しながら紅那岐はあくまで邪魔はしないと宣言するとガンダムを睨む

「あなたはいい加減戦うのも飽きました・・・いい加減散れ」

そう言うと紅那岐とキラを包む結界が発動した

その結界はなのは達が使う結界とは全く異なりどこか現世うつしよとは違い
幻想的な場所だった

「な、なんだここは!？」

「ここはな転生者同士が戦う為のスペース・・・アイ・スペースだ」

やれやれと言った感じで説明する紅那岐

「転生者・・・やっぱり teme かもか」

「そうですね? まああなたと違い私のほうが格が上ですが」

紅那岐は遠まわしにお前は敵じゃないと言っている

「ざっけんなー!」

ついに切れたキラ、するとカートリッジをロードすると装甲が変わり
りだした

「装甲を変えたんですか・・・変わったんですか?」

正直フリーダムがストライクフリーダムになっただけなのであまり
見た目は変わらないのである

「一気にてめえを殺してなのは元についてやる」

「やれやれ、その気持ちに不順な部分が無ければ生かして差し上げるのに」

頭を振りながら溜め息を吐く紅那岐、それをみてますます激昂するキラ

「嘗めるのも大概にしゃがれ！ドラグーン！」

ストフリ特有の翼の青い羽が飛び出し紅那岐を襲うが

「何処を狙ってるんですか？」

「なっ!？」

いつの間にか今までのいた場所から遠い場所にいた紅那岐が双銃を構えていた

「その羽邪魔ですね？打ち落とさせて頂きます、ヴァイス・シユバルツ『福音の魔弾!』」

すると黒と白の魔力弾がドラグーンに向かい総てを打ち落とした

「くそっ!」

舌打ちをし紅那岐を睨む

「はぁ・・・マジでつまんねえお前もついいやマジで終われ」

今までの口調は何処へやら本当につまらなそうに言い放つと紅那岐の周りに7つの魔力スフィアが浮かんでいた

「な、なんだこの魔力は!？」

「終われ……『多重式屈折次元収束魔導砲!』」
デュアル・レーザージェイン

七つの極大の魔力砲がキラに向かっていき飲み込んだ

「……ふう終わったか」

そういうとふらりとした紅那岐

「っとと、流石にここまでの威力の魔導砲は魔力の消費が激しいな」

そう呟くとアイ・スペースから抜けると紅那岐は信じられない光景を見た

「おいおい……今にして蒐集受けてるのかよ」

そう、空間を出ると仮面の男に胸を貫かれ収集を受けていた

「やれやれ……助けるか」

そう言つて紅那岐は刀を出すと男に切りかかった

「はっ!」

一閃……それにより男が吹き飛ばされなのはは落ちていきそれを抱きかかえ助ける紅那岐

「……グイータさん今は逃げなさい、この方は私が助けておきま

しよつ」

「分かった……だけど次は倒してやる！」

「……調子にのるなよ小娘？」

すると殺気があふれ出しヴィータを襲う

「うっ！？な、なんだこいつ……」

「良いから行きなさい、時間が惜しいので」

するとヴィータに背を向けてどこかに言ってしまった紅那岐であった

「くそ……」

悔しそうに呟くヴィータも転送してその場から消えた

「さて、恋はどうなったかな？」

そうして紅那岐は恋に連絡を入れる

Side End

恋側 三人称

「恋そのフェイトどうしたんだ？」

紅那岐はなのはを安置させた後恋に連絡を入れてきたらフェイトをお姫様抱っこをしていた

「・・・腕生えた、倒れた、助けた」

と単語で答える恋、他の人間が聞けば何を言っているかはわからないが、慣れた紅那岐にとってはわかるものであった

「そうか、そつちも襲われたのか・・・俺から離れたら直ぐにそつちに向かったのかな？取り合えず回収する少し待っていてくれ」

「・・・ん」（コクン）

頷く恋に満足したのか通信をきった

「・・・ふっ」

息を吐き空を仰ぐ恋だった

Ep 11 修正力つてのは何処までも存在（後書き）

レティ「恋側はぶっちゃけ原作どおりだよ？」

トール「・・・ガンダム君いるよね？」

レティ「え？恋に邪魔されて終わりだよ」

トール「倒してないの？」

レティ「紅那岐に禁止されているよ、それにアイ・スペース展開で
きるの紅那岐だけじゃん」

トール「まあね、それにしても紅那岐はまずまずになったわ」

レティ「アレでまずまずなのか？」

トール「まだまだね、あの程度でふらつく程度じゃもっと鍛えない
と」

レティ「やれやれ・・・では感想ありがとうございました」

トール「またね」

EP 12 再開と手伝い（前書き）

2行以上の地の文の時にスペースを追加してみました

EP 12 再開と手伝い

なのはを抱きながら恋がいる場所まで転移するとそこで管理局員の連中が出てきた

「お前達直ちに武装解除し此方に投稿しろ」

「・・・何処をどう見たら武器を持っているように見えるんですか？」

ツツコミを入れるも華麗にスルーされる

「黙れ！従わない場合強制的に逮捕させて貰う！」

「いやだから、私達敵対してないですよね？」

「というか、何で管理局ってここまで威圧的なんだ？二次小説でボコってる連中の気持ち分かるな・・・二次小説ってなんぞやw

「投降の意思が見えない。やれ！」

そして此方に攻撃をしてくる連中・・・殺っていいのかな？

「待て！」

其処に現れた黒い奴・・・

「貴方は確か・・・ク、クロ・・・クロネ！」

「クロノだ！ふざけてるのか」

「ええ」

ぶっちゃけると顔を真っ赤にして憤ってる、マジメな奴ほどからかうと面白いな

「冗談はこれくらいにして、管理局と言う組織は問答無用で攻撃してくるものなんですか？悪いですがちょっとでも攻撃してこようものなら物理的に排除しますよ？」

軽く殺気を出すと多くの管理局員は足がすくんでいるように見える、実力無いのに突っかかってくるなよ

「く・・・永劫この子たち怯えてる」

「え？おお、私としたことが」

間近で殺気を受けているのはとフェイトは気絶しながらもカタカタ震えていた

「失礼しました、さてこの二人は貴方に預けたほうがいいですかね？それとも私達が届けますか？」

「此方が預かるよ」

クロノがそういっているので俺は二人をクロノに預け帰ろうとした

「逃がすと思ってるのか！」

一人の管理局員が魔力弾を撃ってきた、俺と恋は簡単に避けたがクロノは青い顔をしていた

「さて、クロノさんに質問です・・・これは貴方達全員の意思ですか？それとも個人の意思ですか？」

ある程度殺気を出しながらクロノに問う

「待ってくれ！ここは「答えてください、出なければ貴方も、其処に寝ているのはさん達も全員殺しますよ？」・・・個人だ」

苦渋の決断と言った表情で言い放つクロノ、言われた管理局員はどうして！って顔をしているが俺の実力をまだ測れないのか？

「そうですか・・・恋^{ラブ}帰っていていいですよ？瞬殺して追いますから」

恋は頷くと転送方陣を作るアイテムを起動し帰って行った

「さて・・・覚悟はいいですか？ああ心配なさらずとも殺しませんよ、貴方を殺しても意味が無いので」

死刑宣告すると他の管理局員たちは下がってしまい、クロノも二人を抱え下がるが一番前にいる・・・さしずめ責任としてかな？

「先ほども言いましたがこちら中々忙しい身なのでね一瞬で終わらせませす」

そう言って輝紅を出し一閃それでその局員は沈んだ

「貴方達の言い分もあるでしょうが敵対していないものに行き成り攻撃・威圧的態度など取っていると敵が増えますよ？私が言えた義理じゃないですが」

そう言つて俺は魔法陣を展開する

「では、機会があればまた会いましょう」ダ・カーポ・エンド『反転する世界』」

そして俺は転送してクロノ達の前から消えた

Side End

クロノ Side

く・・・あいつの言い分が正しいのは分かる、だが僕は最低の決断をしてしまった

「クロノ君・・・」

エイミィが近くで声をかけてくれるが、エイミィもどういつ対応を取ればいいのかわからないようだ

「そつえばなのはやフェイトは？」

「今ユーノ君やアルフと一緒に試してみているよ」

蒐集を受けてしまった二人、二人の事だから大丈夫だろう・・・だからあいつも素直に置いていったんだらうな

「そつえば刹那君がキラがって言っていたけどクロノ君はキラッ

て人知っている？」

「いや、知らないけど」

そういえば、刹那も時折おかしな事言っているな、ブレイクがどうたらこうたら

その後グレアム提督に会いに行くとアリアとマリアが何故か怪我をしていた

Side End

紅那岐 Side

さて、アレから少し時が立つたんだがはやてが倒れたらしい
気になったんで俺だけ個人的に会いに行くとリスティさんに呼ぶとめられた

「ああ、丁度良かった、少しいいですか？」

そして少し話を聞いてみるとはやての病気は原因不明と言うのは前から分かっていたが、医学的に見ても科学的に見てもどうやっても解析できないのはおかしいとのことだ

俺も有る程度原作知識は持っているが、流石に最近劣化してきたから詳しいことは忘れかけているが、確か闇の書が原因でリンカーコアを蝕みながら体の組織が支障をきたしていた気がするな

「とりあえず、お友達ならまめに会いに来てくれと嬉しいんですけど」

そう言って儂げな顔をして頼んでくるリスティさん・・・大人な

のに少女っぽい表情やめてくれませんか？めっちゃかわいいです

「わかりました、俺も大して用事があるわけじゃないので余裕がある時は来させて貰います」

別れを告げてはやてに会った後俺は帰るとヴォルケンスの動きを見るために別荘の画面を起動した。其処には管理外世界の魔獣を狩っているヴォルケンスがいた

「このままでは潰れてしまうな、助けてやるか」

そう言つて俺は別荘内の転送陣を起動し一番苦戦してるであろうグイータの元へ向かう

「て、てめえ・・・」

息も絶え絶えな状態で毒づくグイータ

「助けてあげますよ、流石に分が悪いでしょう？ああ、お仲間も私の仲間が助けに入ってるんで大丈夫ですよ」

俺は双銃を取り出しかまわず倒しまくる

「ほら、蒐集するなら早くしなさい」

急かしとつとと蒐集をさせる、この前見たく管理局が来るとめんどくさい

「さて、さようなら・・・主が早く治ることを祈ってますよ」

「お前何処でそれを！」

ヴィータが突っかかってくるが無視して帰った、帰った後他のところへ向かった七星に話を聞くと他の面子も精神的にきてるようだった

「最後の部分で救うにはアレの完成を目指すしかないな」

俺は研究室に行つて一冊の魔導書のデータを見ながら研究に没頭した

Ep 12 再開と手伝い（後書き）

レティ「そろそろ大詰めのアス'編」

トール「どうなるかはこれからの展開に期待してね」

レティ「感想ありがとうございました」

トール「では次回でね」

Ep 13 クリスマスの戦い（前書き）

リリなのAs、も佳境に向かいました

次の世界は

月姫

Fate

真・恋姫

のどれかです

EP 13 クリスマスの戦い

クリスマス当日紅那岐達一行ははやてのお見舞いに来ていた

「こんにちわ〜」x 8

はやての病室にはいる紅那岐達。病室にははやての家族のヴォルケ
ンズがいた

「っ!?!」x 5

なのは・フェイト・ヴォルケンズが息を呑む声が聞こえるが紅那岐
は気にせず話す

「よ〜タヌ鴉、クリスマスに病室は寂しいだろうと思って見舞いに
来たぞ?」

「またそれかい!」スパーン

紅那岐のボケに勢い良くツッコミを入れたはやて、それにより病室
の空気は和やかになった

「ボケはこれくらいにして、ヴィータとかも久々だな元気にしてい
たか?」

「お、おう!兄ちゃんも元気だな」

まだ若干引きつってはいるものの紅那岐の存在により和やかな空
気で話は進む

「さて、寂しいはやてにクリスマスプレゼントだ!」

そう言っつて大きい箱を渡す紅那岐

「わくうれしいわ、てかさつきから寂しい寂しいやかましいわ!」

ツッコミを入れながらも顔は綻んでる

「開けてええ?」

紅那岐が頷きはやては箱を開けると

ビヨーンッ!

とバネを利用して出てくる顔の模型・・・ぶっちゃけビックリ箱である

「プ・・・ブハハハハハハハ」

大声で笑う紅那岐、他の一同はしばし放心してしまった

「いまどきこんな悪戯すなあああああ」スパコーン

「げふっ」

今度はかつ飛ばす勢いでツッコミを入れたはやて

「あゝ面白かった今度は本当にプレゼントだ」

そう言っただけは先ほどより小さい箱を渡した紅那岐

「今度はまともなものなんよね？」

「二度ボケはせんよ」

そう言っただけ箱を開けるはやてそこには

「ターキー？」

「おう、この日の為に作ってきたぞ？ソースも特別製だ美味しく食ってくれ」

其処にはクリスマスの定番のターキーが入っていた

「びみよーやない？」

「食ってから言ってみ？自信作だ」

「はやて食おうぜ！」

自信作と言う部分で反応したヴィータがおねだりをしてきた

「最初はケーキにしようとしたんだがな、なのはの家が喫茶店だな
そこのケーキを持っていく話になったから俺はターキーにしたんだ」

「ありがとな」

何だかんだで感動したのか涙目のはやて
そして面会時間が終わり紅那岐達は帰って行った

「あれ？なのはちゃんにフェイトちゃん？」

なのはとフェイトはなにやら用事があるらしくすすつか達と分かれた

『紅くんこれって・・・』

『ああ、シグナム達に会いに行つたんだろ。俺は少ししたら見に言ってくるお前らは当分一緒に行動してろ』

『・・・ん』

『はい』

そして各々の帰り道急に結界が張られた

『しまった！？起動の時期を忘れてた！』

『え？それってつまりは・・・』

『ああ、俺はこれから行つてくるお前らは出来るだけアリサを急かしてここから離れる！いざとなつたら転送魔法使つて離脱しろ』

それだけ言うと紅那岐はなのは達の下へ駆け出した

Side End

なのは Side

シグナムさん達が闇の書に飲み込まれた後、はやてちゃんが変わっ

ちゃった・・・

「また、繰り返されるのか・・・」

涙を流しながら語る闇の書さん

「はあっ!」

フェイトちゃんがソニックフォームになって戦っているけど・・・
あのフォームはやばいの(ゴクリ)

Side End

紅那岐 Side

現場に着くと其処にはトリップしてるなのはと辺りをきよるきよ
ろと見回しているフェイト、そして闇の書の管制人格がいた

「・・・なにをやっているんですか?」

なのはははっとした表情で戻りフェイトは何故か涙目だった

「新手が来たか・・・」

そうして手を構える管制人格

「アレは!」

フェイトが気づいたか

「逃げますよ！私はなんとでもなりますが貴方達はダウンしてしま
います！」

フェイトがなのはを抱えて逃げ出すのを見て俺も駆け出す

「ふえ？どういうことですか」

なのはが聞いてくるが

「あの魔導書の真の能力は蒐集行使、つまり蒐集をした対象の能力
を使えるのです。今回は貴方のスターライトブレイカ-を放とうと
してるんですよ」

「だからってこんなに離れなくなたって・・・前に永劫さんに撃った
時防がれちゃったし・・・」

「バカですか？バカですね・・・私はあの時慢心相違で動いているの
が奇跡の状態だったんですよ？それに実力的に倍以上の私と貴方達
だとダメージ量が違います」

そう言ってるときにバルディッシュから報告が入る

《前方300ヤードに民間人がいます》

つてまさか！

「なのはアレって！」

「アリサちゃん！すずかちゃん！七星ちゃん！恋ちゃん！」

おいおい、まだいたのかよ・・・

《きます!》

バルディッシュの報告が入る間に合わねえ・・・こうなったら!

『すずか!七星!恋!』

『わかった!』x3

ズドオオオオオオン!

桃色の砲撃が当たり一面を埋め尽くす、俺はダ・カーポの応用で
防御結界を張り防いだが他は・・・

Side End

フェイト Side

なんとかすずか達を守ろうと庇おうとしたけど間に合わなかった。
・・・また私は守ることができないんだと思っっていたら

「あ、危なかったよお」

「なのはのSLBって威力高かったんだね」

「・・・痛かった」

「え?あんた達一体・・・」

霧が晴れてきて見えたのは防御結界を張っていたはずか達だった

「ふえ！？ずずかちゃん達その姿は……」

なのはが驚いてる声で私も我に帰った

「そ、そうだよ！その姿はまるで……」

「今はソナナ暇ないですよ？きました」

永劫の声で前をみると闇の書が……

Side End

三人称 Side

闇の書の管制人格が書に溜まった魔物のデータを使いフェイト達の動きを止めるが紅那岐が助けたりしていると

「はぁあっ！」

フェイトが斬りにかかって行く

「あの人は……聞きなさい！これから何が起ころうとも貴方達は騒がず自体の收拾に努めなさい！」

そして紅那岐は駆け出す

「お前も我が内で眠れ」

闇の書がフエイトに何かをしよとしたときに紅那岐が割って入った

「あなたも大概無茶をしますね？」

そういうと紅那岐の体は粒子となり闇の書に吸い込まれていった

Ep 13 クリスマスの戦い（後書き）

レティ「クリスマスのイベントと言えば私はバイトの記憶しかないです」

トール「うわっ！寂しい」

レティ「黙れ！では感想ありがとうございました」

トール「As' 本編も残すは2・3話！」

EP 14 夢は叶えるもの・叶うもの(前書き)

某サウンドトラックから引用(50%)

EP 14 夢は叶えるもの・叶うもの

「ここが、闇の書の中か・・・何も無いな」

闇の書に取り込まれてから訪れた空間だが、正直何も無い。立っている感覚はあるが地面は無く傍から見れば浮いていると言つ表現がぴったりである

「何で貴方は夢をみないの？」

突然現れた白金と言つ言葉が似合う女性に紅那岐は迷うことなく答える

「夢は見るためにあるんじゃないやなくて、叶えるものであり、叶うものと言つのが俺の持論だからだ」

「でも、貴方はその夢を叶えようとしていない」

女性に言われて紅那岐は苦笑い気味に答えた

「それはもう叶っているからさ」

「どづいづいと？」

「簡単さ・・・昔の俺は何処までも一人であつた、友人もいなければ話し相手すらな・・・それが今はどうだ？俺を兄と慕う奴、俺を好きと言ってくれる奴、それに異次元で友人すら出来た、そんな俺が夢を叶えようとしない？違つたる」

そう言って笑う紅那岐である。女性はそんな紅那岐に自愛の目を向ける

「そう、だったら早く行って上げなさい待っているわ」

「分かってるさ」

そう言っていこうとすると再び女性が止めた

「貴方に力を」

そう言って女性が言っていると紅那岐の体に青い光と赤い光が宿る

「これは？」

「貴方が持っていた因子を覚醒させただけ・・・でも貴方はまだ使い方を知らない」

「そうか、いずれ使うこともあるということかな？」

「ええ、でも使わないことを祈るわ・・・それは人には過ぎた力だから」

「与えといてそれは無いんじゃないかな？」

再び苦笑い気味に問いかけると

「あなたは何も持てなかったから・・・」

「そうか・・・もう行くよ」

「もう会うことは無いでしょうね」

「そうだね・・・じゃあね母さん」

そう言っつて紅那岐はいつの間にか持っていた本を片手に今度こそその場を後にした

「紅那岐あなたの行く道は何処までも自由になつたわ、私達が与えられなかつた自由を貴方は好きに進むと良いわ」

そう言っつて白金の女性・・・紅那岐の母は消えていった

Side End

はやて Side

おぼろげな意識の中目を向けると其処には銀髪の女性がおつた・・・

「敵や！」

「あ、主？行き成り何を言っつて！？」

「銀髪女性は敵や！胸も大きし敵や！」

私は力いっぱい叫ぶとおぼろげな意識は完全に覚醒したようやつた

「て・・・あれ私はいつたい？それに貴方は・・・」

自分の今の状況が理解できなかった、暗い空間にこの銀髪さんと

私しかおれへん空間にただあるだけやった

「私は闇の書と呼ばれる管制プログラムです、主を侵食してしまい今の状況に至ります」

そう言って説明してくれる管制プログラム、そしてこれ以上どうにも出来ないと言明した時一人の男のこがここに来た

「お、お前は何故ここに！」

「探したぞはやて、力を使って探知しても転移できないって言うんで手繰り寄せながら探して見つけてみれば何で二人とも泣いているんだ？」

そういわれて初めて自分の頬に涙が伝っていることを知った

「そ、それよりも誰なん？私の名前を知ってるみたいやけど」

「え？わかんないのか？ひどいな」

「そんな今時流行らなそうな仮面つけた友人なんて居らんわ」

そついうと目の前の男のこは「ああそうだった」と言っつて仮面を外すと其処にはつて

「くーくん！？なんでこんなとこに居るんや！」

「いや、なんでつて言われたら取り込まれたからとしか言えんがこの後のため？」

「いや、疑問系に言われても……ってこの子見たらあかん！」

そう言っつて私は目の前の子を隠す様に手をわたわたさせてしまった

「ついに沸いたかはやて？」

本気で疑問そうに聞いてくるくーくん……orz(どつやっつて！
?)

「まあいいや、お前もそろそろイジイジしてんな、折角目の前に今までの主と違うのが現れたのに諦めて終わりか？勿体無いと思わないとな？」

そう言っつて目の前の娘に優しく語り掛けるくーくん……やっぱ敵
やったか

「さて、俺はそろそろ戻るとするか後はお前しただはやて……
ダ・カーポ・エント
『反転する世界』」

するとくーくんは見たことも無い転送魔法陣を作り消えてしまった

「……くーくんの言っつとおり諦めるのは早いな」

「無理です、暴走プログラムは止まりません」

「私は管理者や、なんつでもしてあげられる。そして名前を上げる、
もう闇の書や呪いの魔導書と呼ばせへん」

そうして私は外で戦っつている人に語りかける

「外の方・・・えと管理局の方、この子の管理者八神はやてです」

「はやて（ちゃん!?!）」

「なのはちゃんやフェイトちゃん!?!それにすずかちゃんや七星ちゃんまで!?!」

外にいたのは友達のなのはちゃん達やった・・・私は事情を説明し後の事は任せるし無かった

「夜天の主の名において汝に新たな名を送る」

私はこの子の顔を両手で包むように撫でながらいったげる

「強く支えるもの幸運を生かせ祝福のエアール・・・リインフォース」

私が名前を与えると同時に世界は白く染まる

Side End

紅那岐 Side

俺は恋の近くに転送した、理由はこれからあるだろう戦いにおいて恋の力も必要だからだ

恋は飛べない特殊な状況か飛べるものに乗るしかないからである、そのため今はすずか達とは違い一人見ているしかないであろう恋の場所に跳んだのである

「・・・お帰り」

いの一番恋が言ってくれるこのこの言葉が何より俺には嬉しかった
あの中でもあったように俺の夢は既に叶っているのであるから、
そして俺の大切な友人を守る為にもこれからが正念場だ

「く、紅那岐あんたも……」

近くにいたアリサが驚いてた……そういえばさっきは俺マスクしてたしな

「それは後で話すよ……」ダ・カーポ「復元する世界」

そして俺は復元ダ・カーポする世界を使うと其処には体表を黒に覆われ、角と鬣は体とは変わり真っ白に輝く聖獣を

「碎刃よこれから正念場だ、恋をつれてきてくれ」

「分かりました、主」

「……よろしく」

『恋様よろしくお願いします』

すると碎刃に鬣が現れ恋がたずなを握りしめると同時に俺達はなのは達の下へと向かった

Ep 14 夢は叶えるもの・叶うもの（後書き）

レティ「碎刃が聖獣になりました！」

トール「いつの間？」

レティ「別荘で碎刃が幻想種エリアにいたら黒麒麟が何暴走しそうだったらしくて紅那岐に自分を滅することをさせる為に能力を全部上げたらなっただって」

トール「そういえばあの子確かに自分が暴走しそうで危なかったとか言っていたような・・・」

レティ「そんなの放り込むなよ・・・」

トール「だって、暴走したらしたでそれより強いがいるから滅して終わりだし」

レティ「へ〜」

トール「では感想ありがとうございました」

レティ「次回は紅那岐が中にいたときの外での対決編（短いだろうけど）を掲載予定」

トール「またね」

EP 15 月の輝く夜の戦い

紅那岐が闇の書に吸収され色々とやっている時同じ頃外ではなのはとフェイトは防衛プログラムと戦っていた

「やあっ!」「はあっ!」

なのはとフェイト、本来なら遠近の戦い方をする二人のコンビネーションならたとえ格上だろうが早々負けることや苦戦することも少ないはずだが今は状況が違った

「消えた!」「また!?!」

なのはとフェイトの連携が上手くいきダメージを与えられると思うときには何故か消えてしまい攻撃を外されてしまっていた

「なのは後ろ!」

「え?きやあ!」

先ほどから似たようなやり取りを行っており、被害はどう見てもなのは達のほうがかい

「アレは確か刹那君がやっていた量子化ってやつだよな?」

「うん、どうやら蒐集された人の力を使えるみたい・・・」

量子化：自身を量子化することで移動や回避に应用を利かし相手を追い詰めることが出来るのである

もちろん再現率は100%近くであるが、時々上手く行かない時は普通に防御を使い防いでいるのであった

「穿て・・・ブラッディ・ダガー」

すると今度は防衛プログラムから反撃と言わんばかりに赤いナイフのような魔法が放たれたのは達を襲おうとしていたが、その攻撃は後からきた二人によって防がれた

「大丈夫？なのはちゃん」

「フェイトも大丈夫？」

「「すずか（ちゃん）、七星（ちゃん）！」

恋と一緒にアリサを逃がしていたうちすずかと七星が二人のピンチを救ったのだ

「さて、多勢無勢だけではやてちゃんを助ける為にも負けられないよ」

「それに、お・・・永劫を助ける為にもね！」

そう言つて二人は戦う姿勢をすると自分の武器を取り出した

すずかには光り輝く魔力で作られた羽と手には銃を持ち、七星は腕にグローブをつけ周りにはナイフが浮かんでいた

「私達も負けてられないね、レイジングハート！」

《イグニッション》

「バルディッシュ私達も」
《イエス、サー ザンバーフォーム》

なのはとフェイトもお互いの最大の力を出せるそれぞれのモードに移行した

なのはのレイジングハートはまるで槍みたいな形状になり、フェイトのバルディッシュは大剣という言葉がぴったりの形状になったのである

「繰り返される悲しみも悪い夢もきつと終わらせられる」

そう言っただけなのははレイジングハートを構えながら防御プログラムに語りかける

「誰もがきつとそうでありたいと願うのはきつと悪いことじゃない、けどそれを都合のいい言い訳にしちゃいけないんだ」

自分がかつてあったこと、ありえたことを語る

「それに、たとえ誰がどう言おうとも誰もが望むものはきつと其処にあるから」

さすがが自身に起こったこと、救われたことを語る

「誰かがくれる夢は夢じゃなくて唯の絵、自分で見ることをとめることは決して出来ない」

七星は言う、自分が限りなく人間に近いものでも違つと言うことを思いながら

「・・・」

防御プログラムは無言で構えると其処には無数の魔力スフィア・
・フェイトのフランクスシフトである
闇の書の特徴・・・相手から蒐集したものを行使することが出来るのである

「みんな私の近くに！」

七星が叫ぶと同時に放たれた

「打ち砕け・・・雷槍」

「『無に還った少女！』」
フリーシニングガメン

本来なら七星達に襲い掛かるはずの無数の魔力弾だったが、何故か七星達を避けるように飛んでいた

「何をした・・・」

「簡単だよ？此方に飛んでくる運動エネルギーを私達を避けるようにしただけ

フリーシニングガメン
無に還った少女：これは発生した運動エネルギーをグローブから発せられる魔力線に触れたところから任意の方向に帰ることが出来るものである

「まあ、返そうと思ったんだけど流石に量が多くて逸らす程度しか出来なかったよ」

そう言っただけで苦笑いする七星だが、遠距離攻撃にとってこれ以上脅威なことは無い、なぜなら撃つたら返されるか逸らされてしまうからだ

「それに余所見してる場合じゃないみたいだよ？」

七星が言うとなのはが攻撃の準備をしていた

「アクセルチャージャー起動！ストライクフレーム」

《A・C・Sスタンバイ、オープン》

するとレイジングハートの杖の先端から魔力で出来たまるで針のようなものが生え、次いで杖には羽をあしらったものが生えた

「エクセリオンバスターA・C・S・・・ドライブ！」

すると砲撃系のものには珍しく・・・珍しくなくそのまま突進していった

防衛プログラムはとっさにシールドを張り防ぐ

「く、硬い」

本体なら抜けるであろう突進力と魔力だが、蒐集した相手にキラ（もういない）のデータも入っており防御能力も上がっているのがある

「はああっ！」

反対の場所から今度はフェイトが斬りにかかっていたがそれも防がれていた

「あと、一手あれば」

誰かが言うと同時にそれは現れた

「それじゃ私だね！」

するとなのはとフェイトの中間と言える場所から声が聞こえた

「範囲を限定して撃てば被害は無いよね！」

右手に金色の爪の形をあしらったものの手のひらから魔力を集めていた

「お願いルナティック！」

《ロードカートリッジ》

2発のカートリッジをロードしそれは放たれた

「ブレイズ・・・バスタアアアアアアアア！」

手のひらから魔力砲を放ち防衛プログラムを打ち抜く

もちろん、体にフィールド系防御を張り直撃は免れたがそれでも両手に張っていたシールドは緩みなのははシールドを貫き先端に魔力を貯めフェイトの方はシールドに罅を入れていた

「っブレイクウ・・・」

二人が魔力を解き放った

「シユウウウウウウツッ！」

「スラアアアアアアアアシュ！」

二人の攻撃は方やシールドを抜け解き放たれ、方やシールドを切り裂きながら解き放たれた

辺りには煙が立ち込められているため、どうなったのかが分からない状態であった

「煙が晴れるよ！」

其処には多少はダメージを受けていたがまだ健在の防衛プログラムの姿があった

それぞれに緊張が走る中構えている動きがぎこちなくなつたと同時に念話が聞こえてきた

『外の方・・・えと管理局の方、この子の管理者八神はやてです』

「「「「はやて（ちゃん）！？」「」「」

『その声はなのはちゃんやフェイトちゃん！？それにすずかちゃんや七星ちゃんまで！？』

その後はやてちゃんにどうにかしてって言われた時にユーノ君から連絡が入った

「なのはやフェイト！それに其処にいる子達聞いて！どんな方法でもいい魔力ダメージでぶっ飛ばして。全力全開手加減なしで！」

それを聞いた4人は・・・

「さっすがユーノ君わっかかりやすい！」
《その通りですね》

「行くよバルディッシュ！」
《イエス、サー》

「良いね！私達も続くよルナティック」
《分かりましたお嬢様》

「ジークルーネ、アレで行くよ」
《アレって何？》

「ちよつと！ここでボケないでよ！」
《冗談です、踊り狂う悪魔ハーフプット》
エアレナイオス

それぞれ必殺の構えを取り防衛プログラムを見る

「行くよみんな！」

「」「」「うん！」「」

なのは構える自身が得意とする必殺の砲撃を

「エクセリオオオオオン」

フェイトが構えるその大剣を振るうにふさわしい体勢で

「スプライト……」

さすがが背にきらめく翼をはためかせ銃を構える

「ブラスタアアツアアア」

七星は舞うナイフと踊るように構えた

「『黙示録ネロに』・・・」

そして4人は放ったはやてを救う為に

「バスタアアアア！」

「ザンバアアアア！」

「ウイイイイイング！」

「『アボカリユプス
記されし皇帝！』」

そしてそれが命中すると光が世界を照らすように眩いた

Side End

はやて Side

白い光に包まれてる中私に語りかけてくれる声があった

『リインフォースを認識、管理者権限を使用可能です』

そう言ってくれるリインフォースやけど声が少し暗い気がする

『ですが、防衛プログラムの暴走は止まりません。・・・時期に強大な力は暴れだします』

「んー、まあなんとかしよ」

そして私はリインフォースを抱くように持つ

「行こかりインフォース」

『はい、我が主』

「管理者権限発動」

『防衛プログラムに割り込みをかけました、数分程度ですが時間の遅延が望めます』

「それだけあれば十分や・・・おいで私の騎士達」

S i d e E n d

三人称 S i d e

空には白き球体に覆われたものがあり、海には黒き球体に覆われたものがあつた

そして今白の方が眩い光があふれ出した。一同が驚いていると白の方の周りに守護騎士・・・ヴォルケンリッターの姿が現れたのである

「ヴィーたちちゃん!」「シグナム!」

なのはとフェイトはそれぞれに思い入れがあるのか嬉しそうに呼んだ

しかし、ヴォルケンリッター達は目を伏せ主の目覚めを謳う

「我ら夜天の主に集いし騎士」

剣の騎士シグナムが謳う

「主ある限り我らの魂尽きることなし」

湖の騎士シャマルが謳う

「この身に命ある限り我らは御身の許にあり」

盾の守護獣ザフィーラが謳う

「我らが主夜天の王八神はやての名の下に」

鉄槌の騎士ヴィータが謳う

すると光が割れ中からはやてが出てきた

「「「「「はやて（ちゃん）！」「」「」

はやてはなのは達に微笑むと杖を構える

「夜天の光よ我が手に集え祝福の風リインフォース・・・セットアップ！」

そしてはやてはセットアップを終わりみんなと話いた時後ろから声

が聞こえた

「どうやら無事に終わったようだな」

どこか聞きなれた声を聞きながら後ろを振り返ると其処には

「よー」

と軽いノリで右手を上げて挨拶していた紅那岐と馬？にまたがりついでにきていた恋がいたのであった

Ep 15 月の輝く夜の戦い（後書き）

レティ「短くなるとか言ってたくせに長くなつたが後悔は無い！」

トール「それはどうでも良いけど、すずかの技が分からない人おおいと思うわよ？」

レティ「簡単だよ？最初のは紅蓮が使う直射型の輻射波動で後のはランスロット・アルビオンが使ったエナジーウイングとライフルの合わせ技っただけ」

トール「順番逆じゃないの？」

レティ「威力は変わらないけど、範囲が違うからこの順番だよ？」

トール「へ〜」

レティ「次は決戦編」

トール「感想ありがとう」

レティ「次回で〜」

EP 16 聖なる夜〜終わりの戦い〜(前書き)

敵をネタ化

EP 16 聖なる夜〜終わりの戦い〜

「え、え・・・えええええええええええええええええ！？」

はやての復活に喜んでいたなのは達だが急に後ろから声をかけて振り返ってみれば意外な人物がいた

「な、なんで紅那岐君がいるの！？」

「何でつて俺も魔導師（つーか魔法使い？魔術使い？）だからだよ簡単に説明する紅那岐でこれ以上の説得力が無いものだったのなのは達は黙ってしまった

「な、なんで正体隠していたの？」

「え？なんとなく」

「・・・」×紅那岐達以外

場に沈黙が訪れた

「話し合ってるときにすまないが、時間がないのでこれからの事について話したい・・・そいつについては後で O H A N A S H I ！すればいいさ」

「待て！なに不穏な事いつてやがる、ギャグ補正にや俺ですら太刀打ちできんぞ」

急に現れたクロノによって話が勝手に進み紅那岐はありったけのツッコミをするも悲しいかなスルーされてしまう

「方法は現在2つ。強力な氷結魔法で封印するか、アルカンシエルで消滅させるかの2つだ」

「えっと、1つ目は恐らく無理かと魔力の塊なので」

「アルカンシエルもダメだ！はやての家がなくなっちまう」

1つ目はシャマルが否定し、2つ目もヴィータが腕をバツテンにして否定している

なのははアルカンシエルが何かが分からなかったのでユーノに説明を受けていた

「ここで撃たんで宇宙^{ウツク}で撃てばいいだろ」

紅那岐が何気なく言った一言が場を再び沈黙させていた

「で、でもそんなこと出来るの？」

「出来るだろエイミィ？」

そう言っつて通信ウィンドウを開いた紅那岐

「な、なんで」

「後で教えるよ、それより結論を」

「ええ出来ますとも。管理局の技術を嘗めないで」

そう言っつて親指を上げながら答える

「んじゃ、後はアレをぶっ飛ばそうぜ？」

こうして決まったフルボッコタイムの方法、なのは達はダメージを受けていたのでシャルルに回復をさせて貰っていた

「俺はクロノのサポートをする、ガンバレみんな！」

Side End

紅那岐 Side

まだ、黒い球が割れないけどいやな予感がする・・・触手が何故か緑なんだよね

(いくら原作と違つと言つても最終形態其処まで変化したっけ？)

考えているとどうやら割れるみたいだな

「キシャアアアアアアアアア！」

「うわぁ・・・」

誰かが引いてるけど何でアレなんだ・・・

どういうものか想像して欲しくまず土台らしき本体？体？みたいなものがあり其処から触手がうねうね動いている

ここまではイイヨね？誰でも分かることだし

次にその土台についている体があるんだきちんと頭（しかもなかアソテナっぽいものがついている）や腕もある土台がある程度でかいからか体もでかいここで既に原作っぽくないよな
極めつけが触手の一部には顔があるんだよ、しかも牙がいっぱい凄
いことに

もういいや何かって言うと・・・

「何でデビルガンダムなんだよおおおおおおお！」

あれか？ガンダム＋生物＝デビルガンダムなのか！取り込んだの
SEEDと00だろ！なんでGになるんだよ！

なのは達がデビルガンダム？って言うてるが気にしちゃいられん、
負けないだらうけどね

「気色悪いがやるぞお前ら！」

声をかけてなのは達を叱咤すると返事が返ってきたのでよしとする、
シールドは全部で6枚

それぞれヴィータ・なのは・シグナム・フェイト・七星・すずか・
はやての順でやる事になっている
俺と恋は最後の時まで温存だ

Side End

三人称 Side

「チェーンバインド」「ストラグルバインド」

「縛れ、鋼の軛！でいいいいいいいやあああああああ！」

まずはユーノ・アルフ・ザフィーラがそれぞれ魔法を使い邪魔して

くる触手を一掃した

「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーファイゼン」

《ギガントフォーム》

「轟天爆砕ギガントシユラアアアアアアク！」

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン行きます！」

《ロードカートリッジ》

「エクセリオンバスター！」

ブレイク・・・シユウウウト！」

ヴィータによる轟撃・なのはの魔力砲によりバリアを撃ち破った

「次！シグナムとテストロッサちゃん」

「剣の騎士シグナムの魂炎の魔剣レヴァンティン、刃、連結刃に続くもう一つの姿」

《ボーゲンフォルム》

「駆けよ隼！」

《シュツルムファルケン》

「フェイト・テストロッサ、バルディッシュ・ザンバー行きます！
・・・はあ！」

「撃ちぬけ雷刃！」

《ジェットザンバー》

シグナムによる弓矢による射撃・フェイトによる斬撃によりバリア

を打ち破り切り裂いた

「お願い！七星ちゃん、すずかちゃん！」

「今度はただの生物、本気で撃つよジークルーネ！」

《りょうかゝい、踊り狂う悪魔全射出》
エイレナイオス

「いつくよー！ネロ・アボカリユプス黙示録に記されし皇帝！」

「ルナティック、アレを不可視モードで出しといて」

《はいお嬢様》

「月村すずかとルナティック・ソル行きます！ プラスタア

アアアアア・・・ストラアアアアアイク！」

七星によるナイフによる一点集中攻撃にすずかによる腕部による
輻射波動照射とウイングの魔力砲でバリアを打ち破った

すると、デビルガンダムはあせったのかガンダムヘッドを出し攻撃
をしてこようとしたが・・・

「盾の守護獣ザフィーラ、攻撃なぞさせええん！」

ザフィーラの魔法により槍のようなものに串刺しにされ落とされた

「はやてちゃん！」

「彼方より来たれ宿木の枝、銀月の槍となりて撃ち貫け・・・石化
の槍ミストルティン！」

はやての魔法により全体が石化していくと思われたが、直ぐに割れ

体を変化させながら対峙していた

「うわ、まだ」

「攻撃しても直ぐに再生されちゃう」

再生され変化もされまわりも引いているが・・・

「攻撃は通っているプラン変更はなしだ」

「その通り！クロノ援護する俺の後に続け」

そうすると紅那岐は一本の綺麗な槍を出す

「こつこつ使い方すると怒られるかな？まあいい、行くぜ！崩嵐槍
総てを凍てつかせろ」

紅那岐は取り出した槍を逆手に持つと槍投げの容量でデビルガンダムに放つするとデビルガンダムが槍が刺さった部分から凍りだした

「クロノあの基点から凍らせろ！」

「分かった、悠久なる凍土よ凍てつく棺のうちにて永遠に眠りを与えよ・・・凍て付けえ！」

《エターナルコフィン》

紅那岐・クロノによる氷結により完全に動きが止まってしまったデビルガンダム

「行くよみんな！」

「うん」×4

なのはの呼びかけに全員が返事をした

「全力全開・・・スタアアアライトオオオオ」

「雷光一閃・・・プラズマザンバアアアア」

「ごめんな、お休みな。響け終焉の笛ラグナロク・・・」

「不可視解除！月光砲ルナアクティブ！」

「・・・征く！アキユ軍神」

それぞれが最大の必殺技の体制をとり闇の書の闇を葬ろうとした

「っっブレイカアアアア！」

「月光砲ルナ・・・フルバアアアアスト！」

「フォース五兵・・・」

そして五人の必殺技が決まりまわりの外郭が総て落とされた

「本体コア露出・・・捕まえた！」

「長距離転送」「目標軌道上」

「転送！」

そしてユーノ・アルフによりアースラの前に転送された
その時にはある程度の大きさまでになっていたがそれにかまわず発
射される

「アルカンシエル・・・発射！」

そして強力な攻撃により総てが終わったかに見えたが・・・

「艦長反応あり！ダメです効いていません！」

「何ですって！？次弾発射準備を」

「ダメです！チャージには30分かかります」

それを聞いていた総ての人が終わりと思ったが

「後は俺がやる、全員手をだすな・・・それと映像記録もつけるな
よ」

其処に割り込んできたのは紅那岐であった

「幾ら貴方が強いと言ってもこれ以上は・・・」

「良いから！」

そうすると連絡が切れたのである

Side End

紅那岐 Side

いやな予感がしていたが本当に当たるとは

「対兵器戦略思考発動、現状態総ての可能性を示せ」
ミームスブルン

俺は総てを使い現状起こっていることを予想し戦略を組み立てる

「く、紅那岐君いったいどうするの」

「そつや、いくらなんでも一人じゃ」

「そつだよ、私達も」

そう言ってくる三人娘だが

「魔力を使い切ったお前らじゃ無駄だ俺に任せとけ……復元する
ダカ
世界」
イボ

デビルガンダムを空中に固定召還しどうするかを決めた

「これで屠る！疾風迅雷」
タービュランス
『九つの世界』」
ノートウンゲ

雷光化し総ての力を上げ、俺は準備をした

「え？今までと違う……」

「これが全力の総てを射抜く雷光だ見ている」
トルハンマー

俺は眼前のデビルガンダムを睨む……最終形態になってるんだけど

「行くぜ！」「トールハンマー・フルアクセス総てを超越せし九つの雷光！！」

そして九つの雷光はデビルガンダムに飛んで行き跡形も無く吹き飛ばした

トールハンマー・フルアクセス総てを超越せし九つの雷光：ノートウング九つの世界の力を使い平行世界の結果をトールハンマーに乗せ放つ九つのトールハンマー。威力は通常の9乗だが結果を持つてくるので必然的に必殺である。因みに九つのライト世界を使わないと撃てない

「雷神トールの力の前に消えうせる」

俺が言うと同じりは啞然としていた

「どづした？」

「どづしたじゃない！」

がやがやと言われたがまとめると・・・最初からやれよ！とのことだった

「すまん、お前らの敵であったから俺がでしゃばっちゃまずいかな？と思って手を出さなかったただけだ」

そついうと何とか納得してくれた

「さて、かえってクリスマスパーティーでもやるっぜ！」

「おー！」×全員

「あ！」

「どうしたの？」

「アリサ忘れてた・・・」

本当に忘れていたらなのは達もそうだったと言っ顔をしておりど
うしようと話しているとはやてが倒れたようだった

これからの事を考えながら俺は誰にも悟られないように魔導書の準
備をしたのである

Ep 16 聖なる夜〜終わりの戦い〜（後書き）

レティ「と言うわけでA・S編もう直ぐ終わりです」

トール「ガンダム君は？」

レティ「もう少し後で出すよ？てか、彼病んでるしw」

トール「はあ？」

レティ「キラいなくなっただね」

トール「え？ガチホモなの！？」

レティ「ウホッ！いい男・・・ってじゃ無くてまあ親友を殺されてしかも誰も知らないってなったらねえ」

トール「ああなるほど」

レティ「と言うわけで秋代様と時空の旅人様に貰った武器を使わせてもらいました」

トール「崩嵐槍は回収してるわよでは次回で〜」

EP 17 おわりとはじまり(前書き)

し、仕事が忙しくて書けなかった・・・

学生なのに

Ep 17 おわりとはじまり

はやてが倒れたが調べてみたら急に魔力を使った副作用と言うことだった、そのあとはやての入院している病院へ運んでやつたらフリスさんに怒られたんだが何故俺まで？

そして、その後アースラから呼び出しがあつたから行つたんだが・
・

「何故俺は拷問にかけられているんだ？」

何故かギザギザの床に正座をさせられ膝の上には重りが乗っているという効果が抜群な拷問にかけられた

「紅那岐君、何で敵になつてたのかな？かな？」

「そつだよ？わざわざ私達と戦う必要なかったと思うんだけど？」

黒い笑顔でたずねてくるのはとフェイト・・・こええ

「いや、どちらかに味方してみる戦力バランス崩れすぎただろ？お前ら二人で掛かって来ても敵わないのに」

その言葉がいけなかったのかなのは達の眼のハイライトが消えた

「これはO H A N A S H I！なの」

「手伝つよなのは」

「待て！拷問受けてるのに何で更に受けにゃきゃならん！」

そう言って制そうとしたら

「それはママが好きでやってることだよ？」

となりにいたアリシアが教えてくれた

「プレシアアアアアアアアアアアアアアアアア！恩人になんにしてくれやがるうううう！」

力の限り叫んだために足のダメージが・・・

「え？好きな人（この場合恩人）には悪戯するものでしょ？」

なに言ってるのこの人？って顔で返してきやがった・・・

「ぎっけ、つゝ・・・痛くて続けられなかった」

「さあ！お前の罪を数えろ！」

二人そろってそんな事言われたってな・・・

「だが断る！逃げさせて貰おう」

そう言って拷問から力技で抜け出して逃げようとしたら

「ガッ！バインド！？だがこんなもん」

バインドで足を止められたが逃げられと思っていた時期が俺にもありました

「ちよっ！誰だこんなにかげやるのは！」

そう言って周りを見るとユーノ・クロノ・アルフ・シャマル・ザ
フィーラ・その他の管理局の皆さんが俺に向かってバインドをかけ
てました・・・ぶっちゃけ全員だね

「「「さあ！O H A N A S H I ! の時間だよ！」」」

「待て！一人増える・・・はやてなんでお前も参加してやがる！」

「そんなんきまっとする・・・ノリや！」

ノリなら仕方ないか〜

「「「さあ、行こう（なの）（や）」」」

「・・・はい」

そうして俺は今まで見たこと無いO H A N A S H I ! を見
ました・・・二度と思い出したくない

S i d e E n d

三人称 S i d e

闇の書事件と呼ばれるものが終わり少したった後リインフォースが
あることを頼んできた

「なにか？お前がいるとまたはやてが倒れるから消して欲しいと？」

「ああ、今は防衛プログラムがないがいずれ再びできるようになっているのでな、それが起きないように今のうちに私を消して欲しい」

「かまわんが、はやてには了承を得ているのか？」

「いや、主はきつと反対するだから内密にお前に頼んでるんだ」

そう言ってリインフォースは紅那岐にお願いをした

「・・・俺の言ったことを忘れたか？」

少々怒気のコもった声で返してきた紅那岐に思わず息を呑む声が聞こえた

「しかし・・・」

互いに思っている為の行動というのは紅那岐も十分理解しているがそれでも自分勝手な行動をし、自分以外に迷惑をかける行為を何より嫌っている紅那岐にとっては今回のお願いは正直お断りであった

「だが主を失いたくないんだ・・・たのむ」

それでも決めた事を貫くと言う行為を良しとする紅那岐にとっては今回の事は正直迷うところである

「・・・はあ、しょうがないか」

深い溜め息を吐きながら答える紅那岐に直ぐに反応するリインフォ

「ス

「そうか！だつて、ただし条件がある！」・・・条件？」

容認してくるとは思ってなかった紅那岐に了承を得て喜んだのもつかの間、紅那岐は条件を出してきた

「条件は3つ、1つ目は俺なりのやり方でやらせてもらうこと、2つ目はなのは達を参加させること、3つ目ははやてをその場に参加させること・・・3つ目に関しては俺が無理やりでも黙らせるから」

3つ目に関してはリインフォースの意見を見捨てたものだが、紅那岐にとってリインフォースの意見を通す最低限の譲歩であった

「・・・分かった、ありがとう赤羽」

そう言って礼を言ったが

「ああ俺の事は名前でも呼んでくれ、正直名字で呼ばれるのは好きじゃないんでな」

「了解した・・・クナギ」

そうしてはやて説得に向かった二人

「なんでや！なんで消えなあかんの、一緒にいようや！」

案の定泣きながら否定するはやて

「言ったただろう？遠からずあの悲劇が再び始まることが決まってるし

まっているんだ。だったらここはこいつの意思を尊重してやるっ」

そう言っつて優しく諭す紅那岐であるが

「イヤや！くーくんも何で消そうとするんや、それでも人か！」

そう言っつて力の限り叫ぶはやてだったが

「いつまでも甘ったれるんじゃないわよ！」

今まで黙っつてた七星が怒声を飛ばした

「黙っつて聞いてれば、何を甘えたこと言っつてんのよ。そりや家族が消えてしまうのは悲しいけど、それはあんたを思っつての行動でしようが・・・しかもなに？お兄ちゃんのことを否定してるの？だったら私がやっつてやるわよ、あんたの意見なんて聞く義理は無いからね」

普段おちやらけている七星が見たことも無いような形相ではやてを睨んでいた

「あ・・・あ、あ」

七星による殺気によりはやては声を出すことは愚か涙すら止まっつてしまっつていた

「七星その辺にしる、はやて確かに俺は人じゃないかもしれない、それは俺自身が思っつていることだ。しかしな、今回は俺がリインフオー・スに依頼として受けたからなそれを実行するだけだ・・・それでも諦めきれないなら俺を恨め」

それだけ言つと紅那岐は七星の耳を引つ張りながら出て行つてしまつた

「主、不義理をお許しください・・・私は消えてしまつかもしれませんが将達は残り貴方を支えます。そして私の名を次に生かしてください」

はやてと目線を合わせ涙を流しながら語りかけるリインフォース、そしてはやても止まっていた涙が再び流れ出す

「明日に行われます、どうか主もいらしてください」

そついうとリインフォースは紅那岐と同じように出て行つてしまつた

「「はやて(ちゃん)」」

今まで黙つてみていたなのは・フェイトが声をかけてきた

「紅那岐君がね私達も参加させるつて言つてきたの」

「うん、紅那岐はね無駄なことをしないつてはやても知っているでしょ?・・・悪ノリの時は別として」

そしてはやてを諭す二人

「確かにくーくんは無駄な事はせんな、悪ノリときは別やけどね」

何処まで行つてもしまらない所に誰かの絶叫が響き渡る

「ぎゃああああああ・・・ごめんなさあああああああい・・・」

・・・

誰かと言うより七星しかいないのだがどうやらお仕置きを受けているようであった

「とにかく明日の結果を見てからきめよはやてちゃん」

「そうだね、ナギの事を本当に見極める最後の機会かもね」

そう言つて二人も出て行き、病室で一人考えるはやてであった

（翌日）

「集まつたか・・・さて準備を始める、なのは・フェイトはリインフォースを送るのを手伝つて貰う」

「え？でも紅那岐君はどうするの？」

「そ、そうだよ私達にやらせるの？」

と本来なら紅那岐が送るはずなのだが何故か二人に遅らせようとしていた

「俺は別のことをやる・・・ファフナー例のアレを」

そついうと紅那岐はファフナーから一冊の本を出した

「それは？」

「これはな・・・紅天の書と言つた魔導書だ」

そう言っつて説明を始めた

「方法は簡単だ、なのは達が送る時に俺が干渉し本来消える存在のリインフォースをこの魔導書の管制人格として登録するんだ」

説明を聞いていたメンバー全員が紅那岐に食って掛かる

「だ、だっつたらはじめから言っつてえな！私の涙は「最後まで聞けえ？」

「ただし問題がある、それは・・・これがはやての魔導書ではなく俺の魔導書となっつてしまうと言っつことだ」

それを聞いたメンバーが再び息を呑んだ

「もちろん後ではやてにも使えるようにはするつもりだが・・・金輪際こいつは俺のデバイスとしてしか100%機能はしなくなっつてしまっつんだよ」

その説明を受けたメンバーはなんともいえない空気になる

「ゆえに夜天の書は消滅し、紅天の書として俺と共に歩むことになる・・・それが俺に今できる最大の方法だ、決めろどうするかを」

そして現在の主であるはやてを見据える紅那岐、その表情はどこか悔しげであつた

「・・・救つたっつてこの子を」

「分かった・・・なのは・フェイトはじめてくれ」

「うん」

今まで大人しく聞いていたなのは達に開始の合図を送ると紅那岐もはじめた

「今ここに降りるは紅く染まる天の守護者、天を染めよ夕焼けのようにあかく・赤く・紅く、そして我と共に歩もう無限の荒野を我は進むもの、我と共に行こう無限の天に向かって」

言葉に乗せどこか悲しくもしっかりとした言葉に全員聞き惚れていたそしてリンフォースが薄く消えて行きやがて完全に消滅したように見えたが・・・

「紅天の書・・・セットアップ！」

紅那岐が紅天の書を起動すると当たりは光に包まれた

光が晴れると其処にはリンフォースが暴走体として戦っていた時の服がズボンになり黒が主体だったのが赤と黒の色合いになった紅那岐の姿があった

「ど、どうなったんや？」

夜天の主のはやてが声をかけた

「・・・」

しかし紅那岐は答えなかった

「ま、まさか失敗・・・」

何処からそんな声が聞こえてきたが・・・

《大丈夫です・・・私はここにいます》

そして何処からか声が聞こえてきたのは

「リイン！」

そう、消えたと思われるリインフォースであった

「ふう・・・これで終わったな」

セットアップを解除し紅那岐は元の姿に戻ると其処には今までと同じようにリインフォースが立っていた

「くーくんありがとな、この子を救ってくれて」

「いや、本当の意味では救えなかった・・・だから礼は言わないでくれ」

「だが、私が消えずにまた生とは違うが歩むことが出来るのは貴方のおかげだ、だから例を言わせてくれ・・・我が主よ」

そうして傳いたリインフォース、その姿を見て照れくさそうに頭をガシガシとかきながら呟く紅那岐

「ったく、主って柄かよ俺は」

「しかし、この名前ははやて様がくれた名だ新しい名を貰えないで
しょうか主」

そう言っつて再び紅那岐に問いかける

「ん？今のままでいいだろう、ただし愛称はリースだな。リインと
言う名ははやて次にお前が持つかもしれない奴につけてやれ」

「わかつたわ！」

元気に返事をしたはやてと隣で嬉しそうに微笑んでいるリイン改め
リース

「ああそれとなリース、堅苦しい言葉はあまり使わんでくれ嫌いじ
やないがつまらん」

「分かりました、主」

全く分かってないリースであった

「紅那岐君そういえばこの子の能力って？」

なのはが急に性能が気になったのか聞いてきた

「ああ忘れていた、能力は蒐集行使に似ていてな見た技をコピーで
きると言うものだ」

さらっと言った紅那岐だがものすごい言葉が聞こえたのである

「え？見ただけって・・・それって前より凄いやね？」

フェイトが聞くのと周りが頷くのは同時だった

「まあ、それでも単体で使える範囲は狭いからな・・・そうそうリースは基本的に人間と大差ないぞ？正直俺がセツトアップしても無用の長物だからな、だから基本的にはその書自体がリースのデバイスだ」

つまり、リースはデバイスとしてではなくほぼ人間として過ごすというものであった

「ど、どうやってそんな技術を」

急に通信ウィンドが開きリンデイが聞いてきた

「覗き見とは感心しないなあ、まあ良いがなのは達のシステムも送ったの俺だしな・・・設計したのはさすがだが」

なのはとフェイトはさすがを見ると其処にはピースサインをしていなかった

「で、技術だが・・・後で見せてやるよ」

そうすると話を変えろという雰囲気だ紅那岐がみんなに言った

「さあって、かえってリース誕生会とはやて復活祝いでもするぞ！そのためにご馳走を機能のうちから用意しておいた！」

「やったああああ！」×その場の全員

そして全員は帰って行った

後日自分達の進むべき道を決めたのは達は親や友人に自分たちの事を説明するのであった

Ep 17 おわりとはじまり（後書き）

レティ「A・S 編終了！最近忙しくて書く体力無かった」

トール「あの子ついにあの力の片鱗が・・・」

レティ「どつたの？力って」

トール「何でもないわ、それよりこの後は直ぐに次の世界に飛ばすのかしら？」

レティ「お前が聞いてどうするし」

トール「読者の変わりよ」

レティ「呼んでる人少ないだろうけどね。まあいいや、この後はマテリアルとStetsに続く話を書いてからある程度年がたったら飛ばす予定だよ」

トール「ふん」

レティ「では、感想ありがとうございました」

トール「またね」

A E P 1 三人娘修行1 (前書き)

A E P 1 アフターエピソード

A E P 1 三人娘修行1

闇の書事件から数日後俺は三人娘なのは・フェイト・はやてに話があると云われアースラに呼び出された

「来たぞ〜ってかお前らもいたのか」

三人娘以外にもヴォルケンスがいたのである

「んで話って？」

「紅那岐君お話があるの」

お話って部分で俺は速攻で踵を返して逃げようとしたが

「またバインドか！だが今度は・・・ってまた取れねえ」

バインドなんて速攻で外せるのに何で外せないんだ？

「これがギャグ補正や！」

「そっか〜なら仕方ないな」

「何で素直に受け止められるの？」

フェイトが純粹に聞いてくるがな、ギャグ補正は逃げるよりも受け止めたほうが後々のダメージが少ないんだ

「んで、O H A N A S H I! ってなんだ？」

「絶対勘違いしているの」

なのはの O H A N A S H I! だぞ? 逃げるにしても何故受けなきゃならんのだ

「なのはちょっと変わって私が説明するから」

そう言っただけなのはと変わったのはフェイト

「えっとね、ナギって強いでしょ? だから私達を鍛えて欲しいなって」

そう言っただけ節目がちに言ってくるフェイト、かわいいじゃねえか

「それなら最初から言えよ、なのは O H A N A S H I! って言うからってつきり……って待てなのは取り合えずそれしまえ!」

レイジングハートを俺に向けて構えているなのはを制して話を続ける

「にゃ!?! なんてばれたの」

「俺を嘗めるな、半径10m圏内なら動作は愚か話し声まで聞こえるわ」

ぶっちゃけ戦闘時しか使わないスキルを何故使ってるかって? フェイトと変わったときのなのはの表情が怖かったんだ

「で、鍛えてくれたのはどついつこつた? お前ら十分強いだろ?」

「でも、ナギみたいに強い人が現れたら私達どうしようもないし、それに前見たく不意打ちされたらどうしようもないから・・・」

正直リースに魔法をぶち込んで覚えさせようとしてたんだがついでだしいつか

「かまわんが、期間は？」

「「「え？」「」」

三人娘達全員考えてなかったな

「はぁ・・・」

「そこで残念そうに溜め息つかんといてえな」

直ぐに強くなる薬があるわけじゃないし、どっいう風に強くなるって考えてなかったのかよ

「じゃあない、久々にアレ使うか」

「あれ？」×紅那岐以外のその場の全員

「お前ら明日から3日間親とかに帰らない+連絡取れないって伝えとけ。んで明日の10時にうちに集合な？」

そうやって俺はバインドを壊しその場を後にした、さくアレの設定変えなきゃな

Side End

三人称 Side

〈翌日〉

「おじゃましまーす」×家に来た人たち

「いらっしやいませ、紅那岐さんならテラスにいらっしやいますのでござ」

出迎えたノエルが案内をし紅那岐の所へ向かう一同

「おゝ来たか？」

のんびりとコーヒーを飲みながら迎える紅那岐

「さて、これから俺の部屋に向かうからついて来い」

そう言っつて移動を始めた紅那岐についていく一同

〈移動中〉

「到着つて何してやがるはやて！」

「きまっつとるエロ本探しや！」

どや顔でいうはやてに紅那岐は問答無用でアイコンクローをかました

「あだだだだだだだだだだ」

「小学生の俺が持つてるわけねえだろうがお前だけ修行なしにしてやるのか？」

「あだだだだだ・・・ご、ごめんやからゆるして」

メキヨツ！

なにやらへんな音をしたので放しその場で倒れるはやて

「あたた・・・もう直ぐで変な性癖に目覚めるところやったで」

スス

そう発言するはやてだが、みんなははやてと距離をとる

「さて、変態はほつといてみんなこの魔法球の前に集まれ」

そう言つて紅那岐達はダイオラマ魔法球の前に立つと魔法陣が現れ中に吸い込まれていった

「用こそ我が別荘に」

そうして案内したところはこの別荘のロビーエリアであった

「お兄ちゃんおそいよ〜」

「流石に入るのが早かったね」

「ん」

「それにしてもすさまじいなここは」

上から七星・すずか・恋・リースである

「え、え？ここは一体」

なのはが混乱のきわみのように聞いてきた

「ここはな、ダイオラマ魔法球といってさっき見たジオラマみたいなものだ」

そう言っつて説明を始めた紅那岐

「お前達はこれからここで3ヶ月ほど修行をしてもらう」

しれつと言う紅那岐だが、この別荘のシステムを知らないのは達
はさらに混乱した

「さ、3ヶ月って・・・年越しちゃうの！」

ちょうど大晦日の日に帰れると説明を受けていたなのは達だがこ
こで3ヶ月過ごすという言葉は正直考えてなかったのである

「安心しろ、ここと外では時間の流れが違うからな」ここで3ヶ月は外で3日だ」

そう言っつて説明をすると安堵した溜め息が聞こえてくる

「んじゃ、訓練エリアに飛ぶぞ？」

そして転送ポートまで移動した一行

「んで右からフェイト・なのは・はやて・ヴォルケンスの順に入っ
てけ」

「え？全員一緒にするんじゃないの？」

聞いてこられたので答えた紅那岐

「お前ら全員戦闘スタイル違うだろうが、だから個別だ」

そしてとつと入れというしぐさのままなのは達を急かした

「みんなまた会おうなの」

「うん、今度は三カ月後外で」

「きばっていいこうな」

「では主私達も行ってまいります」

「あ、忘れてたけど最後の日に俺と模擬戦だから」

「先に言ええええええ！」

そつツツコミを食らった紅那岐であった

A E P 1 三人娘修行1 (後書き)

レティ「三人娘改造計画序章終了」

トール「どういう風に改造するかは次回以降ね」

レティ「今回はコマメデで感想ありがとうございました」

トール「では」

A E P 2 三人娘修行2

「なのは修行 Side」

「さて、なのはまずお前のスタイルはなんだ？」

「私のスタイルは砲撃なの！」

自信満々で答えるのはに対し紅那岐はどこか疲れた顔をしていた

「はぁ・・・」

「なんで溜め息ついているの！」

腑に落ちないなのはは紅那岐にツッコムが紅那岐はスルーしながら言う

「確かに砲撃がお前の主力の技だがそうじゃないだろうが、お前は魔導師としてはある意味完成系の砲撃とそして何より誘導弾の能力だ」

「私と変わらないんじゃない？」

「違う。いいか？お前の真の能力としての特徴は多数の誘導弾をことも何気に使えることだ」

「どっぴいっぴいとっ？」

分からず頭に？マークを浮かべながら聞くのは

「一度に多数の誘導弾を使ってるの回りにいるか？フェイトは愚か七星やすずか、はやてですら基本的には直射が基本なのにお前の基本は誘導弾が基本魔法になっているんだ」

「ふえ？」

「いまだ理解が出来てないのはは相変わらず？マークを浮かべていた

「・・・お前の場合は体で覚えたほうがよさそうだな」

「そういつと紅那岐は双銃を取り出した

「あ、前と違うの」

「いまさらかよ、まあいい」ドンッx？

「紅那岐はそこらかしこに魔力弾を打ち出したその数1000以上

「さて、ここからが修行だまずは静止しているこの魔力弾をお前の魔力弾で相殺しろ」

「それなら簡単なの「ただし！」にゃ！？」

「お前が使える魔力弾はこの半分だ」

「無理なの！どうやってこんなに」

「それを行うのが修行だ、これは本当に簡単だぞ？動いてないんだからな」

そういつと紅那岐は何処からともなく一つの機械をだした

「それは？」

「まずか謹製カウンント君だ、俺が撃つた魔力弾とお前が撃つ魔力弾を計測してくれるそして・・・復元する世界・EX術式固定ダイカーボ
アインハルト」

紅那岐が何かをしたが、何も起こらなかった

「な、なにをしたの？」

「ん？お前が数値を超えた場合魔力弾を元に戻すようにしたただけだ。んじやがんばれよ？次はフエイトのところか」

それだけ言つと紅那岐は轉移しその場にはおびただし数^の魔力弾となのはだけが残された

『そうそう、お前の魔力が切れたらそこで終了だ無理しようものなら俺が物理的に寝かせるからな』

念話で念を押してきた紅那岐になのはは考えがばれたと思つた顔をしていた

「ううここで無理して看病してくれるならいいけど、紅那岐君きつと放置しかしないの・・・だったらやっつてやるの！」

そして意を決したようになのはは修行を開始した

Side End

くフェイト修行 Sideく

「悪い待たせたか？」

「ううん、そんなに待ってないよ？（これって恋人の会話みたい／＼）」

ほんのり顔を赤くして答えるフェイトだが紅那岐は気にせず続けた

「さてフェイトお前の戦闘スタイルはなんだ？」

やはりなのは同じように自分のスタイルの確認をさせる

「私は高速戦闘による近く中距離がメインの戦い方だと思う」

「正解だ、ただしお前の武器はその限りじゃないけどな」

「どづいつこと？」

なのは同じように？マークを浮かべるフェイト

「お前のバルディッシュのザンバーフォームはぶつちやけ高速戦闘には不向きだ、正確には不向きと言うよりお前のスタイルと合っていない」

「えつと・・・」

「つまりだ、大剣つてのは大概力押しなんだよ。それに対してお前は力押しには向いてないむしろ手数で相手を倒すというのがお前に

は向いているだろう」

説明を受けなるほどと理解するフェイト

「え、でもそうするとバルディッシュの意味が・・・」

《サー！私を捨てないでください》

必死の様子で懇願するバルディッシュ

「つつてもいまさら変えられないから後でそれについては鍛えてやる」

「分かった」

《ほっ・・・》

返事と同時に安堵の溜め息をついた主人と愛機

「でだ、お前のスタイル以外に特徴があるが分かるか？」

「変換資質のこと？」

「そうだ、お前は俺と同じように雷の力を使える。逆に言えばその力いかによって威力が大きく左右することがある」

其処まで説明すると紅那岐は準備を始めた

「何してるの？」

「ん？ちよいと待て・・・よし！」

そうすると一つの機械を設置した紅那岐

「これはなお前の動きを観測してくれる機械・・・ぶっちゃけビデオカメラだな」

「それをどうするの？」

「これから行う修行は二つ動きの最適化と無効化だ」

説明を受けるがどういつ風にするかの説明を受けてないフェイトは相変わらず？を浮かべていた

「まあ待てって・・・再現する世界」

ダ・カーポ・セカンド

紅那岐が魔法を発動すると其処にはフェイトの愛機が浮かんでいた

「ウソ！？バルディッシュがなんで」

「行くぜ、サンダーフォール！」

すると紅那岐は空に飛ぶとフェイトの技の一つサンダーフォールを放った

「きゃあ！」

そこらかしこに雷が落ちはじめフェイトにあたりかける

「さてフェイトこれが修行だ、お前はこれからこの雷を必要最低限の動きで避ける・・・ああ防御するのは禁止だそして最終的には食らっても大丈夫なようになれ」

それだけ言うと紅那岐は去ろうとするが思い出したように言った

「ああ、止めたきゃその機械弄れ、逆に出したいなら弄れば再現してくれるから」

それだけ言うと今度こそ紅那岐は転移していった

「やるしかないよね・・・」

それだけ言うとフェイトは修行に打ち込んでいった

Side End

〈はやく修行 Side〉

「待たせたタヌキ」

「待たせといてそれ言うか！」スパーン

「お約束って必要だと思っんだ」

「私かてそれは思わんでもないけど、それを今やる必要があるんか」

ボケていた紅那岐が急にマジメな顔をしてはやくてを見つめた

「な、なんや行き成り見つめんといてな／＼／」

ほのかに顔を赤らめて逸らすはやくてだが

「ぷっ、お前はやっぱり面白いな」

「またかあああっ！」ズガーン

ハリセンで出せる音の限界を超えたツツコミを紅那岐にかましながら息を荒げているはやて

「さて、ボケはこの辺で修行だが・・・」

「ゴクリ」

「お前のデバイスが完成するまで待つてくれ」

「ちょ！？ここまで引つ張つといてそれが！」

「まあ待てもう少ししたら「お待たせ」来たみたいだな」

其処にやってきたのはさすが・アリシア・プレシアだった

「はやてちゃんが使うデバイス作ってきたよ」

「ご苦労様」

「紅那岐君あの施設は素晴らしいわね、思わず興奮しちゃったわ」

「ね、なっちゃんと一緒にいると退屈しないよ」

そう言ってテストロッサ親子（フェイト以外）は研究エリアの充実度に満足していた

「はい、はやてちゃんのデバイスのシュベルクロイツと夜天の書を模した魔導書だよ」

そう言つて渡すとはやてが驚いていた

「や、夜天の書を模した物やて？どうしてそれを」

「全く同じものじゃないけどな。ただ能力的には大差ないぞ？作れた理由は取り込まれたときにある程度の内容をコピーしたからだ」

「やったら、リースを救えたんじゃ」

「言つただろう同じじゃないつて、それはあくまでお前のスキルの蒐集行使における魔法の保存しか能力を発揮できん・・・後はあいつを入れるだけの能力をもつ魔導書は俺やすずかががんばっても2年はかかるからだ」

それだけ言つと納得できるようなできないような顔をしていた

「わかつたわ、それで私はなにをすればええの？」

「お前はな・・・その前にお前ちよつと魔法使つてみ？詠唱のあるやつ」

「そんなんでいいの？分かつたわ」

それだけ言つとはやては取り合えず魔導書に乗っていた魔法を詠唱して魔法を放つた

「ふむ・・・プレシアどう思つ？」

「そうね、素質は十分だけど遅すぎるわね」

「どういうことじゃ？」

「戻ったか、お前はまだ自分のスタイルが分からんと思うから説明するが、お前のスタイルは広域殲滅型だ・・・ぶっちゃけ大きいのが撃って一気に敵をまとめてぶっ飛ばす大雑把なスタイルだ」

「う・・・なんかひどい言われようじゃ」

「だが、威力は高いからな使いようだな」

「そ、そうじゃ！威力ならなのはちゃんに負けんで？」

「負けるぞ？あんなに詠唱おそけりゃいいだしな」

そういうとはやてはorz状態になってしまった

「改めて言われるとへこむわ」

「そこでお前の修行だよ・・・これをつける」

「これは？」

「それはな一定時間詠唱を続けると電流が流れるというものだ・・・罰ゲームで使う奴よりきついからな？」

「どんな拷問じゃ！」

「だ〜から修行だつて言ってるだろうが、いいか？マルチタスクつて言うのがあってなそれは並列思考と呼ばれているが簡単に言えば一度に何個かの考えを出来るということだ」

「なるほど」

「でだ、それを使えるようにし詠唱を何個かに分けて撃てるようになれば詠唱はぐっと短くなるぞ」

「それが私の修行つてことなんよね？」

「ああ、因みにプレシアは大魔導師と呼ばれるくらい凄いらな詠唱魔法の速射とかもできるらしいぞ」

「ホンマなんですか？」

「ええ、前は体が病んでいたけど今は出来るわよ？」

するとプレシアは誰もいないところに手をかざしちよつと詠唱するとどどかい魔法を放った

「凄いな」

ポツリと呟く紅那岐であったが

「貴方なら避けるでしょ？」

「当たり前だ、ちよつとでも詠唱してるならその隙を狙って近づいて斬り捨てる」

「ホント規格外ね」

「まあな、さてはやてがんばれよ？」

それだけ言つと紅那岐達は転移していった

「やったろうやないか！くーくんを絶対ギャフンといわしたる！」

『ギャフン』

「念話でいちいちいうなあああ！」

ツッコミをしながら修行を開始したはやてであった

Side End

〈ヴォルケンス修行 Side〉

「すっかり待たせてすまないな」

「かまわん、もともと我らはずいでだ」

「兄ちゃんアタシ達はなにをすればいいんだ？」

「お前達などどうするか考えて一つの結論に至った」

「なんなの？」

「・・・お前達は成長はするが正直三人娘に比べればほとんど言つていいほど少ない、ならば技術を大きく成長させたほうがいいだ

るっ」

紅那岐はそれだけ言うと宝石を二つ取り出した

「なにをするつもりだ？」

「俺が契約してる奴を出そうとしてな」

「なんだと!？」

「コール!黒龍王シングルトバラム・白龍王サヴァンティル!」

すると二つの宝石が輝くと其処には黒き鎧鱗を纏った黒き龍と白き毛鱗を纏った白き龍が圧倒的な威圧感を持ちたたんづんでいた

『我らを呼ぶとは珍しいな主よ』

『どつしたのだ?それにこの小兵どもはいつたいなんだ?』

「すまんな2体とも、ちょっとこいつらの修行の手伝いをしてくれ」

それだけ言うと紅那岐はヴォルケنزズに向き直る

「お前達の目標はまずこいつらを傷つけることだな、今のままじゃ正直傷は愚か本気になれば瞬殺されるから気をつける?」

『主の頼みだ、当分は動かんでやるからな』

『しかし、見込みがなければそれまでだ』

「これは本当に竜なのか？私が前に見たときはもっと小さかったが」

「それに喋ってるし」

「・・・むう」

『そこらの弱きものと一緒にするな』

『我らは王、竜の中でも最上位だ人語を話すのも当然と思うがよい』

「因みに最強の竜もいるがそれは見せるだけだな、俺ですらマジにならんと倒せんくらいだし」

「分かった、感謝する赤羽」

そう言って代表としてシグナムが礼を言って修行を開始したヴォルケンズ

「あ、ヴィータが行き成りぶっ飛ばされた・・・まあガンバレや」

そう言って紅那岐は転移していった

Side End

くリリース Side

「リリース体の調子はどうだ？」

「きわめて好調です主」

「そうかよかった、でだお前の相手はな・・・飛鳥」

「は〜い兄様」

紅那岐が呼んだのはカワイイ飛鳥である

「飛鳥はカワイイなあ、ウリウリ」

「くすぐつたいよ兄様」

とことと現れた飛鳥に頼ずりしながら撫でる紅那岐に嫉妬の視線をぶつけるリース

「主はそれを見せる為に私をよんだのか？」

「うんにゃ、お前の魔導書の保管をさせようと思ってな。リースはこう見えて俺並に強いぞ？遠距離に関して言えば俺を超えるわ」

それだけ言つとリースは驚愕していた、紅那岐を超えろと言つのが想像できなかったのだ

「さてと、飛鳥お前に渡したゲームは終わったか？」

「うん！」

「そうか、だったらこのおねえちゃんと一緒に魔法ごっこをしていていいぞ？」

「ホント！よろしくね姉ちゃん！」

「あ、ああ・・・主よろしいのですか？」

「かまわんぞ？遠距離攻撃こいつには効かなくなっちまったからな」

「分かりました、よろしくな飛鳥」

「うん、リース姉ちゃん」

そうしてリースと飛鳥の弾幕ごっこが始まったのであった

Side End

（紅那岐一人 Side）

「さて、なのはは魔力弾の質の上昇と操作性、フェイトは最適化と体制、はやては詠唱速度の高速化と威力維持・・・一週間くらいで終わるかな？」

それだけポツリと言うと紅那岐は魔法陣を展開する

「あいつらだけ修行をして俺が適当とも言えんからな、トールの所で修行してくるか」

それだけ言うと紅那岐はトールの所に飛んだのであった

AEP 2 三人娘修行2（後書き）

レティ「前・中・後で行こうと思ったたら思った以上に長くなりそうになった」

ルーネ「そうですね〜あ、ツール様は紅那岐さんの修行に向かいました〜」

レティ「あいつも負けず嫌いだからね〜」

ルーネ「今回出てきた龍はなんですか〜？」

レティ「アレはジュエルスオーシャンってゲームに出てきた龍だよ。シングルバトルは2速歩行型でサヴァンティルは東洋の龍に似た外見だね」

ルーネ「ふえ〜紅那岐さんはそんな方と契約してるんですね〜」

レティ「一応紅那岐が契約してるのは、黒龍王・白龍王・黒麒麟の3体だけだけど、裏技で神竜とも契約してるよ」

ルーネ「ふえ〜凄いですね」

レティ「使う機会めったにないけどね、それでは感想ありがとう〜ございました」

ルーネ「次回もお願いします〜」

A E P 3 三人娘修行3

1日目

「なのは修行 Side」

「シュウウト！」

《アクセルシューター》

なのはの声と共に10個の魔力弾がレイジングハートから放たれ紅那岐が出した魔力弾にそれぞれ向かっていった

「にゃ！？私のシューターのほうが壊れちゃった・・・」

《マスター、どうやらアレには私達のバスター並の魔力が込められているようです》

簡単に壊せると思い普通のシューターで撃つたはいいが実際は自分のほうが壊されてしまう事態が起きたのであった

「だ、だったら私もバスターで」

《マスターお忘れですか？あの方はシューターで打ち落とせとっております》

「分かってるよ・・・だったらカートリッジロード」

《ロードカートリッジ》

なのははカートリッジを1発ロードすると改めてシューターを放つと何とか相殺し消せたが、あくまで相殺なので自分のシューターも消えてしまっていた

「うう、紅那岐君一体どれだけ魔力込めたのはつきり言って半分で消せるとは思えないの」

《がんばりましょうマスター》

そうしてなのは再び修行に打ち込んでいった

Side End

～フェイト修行 Side～

「きゃあっ!」

悲鳴を上げながら紅那岐のサンダーフォールから逃げまくるフェイト

「うう、怖いよお・・・」

所かまわず落ちる雷、逃げたところを狙い済ましたかのようにも落ちてくる為大きく飛びのいても危険はついて回っていた

《サー、一発でも当たれば我々はそこでアウトになるくらい強力ですので気をつけてください》

「どっやって!?!」

涙目になりながらフェイトは必死に雷から逃げていた。紅那岐の言う最低限の動きと言うのが分からずとにかく当たらないように逃げるのに必死であったのだ

「とにかくがんばんなきゃ」

《がんばりましょう》

Side End

「はやく修行 Side」

「彼方より来たれ宿木の枝、銀月の槍となりて」

彼女はとにかく詠唱魔法の練習をしていた、この前のプレシアと
言う例を出されてしまっている為出来ないとはとてもじゃないが言
えなかったのだ

「撃ch・・・あばばばばばばば」

そして今詠唱が一定時間を越えてしまったために電流が流れそれに
感電しているはやてである

「あたたた・・・ちよー本当にシャレにならんくら強いやないか！」

彼女もまた紅那岐の言うマルチタスクなるものの習得自体は簡単
に出来たが、それと詠唱の分割化は別物であり上手くいっていないか
つただ

「それに、唯分割しただやったら意味なかったし・・・」

元来詠唱とはその魔法の特性を出し、威力を上げるものなのであ
る。紅那岐の言う分割化とは矛盾が孕んでいた

「絶対終わらせてくーくんをギャフンて言わせたる！」

違うところで情熱を燃やすはやても同じように再び修行に打ち込む

のであった

Side End

（ヴォルケンス修行 Side）

『どうしたお前ら、先ほどから何をやっている？』

『我らは動いてないんだぞ？何ゆえ攻撃が通らん』

「くそ、なんだこのでたらめな強さは」

「私って意味がないんじゃない？」

「でいいいいいいやあああああ！」

「オラア！」

紅那岐が召還した龍2体はヴォルケンスを相手に赤子と遊ぶような感じで相手をしていた

「紫電・・・一閃！」

「ラケーテンハンマー！」

シグナムはシングルバブルにヴィータはサヴァンティルに攻撃を繰り返したが、全く効いていなかった。否攻撃が届きさえしていなかったのである

『炎を纏わせて攻撃力を上げるのはよいが、炎とはこういうものだ

！』

『どうした小さきものよ、その槌は飾りか？我に衝撃すら届いてないぞ』

「な！？これが炎だと、なんだこの熱量は」

「小さい小さいうつせえ！アタシはヴィータだ！」

『私の炎は総てを無に帰す炎、貴様の炎は我から見ればただのマッチの火だ』

『覚えて欲しいのならば我を認めさせるくらいの事はして見せよ』

そして2体は再び動かず己の翼や大気を操りヴォルケンスを攻撃（超手加減）していた

Side End

（リース修行 Side）

「姉ちゃん、逃げてちゃ戦いにならないよ？」

「そうは言うが、この量を裁けと言うのか！」

リースは必死になって逃げていた、見た目にはフェイトと同じように魔法から逃げているようにも見えるが、こっちはある意味もつと鬼畜だったのだ

「くそ、主の言葉を冗談と思っていた報いか」

「よそ見してちゃー！」

「しまっ！……ぐ」

リースの修行は飛鳥が放つ魔法を受け止めるか相殺するかによって自身に記録し自身も使えるようにすると言うもののだが、飛鳥の魔法はほとんどタメがなかったりするため受け止めるのは何とかできるが相殺は凄く難しかったのである

「なんだ、あたり一面を灼熱で燃やされて攻撃されたと思ったら次は大爆発を起して攻撃されるとは」

因みに飛鳥がやったのはドラ E・F など汎用性が高そうな魔法ばかり出てくるゲームであった

「兄様の為にもがんばんなきゃね！」

「主、私はやってみせます！」

そうして再び修行をしているリースであった

Side End

7日目

くなのは修行 Sideく

「レイジングハートこれで決めるよ！」

《イエス、マスター》

「シュート！」

なのはが魔力弾を放ち次々とターゲットを撃墜していった、時には誘爆を使い一度に大量の魔力弾を消滅させている。

実は紅那岐はわざとそれが出来るように魔力弾を張っていたのである。それになのはが気づいたのは4日目であるその後それを使いクリアを目指していたが、流石の紅那岐でそれだけでは出来ないようにしていたのである

「はあはあ・・・紅那岐君のおかげでシューターの使い方ってのが分かったね」

《はい、一発に込める量により相手への牽制や撃墜の違いを持たせる方法と言うのがあったとは》

そう、紅那岐が教えたかったのは相手を倒すのに大きいのはつか撃つ必要はなく同じ一発でも誘導弾と言うことで油断する人もいるのでそれを使えば有利に進められると言うことであった

また、シューターの作り方も変わり唯打ち出すだけでなく硬くしたり、逆に爆発するといったものも作れるようになった

「ラストー！」

そして今なのはは目標をクリアしたのであった

パチパチパチ

どこからともなく拍手が聞こえ振り向いてみると其処には紅那岐が立っていた

「紅那岐君！」

「お疲れ様なのは。どうやら意味が分かったようだね」

いたわりの言葉と共に紅那岐がなのはに聞いた

「うん！砲撃だけが攻撃じゃないって分かったの」

「合格だ！次の試験は3日後に行うから今は休め！」

「え？そんなに休む必要はないの」

そう言っつて修行をしたいとキラキラした目で紅那岐を見るのは

「だあほ！今のうちから体を酷使したら壊れるに決まっとうろつが！
いいか3日は絶対魔法を・・・お前に言ってもやりそうだからこれ
をつけとこつ」

そう言っつてなのはの手首にブレスレットをつけた紅那岐

「えつとこれは？」

「さすがが作った奴で魔力を使ったり心拍数が一定値以上高くなつた瞬間気絶するほどの電流が流れる奴だ・・・因みにこの鍵がなければ外せんからな？」

そうしてなのはは無理やり3日間休みといえる本来なら喜べるはずの休みを取らざる得なくなつた

Side End

くフェイト修行 Sideく

其処には空中で静止し目を瞑っていたフェイトがいた

「来る……」

ポツリと呟いた瞬間フェイトが今までいたところに極大の雷が落ちるがフェイトは無駄な動作なくそれを難なくと避けた

ついで落ちてくる雷にはバルディッシュを避雷針代わりにし雷を落としバルディッシュに纏わせるのも成功していた（プラズマガンバーなどは自身の魔力で作った擬似雷の為被害はないが、この雷は紅那岐の魔法の為本来ならフェイトでもダメージは受けてしまうものである）

「ふう……上手く言ったね」

《完成したといって問題ありませんサー》

パチパチパチ

其処に拍手が聞こえ振り返れば紅那岐が立っていた

「ナギ！」

「どうやら雷を味方につけられたみたいだなフェイト」

「うん、でももうヤダかな」

苦笑い気味に答えるフェイトに対して頭を撫でてあげる紅那岐

「あう・・・／＼／」

顔を真っ赤にしながらうつむくフェイトをニヤニヤ見ながら紅那岐が言う

「んじゃ、取り合えず3日間は安静にしとけ。疲れっるのは目に見えて分かりづらいからな」

小さく返事をし休みに入ったフェイトであった

Side End

）はやて修行 Side）

「行け！石化の槍よ」

それだけ言うとはやての魔法のミストルティンは完成しなにも無い空間に向かつて飛んでいった

「ふう・・・何とかできるよつになったわ」

安堵の溜め息をしながらはやては装着された腕輪を見る

「危うく危ない性癖に目覚めそうになってしまいそうになってしま
うところやった」

パチパチパチ

と其処に拍手が聞こえてきたので振り返ると

「・・・誰も居らん？」

「プツ」

小さく笑う声が聞こえ振り返ると其処には笑っていた紅那岐がいた

「お前の性癖ってすごいなw」

「うっさいわあああ！」スパーン

お約束の漫才が終わり、紅那岐は改めてはやてに言った

「どうやら始動キーを作れたみたいだな」

「始動キー？」

「ああ、さっき見たく魔法を撃つのに対して詠唱ではなくある語句に意味を載せて放つことが出来るのが今回の目標だったんだ」

「え？じゃあマルチタスク云々っていうのは？」

「アレはお前の全体に魔法の意味を根付かせる為の修行だな」

「なるほど〜」

「んじゃ、これより3日間の休養を申し付ける」

「わーったわ・・・これ外しくれへん？」

「え？目覚めたんならいいだろう」

「んなわけあるかあああああ！」スパーン

お約束をしながらもはやても休養に入ったのであった

Side End

〈ヴォルケンス修行 Side〉

「もつと鋭く、もつと強く……」

「ただ一点に、他の部分に持っていないように」

「がんばって二人とも！」

「援護する」

『どうやら次で決めるらしいな』

『ああ、なら我らはそれを見届けてやるっ』

2体の龍はそれだけ言うと唯其処にたたずむだけであった

「紫電……一閃！」

「ギガントシユラアアク！」

「縛れ鋼の軛……でいいいやあああ！」

そして爆発が起こり煙が晴れると……

「通ってないのか？」

「くそ……」

悪態をつく2人であったが

『いや通っておるぞ』

『ああ、よくやった』

そういうと2体はお互い傷ついた部分を示した……ぶっちゃけほんとにちよつとなので大きい体の為遠目から分からないだけであつた

パチパチパチ

と其処に拍手が聞こえ振り向くと

「赤羽！」「兄ちゃん！」「紅那岐君」「赤羽か」

『主』

と各々呼んだのを確認した紅那岐が近づくと

「まさか本当にこいつらに傷をつけられるとはなあ……ぶっちゃけこいつらの実力お前らの最低10倍以上はあるんだがな」

それだけ言うと紅那岐は結果を言った

「見ていたがシグナムもヴィータも攻撃の無駄が無くなっていたな」

「ああ、お前が言っていた技術と言っつのが分かった気がするよ」

「兄ちゃんそれよりあいつらの態度なんかならねーか？えらそう
でムカつくんだけど」

「そういうな、てか傷つけた程度じゃ認めてくれんよ最低限ダメー
ジを与えなきゃな」

「あの一紅那岐君はどうやってあの方達を？」

「物理的にぶん殴ってだが？」

何言っつてんの？的な態度で答える紅那岐に息を呑む一同

『我は拳で最終的に意識を絶たれたな』

『我は足だったはずだ』

それを聞いた一同は・・・

「「「この規格外が！」」「」」

「そんなに褒めるなよ」

とお約束をやりながら休養に入ったのであった

Side End

（リース修行 Side）

「えい」

「甘い！」

飛鳥の魔法に対し一拍遅れてだが相殺に成功するリースにそこに
パチパチパチ

「主！」

「兄様——！」

「飛鳥あああああ！」抱き

現れた紅那岐に走りながら抱きつく飛鳥を尻目に紅那岐はリースに
言葉を送る

「よくここまで成長したな」

「ありがとうございます」

「兄様、姉ちゃんすごいんだよ！私の魔法を相殺するんだから楽し
くって！今度本気出していい？」

「ダメ、お前の本気はあたり一面なくなるから」

「なっ！？アレで手加減なんですか？」

「こいつの魔力量は無限だからな、威力は上げようとすれば何処までもだ」

その言葉を聞いたリースはビックリしていた

「そうか、手加減されていたのか・・・」

「気を落とすな、本来こいつと打ち合えるだけでもありえないからな」

そうしてねぎらいながらリースにも休養を命じた紅那岐は自分も休む為に寝室に向かっていったのである

A E P 3 三人娘修行3（後書き）

レティ「やっべ、超長くなる」

トール「計画なしに書くからよ」

レティ「反省してる・・・次からは別々に書きます」

トール「私もある意味出たいからよろしくね」

レティ「感想ありがとうございました」

トール「では次回で〜」

A E P 4 三人娘修行 なのは編（前書き）

ここを出てくるカウント君の説明を

周辺魔力を吸い登録されている魔力弾の生成が可能である

また自身に搭載されている魔石からも魔力が漏れ足りない部分は其処から補えるのである

名前はなのは用に作った為カウント君であり実際は何でもできるのである

AEP 4 三人娘修行 なのは編

修行内容2 1日目

「さて、しっかりと休めたみたいだな」

「ひどいの！本当に電流が流れて動けなかったの！」

「お前本当にやろうとしたのか・・・」

なのはの台詞に思わず溜め息をついた紅那岐

「まあいいが、んで次の修行なんだけど」

「うん」

「お前さ、空間認識力・空間把握力って言葉は分かるか？」

「ふえ？」

「うん、期待してなかったから良いけど簡単に説明すると物体の位置・方向・姿勢・大きさ・形状・間隔など、物体が三次元空間に占めている状態や関係を、すばやく正確に把握、認識する能力のことだ」

「わからないの！てかひどいの！」

「要するにだな周りの状況を常に把握できる能力ってことかな？後ろを見て無くてもある程度の事が分かるとも言っ。」

「前に紅那岐君が私がデバイス構えてたのがわかったみたいに？」

「そうだ。イーグルアイとも言っな」

「それで修行に関係あるの？」

「これからそれを身につけてもらっんだ」

「ふええええ！？無理だよ！」

「無理でもやれ！大丈夫だそんな事いえない状況になるから」

「すつつつつごくムカつくの！」

「さてさて、始めるか」「ドン×？」

紅那岐は前と同じように無数の魔力弾を打ち出し放った

「前と同じなの」

「うんにゃ、次はお前に向かって飛んでくるぞ？」

「え・・・アレって私のバスター並に威力あるよね？」

「今回は威力減らしてお前のシューター程度にしたから」

申し訳なさそうにうつむく紅那岐だがなのは顔は絶望に彩られていた

「もし一斉に被弾したら・・・」

「撃墜するんじゃない？」

軽く言う紅那岐だが冗談じゃないと言う感じになのはは講義する

「簡単に言わないで欲しいの！アレをどうやって回避すれば」

「回避じゃない！打ち落とせ！」

「無理なの！」

「やれ！」

子供の喧嘩のようにやれ！無理！の繰り返しで時間を食ったのは言うまでもない

「とにかくガンバレ、カウント君がある程度お前にダメージが通った場合は止まるように設定してあるから」

「うう・・・人事だと思って」

涙目になりながら講義するのだが

「・・・俺なんて逃げ場すらないし、いつせいに襲い掛かってきたんだぞ」ボソツ

紅那岐が過去にあったことを呟いていたがなのはには聞こえていなかった

「ああ、それと最初は2個次が4個とだんだんと増えていくから早々被弾はしないと思うぞ?」

「それを先に言っただけだったの!」

紅那岐も忘れていたので言い返すことはせずスルーする方向で話を進めた

「まあ、ガンバレできるようになったら次のステップだ」

それだけ言つと紅那岐は転移してしまつたのだ

「うう・・・後で絶対O H A N A S H I I!するの」

このとき紅那岐は何故か悪寒がしたとかしないとか

《マスター・・・ファイト!》

「にゃ!? レイジングハート性格が」

《スイマセン。私も流石にここまで酷な修行と思わず壊れ気味です》

「それじゃあメンテに行かないとね!」

なのはは流石の修行内容に逃げ出せる口実を見つけ思わず楽しげに言つたのだが

《いえ、3日間の中にメンテは完璧です!》

「レイジングハートのばかあああああ!」

涙交じりのなのはの絶叫に耐えながらも修行は開始された

『ハジメルヨ！ハジメルヨ！』

気の抜けた声が聞こえたと思ったらカウント君が始める宣言をしていたのであった

《マスター！2時と8時方向から来ます！》

「ああもう！アクセルシューター・・・シューウツト！」

なのはは取り合えず防御も考え10個のシューターを出し最初の二つを迎撃した時に念話が来たのだ

『ああ、レイジングハートよなのははに教えるなよ？これはなのはの自力を上げるものだからな。お前がやるとするなら誘導弾の補助くらいまでだな』

と難易度を極端に上げる紅那岐・・・どっかで見てるかのように告げるのであった

《と云うわけなので私をあまり期待しないでくださいマスター》

「ふええええん」

7日目

「そこ！行って」

なのはは漸くある程度まで裁けるようになってきたが、それでも一度に20個の魔力弾が全く違う場所から来る時は流石に裁ききれずに被弾してしまい度々撃墜されてしまっていたのである

「づう・・・きついよお」

ボロボロになりながらも何とか裁いてはいたが、20個の壁がなかなか越えられないでいたのである

「事前に壊そうとすれば元に戻っちゃうしどうすればいいのぉ」

ダメージと精神疲労によりボロボロのなのは自分がどういった存在に修行を受けていたのかを痛感したのであった

「紅那岐君は絶対DSなの！」

《マスター！9歳の女の子がそんな事言うもんじゃありません！》

レイジングハートの必死の説得？によることで何とか言わないようになったがそれでもやはり精神的にくるものは来るのである

『なのはにヒント！ヒント！』

と今まで黙っていた？カウント君がヒントと言つ言葉を出した為になのはは一旦修行を中断し駆け寄つた

『再生する再生する』

それだけ言つとカウント君から録音された紅那岐の声が聞こえた

『さて、このヒントを聞いている時には俺はもうこの世にはいないだろっつ……』

「え？」

あまりの無いように一瞬なのはは思考が停止してしまい真っ白になる

『って事はないから安心しろ、お約束だ』

ガッン！

紅那岐のあまりの態度にムカついたなのは思わずカウント君を殴ったのだが・・・

「・・・っ」

あまりの硬さに自分の手を握りながらもだえていた

『冗談はこれくらいにしてヒントだがな、水面の中央にいるのを思い浮かべろ。そしてその周りの水面は今は風の状態・・・唯ひたすらに周りの水は静かに其処にたたずむだけだ』

そしてなのは目を閉じながら想像する、水面の中央に立つ自分を

『そして其処に何かが来れば波紋は広がる・・・俺が言えるのはここまでだ俺の感覚だからなお前が分かりやすいものがあればそれにしろ以上だ』

そうして録音されていたものは切れ後は残すのはなのは達である

「何となく意味は分かったけど出来るかな？」

《マスターならできます》

愛機の励ましの元なのは再び修行に打ち込んでいった

1ヶ月目

なのはに向かってくるのは50個以上の魔力弾だったが

「そこ！おねがいレイジングハート！」

《イエス、マスター》

なのはの合図にレイジングハートは答えなのはに襲い掛かるのが早い順に打ち落としていく

「次はもつと速くしなきゃ」

《来ます！》

「行って！シューウウツト！」

そしてなのは次々と来る魔力団を打ち落としていった

50個目になるとそれ以上は増えなかったがその代わりに速度が上がったりフェイントがかかるようになっていったのであった

「やば！？フェイントだったの」

《私が！》

なのはのミスも直ぐにレイジングハートは対応しお互いを助け合っておりこの修行も終わりを迎えた

「どうやら取得できたようだな」

そう言って現れた紅那岐

「何でボロボロなの？」

「聞かないでくれ」

短くそういうと紅那岐はなのはの死角であろう場所に魔力弾を飛ばすが

「シユートー！」

なのはは難なく撃墜するのであった

「どつやら、話しながらでも出来たようだな・・・合格だ！」

「やったああああ！」

なのははよほど嬉しかったのか両手を挙げピョンピョン跳ねながら喜んでいた

「おっし、今度も3日間休養だ」

「今回は素直に聞くの・・・流石にもう無理」

そう言ってなのはは意識を手放し倒れたのであった

「お疲れ様なのは」

そう言って優しく言う紅那岐

「レイジングハートもよくやったな、これで二人で力を合わせれば何処に敵がいようが気づけるだろう」

《一つよろしいでしょうか?》

「なんだい？」

《貴方はどれくらいできるんですか？》

「ついでだしやっとくか・・・録画しといて休んでいるのはに見せてやりな」

そう言ってなのはやっていた修行を紅那岐は同じようにこなしたのであった

後日見たなのは・・・

「もう逆らうのバカらしいの」

と言うほどの凄さだったとかなんとか

End

修行内容3 1日目

「さて、次の修行だが・・・お待ちかねの砲撃の修行だ」

「やっとなの！」

「ちょっと時間も押してきたしステップをある程度含んでやるぞ？」

そう言って説明を始めるがなのはの目はキラキラしていた

「まず砲撃の一番の弱点だがそれはタメだ、其処は理解しているな？」

コクリと頷くなのを見て再び説明を開始した

「んで、今回の修行はある程度バスターの連射を可能にしたの最大威力の増加が課題だ」

すると何処から現れたのか分からない機械が沢山現れた

「最初の修行はこいつらを打ち落とすという簡単な修行だ、ただしこいつらは一定時間其処にとどまると転移してしまうからな？」

因みに転移するまでの時間はなのはがカートリッジをロードしても少し足りないくらいともものすごい意地悪な仕組みである（ すぐか・アリシア製作 ）

「分かったの！」

「んで、そいつらが完全に打ち落とした後に出てくるボスのこいつを撃墜できるようになったらクリアだ」

まるでゲーム感覚に言う紅那岐

「因みに最後のこいつは動かないからSLB撃つても問題ないぞ？唯硬さが現状お前じゃ撃墜できないくらい硬くしたから」

「どれくらい？」

「・・・わかんね」

「ふえ！？」

「プレシアに製作任せたんだが、魔改造したと言うことしか知らないんだよ……しかも製作したのあわせて3機だけだから試してない」

それだけ言うと紅那岐は早々に立ち去ったのであった

「……がんばろっか」

《そうですね》

どこか疲れた顔をしたなのはは修行を開始して言ったのであった

「どのくらい早いか試してみよつと。デイベイイイン……バスタアアア！」

なのはの得意の第2の魔王砲が放たれるが、放たれた時には其処にターゲットはいなかった

「ええ？いなくなるの早くない!？」

《打ち出された瞬間に移動していました》

レイジングハートの報告と共になのはは難しさを知ったのであった

「つまり、今まで以上に速く打たないといけないって事だよね？」

《はい、恐らくですが威力を落としたり撃墜しきれないでしょう》

そう言ってレイジングハートの報告を聞いたなのはは修行に打ち込んだ

2 週間目

「デイベイイイン・・・バスタアア！」

なのはの掛け声と共にバスターは放たれターゲットは撃破できた、
ようやく最後のボスが現れたのであった

「行くよレイジングハート！」

《スターライトブレイカー》

「全力全開・・・スタアアライト・・・ブレイカアアアアア！」

なのはは今までの経験により最初から出し惜しみしてれば痛い目
にあうのが分かったので最初から全力全開で自身の最大魔法スター
ライトブレイカーを放ったのだが・・・

「ウソ!? 傷一つついてないよ」

《着弾した瞬間此方の魔力を拡散させたようです・・・壊すにはそ
れを超えるしかありません》

レイジングハートの解析結果を聞いたなのはは流石プレシアさん
しか思えなかったそうだ

「うう・・・今ので魔力切れちゃったよ」

《少し休憩しましょう、あの方も無理しすぎたら物理的に休めると
いってましたし》

その言葉を聞いてなのはも青い顔をし休むことに頷いた

「紅那岐君ならやりかねないの」

《と言うかあの方は必ずやりますね》

「だよ、そういえばどうしよつかあれ」

そう言っ指を指したのは先ほどの攻撃で傷ついていないターゲット

《そうですね、今のままでは恐らくカートリッジでも意味は無いと思います》

「そっか・・・チャージタイム伸ばしててみたらどうなる？」

そうしてなのは休みながらレイジングハートとターゲットをどう壊すかを決めていたのであった

1ヶ月目

「これで決めようレイジングハート！」

《イエス、マイマスター》

すると今までのなのはとは違いひどく落ち着いた様子で魔力を高めていった

「集え星の光よ・・・」

今までと違いなのは詠唱していた。レイジングハートと出した結論それは詠唱魔法とスターライトブレイカーの融合であった

元来なのは魔法には詠唱を必要とするものは存在はしなかったがレイジングハートが闇の書事件の時にはやてのデータを取っていたのである

その時に感じたのは詠唱中に魔力が高まりそれにより魔法も威力が上がったと言うものであった

「不屈の心は明日に向かい」

なのはは謳うように魔力を高める、一切の雑念を捨てただ自身の心を現すかのように

「星よ光よ打ち抜いて・・・」

そして今詠唱が終わり其処にはなのはの新しい魔法が完成した・・・その名は

「レイジングスタアアアアブレイカアアアツ！」

見た目は今までのスターライトブレイカーと同じだが、実際の威力はその3倍以上当然ターゲットは粉々に砕かれたのであった

「はあはあ・・・」

最大砲撃が終わり自分への反動により空から落ちてしまうのはだつたが・・・

「おつかれさん、まさか新魔法を作るとは思わなかったぞ？」

「えへへ・・・でも疲れちゃった」

「だろうな。今は軽く見積もってSS+の威力だ下手したらSSS行かかもな」

紅那岐の言葉に驚きを隠せない表情で聞いているなのは

「だけど、当分は使つなよ？やらせといてなんだが、体がもたんぞ」

その言葉を聞きながらなのは泥のように眠ったのであった

End

修行内容最終工程

アレから3日間休み今は元気いっぱいなのは最後の仕上げの修行の説明を受けていた

「最後の修行はひどく簡単だ」

「そうやって油断させるんじゃないの？」

「ひどいな・・・まあいい最後のは単純に模擬戦だ」

それを聞いたなのは今までの修行の鬼畜度から言って簡単すぎる内容に驚いていた

「ふえ？そんなのでいいの？」

「そうだぞ？」

なんともいえない安堵の溜め息をついたのはだったが

「相手を紹介する・・・恋」

「・・・来た」

「相手って恋ちゃんなの!？」

「……ん」コクリ

頷く恋を尻目に説明を続ける紅那岐

「ただし今回恋には手加減のしろと言っていないからな。因みに強さだがお前より全然強いぞ？」

「そうなの!？」

「ああ、しかもさすがが開発してくれた空中を普通に歩けるブーツを装備してるから空戦のアドバンテージもないしな。更にいや遠距離の不利を防ぐ為に俺の鬼菩薩を参考に作ったシールドを周りに浮かせてるから下手な遠距離防ぐぞ」

ブレイズザクのシールドを思い浮かべてください。それが肩の周りを浮かんでいる感じですよ

「……よろしく」

「よろしくなの……」

ものすごい不安顔で挨拶するのは

「んで、今回は別に目標はない。今から10日間模擬戦をして3日休んだ後俺と模擬戦だ」

それだけ言うと紅那岐はまた同じように転移していった

「……逝く」

「字が違うの！」

そうしてなのはは恋相手に模擬戦を続けた後紅那岐との戦いに向かうのであった

A E P 4 三人娘修行 なのは編（後書き）

レティ「やべ、魔改造しすぎたかも」

トール「これ実力絶対に天元突破するんじゃない？」

レティ「最初はS+程度にする予定だったのに書いている間に何故かこうなったし」

トール「どう見てもS+じゃないわよね？」

レティ「私の設定上ではSSSにします」

トール「無理がありそうな気がするわよ？」

レティ「いいのー！」

トール「てかこの時点での紅那岐の実力がありえなくなってるない？」

レティ「稽古つけといてよく言うよ」

トール「一応かなり強くはなったわよ？黄金王の真名開放の攻撃食らってもダメージちょっと受けるかな？程度だし」

レティ「それは強さとしてどうなんだろうな？黄金王自体チート相手には其処までじゃないんじゃないの？」

トール「武器的には最強よ？」

レティ「その談義はまたと言つことぞで・・・感想ありがとつじぢねい
ました！」

トール「次回はフェイト編よ」

A E P 5 三人娘修行 フェイト編(前書き)

ライナー君

あらゆるものを飛ばすことが出来る
ボール・ナイフ・魔力弾など

A E P 5 三人娘修行 フェイト編

修行内容2 1日目

「ゆっくり休めたようだな？」

「うん」

「はぁ・・・」

紅那岐が溜め息をついた事に疑問を感じたフェイトは素直に聞いた

「どうしたの？溜め息なんてついて」

「ああ、なのはもお前みたく素直に休んでくれたらなって・・・」

「なのはったら・・・」

その一言に納得してしまったフェイトは同じく溜め息をついた

「そんな事はさておき、お前の次の修行なんだがな」

「何やればいいの？」

「考えた末これにすることにした」

すると何処からか機械が現れた

「これは一体？」

「これはなライナー君って言ってプレシア・アリシアがお前のために作ったものだ」

「母さん・アリシア」

感動してるフェイトをよそに説明を続けた

「今度の修行はなこの機械から飛んでくるものを掴むか叩き落とすかだ」

「それなら簡単だね」

「ただし、速さの最大が光速より早くなるかなら」

その一言に感動が一気に吹っ飛び固まる

「しかも、数が最大で10個くらいになるってよ」

「母さん達はそんな物騒なもの作ったの!？」

「嬉々として作っていたらしいぞ?」

「母さん・姉さん・・・」

ドヨンとしてるフェイトを無視しつつ紅那岐はさらに説明を続ける

「この修行はな光速で移動するとき目標をしっかりと見るためのものだ」

「どっぴいっこと?」

「お前ソニックムーブ使ってる時に景色がぶれて見えてないか?」

「それは、速く動けばそうだよな?」

「だな、ただ高速戦闘においてはそれだと敵に確かなダメージを与えられなくて必然的に甘い攻撃になるんだ」

「いまいち容量を得ないフェイトに紅那岐は仕方ないと呟いて少し距離をとり念話で話しかける」

『今から其処からソニックムーブ使って俺に攻撃して来い、ただし俺も多少動くからな?』

「それだけ言つと紅那岐はあたりを動き出したのでフェイトも素直に従い言われたことをやった」

「ほい、そのままだ」

「それだけ言つと紅那岐はフェイトを攻撃した姿勢のまま止める」

「ほれ、攻撃する部分はずれてるだろ?」

「本当だ」

「今度の訓練でお前の目を強化するのが目標だ、ガンバレよ」

「そついうと紅那岐は転移していった」

「がんばろうバルディッシュ」
《イエス、サー》

そうしてフェイトの修行は始まった

7日目

「はあはあ・・・」

この修行は前のに比べて簡単だろうと思っていたフェイトだが、それは勘違いだったなぜなら・・・

「はあ！・・・また止まった！？きゃあ！」

飛んでくるものが途中で止まったり緩急を使われている為早さにあわせて攻撃しても意味が無かったりするのだ

「く・・・母さん達はなんて物作ってるんだろう」

製作者のプレシア達に愚痴をこぼしながらもフェイトは修行を続けるが、中々思うように修行は進まなかった

「それに、掴むのも出来ないよ」

そう、打ち落とすのは出来るのだがまだ掴むことが出来てなかったのである

『ヒント上ゲル！ヒント上ゲル！』

ライナー君から音声が発せられ飛びつくフェイト。そして再生が始

まった

『フェイトこれを聞いてるか？だったら教えてやるうその方法を』
息を呑み真剣に聞くフェイト

『さて、これの攻略方法だがな・・・知らね』ガツン！

その言葉を聞いたフェイトは思わず機械を叩きつけて手を抱えても
だえていた

「痛い・・・」

『冗談はここまでにして、ぶつちや俺は逆から始めたからヒント
になるか微妙だが・・・一回全部を掴む方でやってみ？しかも目の
前まで引き付けてな』

再生されたのは其処までで修行は再び行われた

「取り合えずやってみよう」

そうして再び修行が始まったのである

1ヶ月目

「次！」

フェイトは次々と飛んでくる物を左手で掴み、掴むのが難しいも
のはバルディッシュを使い落としていた

「お、出来たようだな」

「あ、ナギ」

紅那岐が現れフェイトは修行を中止し紅那岐に向かっていった

「おつかれ、どうやら最終まで出来たようだな？」

「うん・・・でももうやりたくないかな？」

「ははは、それはその時しだいだな」

笑いながら答える紅那岐にフェイトは溜め息をついた

「さてと・・・シッ」

するとフェイトに向かって光速のパンチを放つが・・・

「危ないよ・・・」

フェイトは難なく掴んでいたのであった

「合格だな」

「よかった」

「実はこの修行って目以外に鍛えてたんだよ」

「うそ！？なんなの？」

「それはな、最適な動きを一瞬で選択できるようにするのがそれに対応することだ」

つまりはだ、幾ら見えていても体がついていかなければ意味が無いと考えていた紅那岐は前回の修行からフェイトの動きを鍛えていたのである

「そうだったんだ・・・なんで言わなかったの？」

「言ったら涙目で無理って言うのが分かってたから」

「あう・・・」

紅那岐に一杯食わされたフェイトはなんとも言えなかった

「んじゃ、お疲れさん」

「うん、お疲れ様」

それだけ言うとフェイトも疲労のせいか倒れるように眠ってしまったのであった

《一つよろしいですか？》

「どしたんバルちゃん」

《その呼び名はお止めください》

あまりに不名誉な呼び名で話が脱線しかけたのを無理やり戻しながら紅那岐に聞いた

《貴方はどれくらいできるんですか？》

「そうだなやってみるか、ちょっと待ってな？設定設定っ」と

そして紅那岐がやったのを後日見たフェイトは

「人間？」

と疑問を持ったらしい

修行内容3 1日目

「さて、最後の修行だが今度は完全にお前のデバイスを使っての強化だ」

「がんばろうねバルディッシュ」

《イエス、サー》

「んで、修行内容はスマッシュャーの強化・ハーケンの強化・ザンバーの強化を一気に行くぞ」

「あれ？ザンバーは私に向いてないって」

「外すわけにも行かないから修行するぞ」

「分かった」

そうすると再び紅那岐はライナー君を取り出した

「また飛んでくる物を切るの？」

「機械は同じでも中身が違う、今回はターゲットを出してくれるだけだ」

詳しい説明を始める前に紅那岐は例だという^{ダ・カボ・セカンド}と再現する世界を使いバルディッシュを出すとザンバーで構える

「見ている、大剣の一例だ……」

するとライナー君からこれでもかと言う大きさ（5mくらい）の大きな岩が出てくると距離をとり構えた

「行くぞ……届け雲耀の速さまで、でいいいいやああ！」

すると紅那岐には似合わない叫びをしながら飛び上がり高速で接近し大剣を振るう

「チェストオオオオオツ！……我が斬艦刀に！断てぬ物無しっ！」

見事ターゲットを真つ二つにした。それを見たフェイトは紅那岐に質問した

「私もそんな風にやったほうがいいの？」

「うんにゃ、やりたかっただけ」

それを聞いたフェイトは思わずそこでこけてしまった

「なんでやったの!」

「いやあ、これ見るとときからいつかやりたいと・・・」

「意味はわからないけど、何となく分かった」

なにやら電波を受信しながらフェイトは納得をしてくれていた

「んで修行内容だがなぶつちやけ簡単だ、最初はスマツシャーかハーケンだターゲットに点かラインが入ってるからそれに沿って点ならスマツシャー、ラインならハーケンで切り落とせ」

「わかった」

「最後にザンバーだがどうしようか悩んだ末」

「悩んだ末？」

「威力の一点強化にしてみた、スマツシャーとかの修行が一定レベル超えるたらさっきの岩より大きいのが出てくるからそれをザンバーで斬れ」

「分かった」

「ただ、凄く硬い。どれだけ硬いかと言うとオリハルコン並に硬い」

「え？オリハルコンって伝説上決して砕けない鉱石だよな？」

「まあ、それだけ硬いってだけだ」

そう言って再び転移していったのでフェイトは修行を開始した

7日目

「思っていた以上にきついな・・・」

フェイトの最初の修行は出てくるターゲットを落とすのだが、そのターゲットは最初の段階こそ正面に出てきたのだが今では場所さえランダムになってしまっている

しかも一定時間攻撃が行われなければ爆発してしまい修行が振り出しに戻ってしまうのである

「ナギに追いつく為にもがんばらなきゃ」

そうしてフェイトは修行を開始していった

2週間目

出てくるターゲットを次々と壊して言っているフェイトはついに最終関門のターゲットが出てきたのである

「全力で行くよバルディッシュ」

《イエス、サー　ロードカートリッジ》

バルディッシュはカートリッジをロードするとザンバーフォームになり更にカートリッジをロードした

「雷光一閃プラズマザンバー・・・ブレイカアアア！」

現在のフェイトの持ちえる最大の攻撃のブレイカーを放つが・・・

ガキンツ

と弾かれてしまったのである

「いったあ……」

はじかれて手が痺れてしまったフェイトは一旦修行を中止してしま
った

《サーどうやら最後はリセットされずこれに専念できるようです
で一旦休みましょう》

バルディッシュの提案に頷き完全に休みに入るフェイト

「私も紅那岐みたいに一気に近づいて斬ればいいのかな？」

《恐らく不可能化と……サーとあの方はウエイトが違うので、そ
もそもあの方は貴方は基本的に手数で敵を倒すのが戦いだと言って
おられましたし、恐らく魔力を使い攻撃するのが最上かと》

「そっか……だったら」

愛機と相談を始めるフェイトだった

1ヶ月目

「一気に行くよバルディッシュ」

《イエス、サー》

そしてフェイトはバルディッシュに魔力を貯めていく

「はぁぁ・・・」

今まで以上に鋭くしかしどこか力強く力を貯めるフェイト

「轟雷・・・一閃！」

するとフェイトの周りには雷が轟きだした

「ザンレイグリーブ・・・」

雷がフェイトの大剣に落ちると剣の形が崩れ何処までも伸びだした

「ザンバアアアア！」

そしてフェイトは横薙ぎでターゲットを薙いだのであった

「はぁはぁ・・・」

そして全力で魔法を放った反動でフェイトも倒れそうだったが其処には紅那岐がおりフェイトを支えた

「凄いなフェイト、アレを実際に斬れるとは思ってなかったからな」

労いの言葉を聞いて嬉しそうに笑うフェイト

「お前もなのはもどうしようも無く成長するな」

そして、フェイトはその言葉を聞きながら眠ったのであった

（それにしても今のはどう見たって星薙の太刀だったな・・・雲耀の太刀使ったからかな？）

そんな事考えながらフェイトを休ませる為に寝室に運ぶ紅那岐であった

修行内容最終工程

そして、最後の修行と聞いていたフェイトは何をやるのかびくびくしながらも紅那岐が何を言うか待っていた

「さて、今までの修行の集大成の最後だが・・・」

「ゴクリ」

「簡単だ！模擬戦をやってもらおう」

それを聞いたフェイトは思わず頬を綻ばしてしまう

「っと対戦相手が来たぞ」

「やつほくお兄ちゃん」

「相手は七星？」

「そうだ、つっても七星は今魔法切れの心配が無いからかなり手ごわいぞ？しかもお前が苦手な遠距離を得意としてるし」

「でも、高速で近づけば・・・」

「速さもお前以上だけど？」

「ええ!？」

今度こそフェイトは修行の難しさを知ったのであった

「まあ、今回はルールは無いからガンバレ! そうだ七星
く(ー、)ホレ」

*

と七星に何かを渡す紅那岐

「っとこれは？」

「ルーネは危険すぎるからそれを使え、パルチザンランチャーが使えるアームドデバイスだ」

「ありがとうお兄ちゃん愛してる!」

「はいはい、それじゃガンバレよ」

そう言って転移していった紅那岐であったが

「さあって、殺ろうかフェイト」

「フフフ・・・そうだね殺ろうか七星」

「やば、何か地雷踏んだ私!？」

そうしてフェイトも模擬戦を終え3日間休んだ後紅那岐との模擬戦に向かうのであった

A E P 5 三人娘修行 フェイト編（後書き）

レティ「フェイト魔改造終了」

トール「速さの一点強化だったわね」

レティ「あの子は早さがとりえだしね」

トール「手数云々は？」

トール「それって模擬戦くらいしか出来ないし、まだライオット作ってないからあまり意味無いんだよね」

トール「すずかとかに頼めば良いんじゃないの？」

トール「紅那岐も基本的な流れ覚えてるけど、細かいところ忘れだし、たし何より紅那岐自身が原作沿いに近い進め方が望ましいと思うてるからね」

トール「そっか、あの子の今の能力はSSS - くらいかしら？」

レティ「そのくらいです！では感想ありがとうございました」

トール「次はタヌ・・・はやて編よー！」

レティ「タヌキって言おうとしたよこの神」

AEP 6 三人娘修行 はやて編

修行内容2 1日目

「始めるぞはやて」

「今日はタヌキ言わないんやね」

「言って欲しいのか？タヌキ」

「だからっていうなあぁ！」スパーン

もはやお約束となった漫才を行いながらはやての修行を説明しだす
紅那岐

「さてはやて、お前は自分のスタイルは分かったがポジションは分かるか？」

紅那岐の質問に対してはやては首をひねる、正直に言えば紅那岐の言わんとすることがよく分からずにいた

「まあ分からんかそうだな・・・もしなのは・フェイト・はやてがパーティーを組んでダンジョンにもぐるとしたらお前はどどういう役割だと思う？」

紅那岐の話聞きはやては自分が何をやるかを考え出した

「因みにダンジョンだから道は狭いぞ？」

「すると私の魔法は広範囲だから使えないってことやる？だったら私に出来るのは・・・指揮や！」

「正解。」

はやての出した答えに満足して頷いた後紅那岐は機械を出しはやてに修行の説明を شدした

「さて、お前のスタイルが大雑把な広範囲だから普段の戦闘だと下手したら使えない可能性がある・・・そこでお前がさっき言ったように指揮する能力が高ければお前自身の能力は上がると思ってなこんな修行を思いついた」

そして其処に出てきたのは魔力で作られた人型や獣型の物体だった

「詰め将棋は知っているな？それと同じようにこれはお前がリアルでやる詰め将棋でな、戦況を考え先を読み最善の手をする修行だ」

「なるほど、私がやるには十分やということやね？」

「そつだ、実際駒としてヴォルケنزをお前が使える設定になっている」

すると、其処にはヴォルケنزの面々と思わしき物体が現れた

「お前がする修行はな、こいつらに指示をだしなおかつお前が倒すべき敵を倒すというものだ」

リアル詰め将棋の説明を受けながら頷くはやて

「因みに最初の段階では時間設定は無いが、レベルが上がれば当然あるし上級に行けば敵が普通に攻撃してくるからな？」

それだけ言うと紅那岐は転移していった

「やったるで！」

気合を入れてはやても修行を開始した

7日目

今はやては中級の本当に中盤の問題で苦戦していた、しかも紅那岐が用意したこれは一回間違えたら二度と同じのは出ないという鬼畜仕様である

『ブー不正解です』

「またかいな！」

先ほどから頭を使い集中している様子が見て取れるが逆に周りが見えてないというのが第三者がいたら答えるだろう状況である

「ちよーここら辺になるとシャレにならん位難しいやないか！」

難しさにオーバーヒート気味の頭を振り気持ちを落ち着けようとした時機械から音声 flowed

『ヒントだよん！ヒントだよん』

なんとも気の抜けそうな言い方だが詰まっていたはやてはすぐさま

飛びついた

『えへはやてへ、この音声が流れる頃俺はきつとあの子に告白して
ると思うんだ!』

「それめっちゃアウトなフラグや!」ビシッ!

とベタなフラグ発言にはやてはツッコミを思わず機械に放ったが

「いったああああ」

機械なので当然硬いのだが思いつきり叩いたはやては手の甲をさす
りながらも続きを聞いた

『マジメな話お前一発クリア狙ってね?指揮するものとして当然正
確な解答が必要なのは当たり前だが、経験無いお前がどうして狙え
るんだ?ぶっちゃけドンドン間違えろそして経験詰め。そして周り
を見るよ?お前が動かすのは駒ではなく人だ、お前だけで戦うんじ
やないからな?』

そこで録音は終わったがはやての顔はすっかりしていた

「そか、いつの間にか私は周りをみてなかったんやね」

そして自分の頬をはたくと再び修行を開始した

1ヶ月目

「シグナムは右に展開!ヴィータは逆や、ザフィーラ正面の敵の攻
撃を防御でシヤマルはヴィータの援護や!後は私がまとめて!」

そしてはやては最後の問題に向かっていった

『正解・正解』

そしてソナナ音声が流れた後ははやては大きく息をついた

「はあああああ・・・」

「お疲れ、どうやら終わったようだな？」

「くーくん！」

現れた紅那岐に対しはやては行き成り魔法をぶち込んだ

「あぶねえな、行き成り何するんだよ」

「それくらいするわ！なんやねん上級行っと思ったたら失敗したら罰ゲームって」

「必要だろ？そうすればお前も必死こくし」

クスクスと笑いながら紅那岐はしれつと答えた

「むかつくわ！」

納得できないはやては紅那岐に食って掛かるがやがてへたり込んでしまった

「あれ私？」

「おつかれさん」

その言葉を聞いたとたんはやての意識は闇へと落ちたのである

修行内容3 1日目

「さて、次の修行だがな・・・」

今までのことを振り返りはやてはどきどきしていたのだが

「ぶっちゃけ考えつかなかった」

「ちょー！？それはないやろ！」

力の限りツツコミを入れるはやてに紅那岐は申し訳なさそうに答えた

「いやな、なのは達は前からスタイル分かっていたからある程度考
えていたんだがお前は最近なったばかりだろ？戦っても無いから
どうしようか悩んだんだよ」

「それなら私と模擬戦するんか？」

「いや、それは最後の日ってか俺も修行の合間に来ただけだし」

それを聞いたはやては直ぐに反応した

「ちよっ！？まだつようなるつもりなんか！」

「あ？俺はまだまだ弱いぞ？」

何言つてのと言つ感じで返す紅那岐にはやては何も言えなくなつてしまつた

「まあそれはおいといて考えた結果」

「うん」

「新魔法作れお前」

「へ？」

「だ・か・ら！新魔法作れ、ターゲットは前に作った幻想君を置いていくから好きな形を作れ、そこでそれをターゲットにしろ」

はやてに説明しながらいう紅那岐は修行と言つことである程度条件は出した

「ただし作る魔法は何でも良いが最低でも、火・水・金・木・土の魔法にそれについてラグナロクより威力高い奴作れ後は好きな作る」といい

「チヨイ待ち！火や水、土は分かるけど木や金ってなんやねん！」

誰もがツツコミを入れそうな事をはやてはツツコム

「ん、五行しらんのか？」

「それは知つとるが、ゲームやないんやで？どうやればいいんや！」

「ゲーム知ってるなら分かるんじゃないのか？まあいいか簡単に言えば木は風・金は雷の属性を持つと言われている」

「何でそっちで言わんねん！」

「俺としてはこっちの言い方が好きだからだ！ああそれと氷とかは普通に風と水の融合な？」

それだけ言い終わると紅那岐は轉移し消えていった

「もう、いいわ・・・」

どこか疲れた顔をしながらはやては修行を開始した

2週間目

「灰ほのしろ白しろき雪の王、銀の翼も以て、眼下の大地を白銀に染めよ。来こよ、氷結の息吹・・・アーテム・デス・アイセス！」

はやての魔法が発動し、当たり一面を白銀の世界へと染めたのである

「はあはあ・・・応用も何とかなったわ」

この2週間ではやては五行・そして応用魔法を習得した

「次は、ブレイカーを超える魔法か・・・」

はやての使うラグナロクは本来は着弾時の威力拡散による広域攻撃能力を持つているが、用途に応じて拡散を押さえた貫通破壊型砲撃とすることもできる（wikiより）のだが、はやて自身の資

質自体はやはり範囲殲滅型なので難しいのだ

「どないしょ・・・」

はやてのデバイスはあくまでストレージ、しかも管制人格は無いので一人で考えるしかなかったのだ

「ぐす・・・」

ついには泣き出したがここには一人だった

「う、うわあああああああ」

大声をあげ泣くはやて

「もう一人はいやや、一人は嫌なんやあつああ」

はやての叫びがあたりに木霊する、それに導かれたように一人の姿が現れた

「はやて様」

それは本来はやてを主と呼ぶもの、しかし今は紅那岐を主と仰ぐ銀髪姿の女性だった

「ぐす、りーす・・・」

「はやて様、私の修行は終わりましたので馳せ参じました」

どこか畏まった姿でりーすははやての前に傳く

「なんでリリースがくるんや？」

涙目ながらも一応は泣きやんだはやてはリリースに聞いた

「確かに私の主は紅那岐様ですが、はやて様も同じく私にとってはかけがえの無い存在、故に私は主紅那岐より主がいない時ははやて様を主とするようお願いさせていただきました」

其処まで説明を受けるとはやては今度はリリースに抱きつきながら泣いたのであった

（数分後）

「みつともない姿見せてゴメンな？」

「いえ、それより主は何を悩んでいたのですか？」

「実はな・・・」

そこではやては今行き詰まっていることを正直に話し、二人で相談したのであった

1ヶ月目

「鳴り響け、終焉を告げる笛よ、ラグナロクを起す災厄の笛」

終焉を告げる角笛それは神々の黄昏を告げたとされる笛の名それは

・
・

「今総てを飲み込み無へと帰せ・・・ギャラルホルン！」

そして放たれるは閃光に包まれる白き魔法だった

「はあはあ・・・できたでやっ」と

そういい近くにいるリースに向き直ると其処には何故かいちゃついているように見える（実際リースの膝に寝転んでいる・・・膝枕状態）紅那岐がいた

「今出来た最大級魔法で終わらせたろうか・・・」

「お待ちください！主が横になったのははやく様が此方を向く一瞬前です！」

必死に言い訳しているリースだが顔が満更じゃなかったが・・・

「からかうのはこの位にして出来たじゃないか、しかもギャラルホルンとはね・・・」

どこか自嘲気味に笑う紅那岐であるがはやくはそれどころじゃない

「ちょー、いい加減私からかうのやめてくれへんかな？私もそろそろ怒るわ」

「だが断る！」

「もういいわ・・・」

諦めた顔で溜め息を吐くはやくであった、そしてその後直ぐに倒れ

るように眠った

修行内容最終工程

「さて、最後の修行は今までの復習と思わせといて実は違う」

「なにやらせるきや」

「模擬戦させるだけなのになんでみんなこっぴど警戒するかねえ？」

「胸に手を当てて考えてえな」

「??？」

分かってない紅那岐にツツコミを入れる元気が無いはやて

「さて模擬戦の相手だが・・・」

「紅くん来たよ」

「おう、よろしくな」

「相手つてすずかちゃんか！」

「そうだぞ？因みにオールラウンダーだが殲滅戦とすれば俺より恐ろしいのを持つてるからな」

それを聞いたはやては驚いた

「ちょ！？くーくんより恐ろしいってなんや！」

「はやてちゃんも見たよね？私が闇の書の時に使った月光砲ルナ」

「ああ、アレかそれがどないしたんや？」

「うん、バージョンアップしていたらちよつと人には使えない位凶悪になっちゃった・・・」

「因みに最大出力で俺全力でなんとか耐えられたけど、正直アレはきつい」

「なんでやの？威力高いつてのは分かったけど」

質問するはやてに紅那岐とすずかはお互い顔を見合わせた後苦笑い気味に話した

「あれな、すずかの魔力を一切使わないんだよ・・・言っている意味分かるな？」

それを聞いたはやてはますます青い顔をした

「でだ、それを使うのはすずかの意思のまま簡単に使えるんだよ」

「ちょ！？それってロストロギアじゃ・・・」

「因みにすずか以外使えない・・・ってか使わせられないってのが正しいのかな？因みに作ろうと思っても無駄だぞ？すずかと解析したけど管理局どもに作れるだけの奴いないだろうし」

「ね、私も解析がんばってるけど分からない部分がちよつとある

し」

「お前、その年で・・・」

と話が脱線したのを気づいた紅那岐は無理やり戻した

「んでだ、すずかの模擬戦ではあまりに隙が多すぎる時のみ使うことを許してるからガンバレよ？」

「ちょーあたつたら死んでしまつやる！」

「忘れてたこれつけとけ」

そう言つて渡されたのは一つの腕輪だった

「これは？」

「それは魔力を拡散させてくれる腕輪だ・・・因みにチャージなしのルナの砲撃は耐えられるけどチャージ有りはわからんから」

それだけ言つと紅那岐は行つてしまった

「・・・はやてちゃんよろしくね？」

「手加減よろしゅう・・・」

そうしてはやては10日間死ぬ思い出修行に明け暮れその後休み最後の模擬戦へと向かった

A E P 6 三人娘修行 はやて編（後書き）

レティ「はやて編終了」

トール「お疲れ様。因みに氷の魔法は出たけど他のは？」

レティ「ぶつちゃけ出すか分かんない、因みに五行の属性については私なりの解釈なので違うってのもあるかもですが」

トール「何故作れと言ったか1時間くらい聞いただしいわね・・・
拷問付きで」

レティ「こえーよ！まあ使うとしたらその内ってことで」

トール「はいはい」

レティ「では感想ありがとうございます！」

トール「次はその他の皆さんと紅那岐よ」

A E P 7 三人娘修行 その他の方々編（前書き）

F a t e / Z E R O 始まりましたね

私はさっき2話見ましたがちっこいイリアを見て思わず悶えてしまいました

なにあのカワイイ子？膝に乗っけて愛でたい

A E P 7 三人娘修行 その他の方々編

（ヴォルケンズ修行）

ヴォルケンズの修行はとてもシンプルであった、紅那岐が召還した龍2体とひたすら戦い続けるということであった

『どうした剣の騎士よ先ほどから構えてるだけで』

『小さき騎士もだ、睨むだけなど子供でも出来るぞ？』

2体の龍が言い放つがヴォルケンズは動けるだけの体力が残っていなかった、はや1ヶ月過ぎた現在最初の頃よりも自身の技術が上がったのは分かってはいるが、逆に2体の龍の力も感じてしまっている

1週間で傷をつけるということが出来たので最初の頃は樂觀していたがそれがどれほど甘いものだったのかを痛感した。

なぜなら最初の頃は2体は全く動いてなかったからだ、その後は2体はゆっくり動いて戦いだした、その後は惨敗と言う結果だったのだ

2体は体が大きい為（10m以上）人の動きについていこうとするのは困難に思われるが実際はそんな事は無くシグルトバルムが翼をはためかせばそれは突風となりシグナム達を襲い吹き飛ばし、サヴァンティルが吼えるだけで縮みあがってしまうしだいである

「まさか、これほどの存在だったとは・・・」

「赤羽こやつ等を相手に勝ったというのか？」

「彼って一体……」

「兄ちゃんどうやって……」

各々紅那岐と龍達に対して思ってることを言っていた

『主も最初の頃我らと戦った頃は貴様らのようにボロボロになっていたが、その内……戦っている間と言ったほうが適切か、まあ戦っている間に成長し見事我らを倒したのだ』

『主の成長率はすさまじく早い……恐らく格上と戦えば戦うほどその実力の上がり方は高いだろう、貴様たちに主であるようには求めぬがこれは修行であろう？ならば恐れることなく掛ってくるがよい』

すると2体は力を再び解放し始めた

「ふ……そうだったな。これは修行だ恐れているだけが何が修行だ」

そう言っつて剣を構え目の前の龍、シグルトバオムに向かっていった

「私は盾の守護獣……主を、仲間を守ってみせる！」

ザフィーラは前線二人の防御役を司り、時には鋼の軛などを使い注意を逸らしていた

「たとえ援護だけでもやれることはあるわ！」

シャマルは結界魔法を応用しだし、局地結界を作ったり遠距離から

の回復を行っていた

「兄ちゃんが言っていたな、ハンマーは打ち砕くものだって……
だったら！」

ヴィータもまた再び己の槌を構えサヴァンティルに向かっていった

終了間際

『さあ、今お前達が撃てる最大の攻撃を放って見せよ！剣よ鉄槌よ
！』

『鋼と湖も己が役割を果たして見せよ！』

2体が言つとそれぞれ力を貯めていく、また2体もヴォルケンス
を認めたがため自身の最大の技を放つ準備をした

「黒龍……」

「白龍、轟撃！」

「我は鋼、何人足りとも傷はつけられん」

「癒して！心を！体を！」

『さあ行くぞ！』クロスファイア 黒炎十字弾！！』

シグルトバルムが放った黒炎は着弾点より十字にわかれあたり一面
をなぎ払う

『とくと見よ！』滅びの業火！！』

サヴァンテイルが放つ炎は名に違わぬ総てを滅びへと導くがごとくの灼熱である

それを迎え撃つは2人の技と2人の防御であつた

「・・・一閃！！」

「エグゼキューション・・・シユラアアアクツ！」

シグナムが放つ斬撃は一見唯の横薙ぎに見えるが、実際はそれは総てを断つが如く威力を持つ一撃であり、またシグナムは修行中ずつとシグルトバルムと戦っていた為かその炎はシグルトバルムと同じように黒炎であつた

ヴィータの放つ一撃も傍目にはギガントシユラークに見えるがしかしその威力はその3倍はあろうか威力である、修行中サヴァンテイルに散々力が分散していると言われていたがここに来てハンマーの打撃ポイントに力を集中することが出来たのである

2人と2体の技が炸裂し辺り一面には煙が立ち込めるが晴れると其処にはボロボロの姿のヴォルケンス（ザファイラ除く）と明らかにダメージを受けている2体の龍であつた

『ふ・・・見事であつたぞシグナム！シャマルよ！！』

『そなたらもだ、ヴィータ！ザファイラ！』

ついに2体は認め始めて名前を呼ばれてたヴォルケンスはキョトンとしていた

「何呆けてるんだお前ら？こいつらが認めてくれたのがそんなに以外か？」

今までいなかった声が聞こえ振り向くと其処には

「「赤羽！」」「紅那岐君！」」「兄ちゃん！」」「主！」」

修行の提案者紅那岐がいたのであった

「凄いなお前ら、こいつらにダメージ与えるなんて」

そう言つて2体を見て何か頷く紅那岐

「「ご褒美だ！良いものを見せてやる」

すると2体を召還した宝石を出す紅那岐、何をやるのかを静かに見守るヴォルケンスであった

「無双一神・・・コール！」

龍

「！！」

最初の言葉以外は聞き取れなかったが2体の龍が光り輝き当たり一面を照らし、ヴォルケンスはあまりの眩しさに目を閉じ、やがて光が収まり目を開くと其処には・・・

「な、何だこいつは！？」

「すげえ・・・」

「これが・・・」

「・・・」

あまりの事に理解が追いつかないヴォルケンズに紅那岐は変わる様子なく告げる

「誰にも言うなよ？こいつが俺の本当に契約したやつだ」

それだけ言つと紅那岐は召還したものを元に戻しそのままヴォルケンズに最終日まで休養を告げて後にした

End

↳リースの修行↳

「だから姉ちゃん違つて！こつ、どばーってやってがーん！って撃つつ！」

「だから、ここはこつであの部分はああすれば・・・」

感覚派の飛鳥の説明に対し理論派のリースが魔法を覚えていく姿が最近増えてきたのである。リースの能力は実は飛鳥の能力を劣化コピーしたものであり見ただけ覚えられるがそれだと威力が出ないためリースが理詰めで改良してるのであった

以下エンドレス

「流石だね姉様！これで終わりだよ？」

「そうか・・・では私ははやく様の元に行こうと思うがヒトリはど

「つする?」

「僕?ん、僕は兄ちゃんに貰ったゲームやってる」

「そうかではな」

そうしてリースははやての元へと向かったのであった

End

、紅那岐 修行、

「トール修行の前に話しがある」

「何かしら?」

紅那岐は話し始めた、闇の書に取り込まれとき自分の母に会ったことを、そしてその母から何かしらの力を貰ったことを

「そう・・・でもわからないわごめんなさいね?」

「いや、それなら構わないさなら殺るぞ!」

「調子に乗らないことね」

そうして紅那岐の修行が始まった

.....

「はあっ！」

「甘い甘い」

紅那岐が攻撃する攻撃をことごとく後出しにも関わらず相殺しているトール

トールの修行はぶっちゃけ模擬戦と言う名のガチバトルである、トール曰く「私魔法ってあまり好きじゃないの・・・ルーンは使うけどヤツパ肉弾戦よね」といって戦い方を教えるわけでなく只管戦うだけである

「桜花連脚！」

紅那岐が後ろ回し蹴りを放つも紙一重で交わしカウンターを入れようとするが

「まだまだ！櫻舞閃脚！」

回し蹴りの起動を途中から踵落としに変えて追撃するも

「甘いわよ」

「な！？」

本来なら無理な体勢だったはずなのにトールは踵落としを片手で掴んで止めていた

「発想は悪くないけどウエイトが足りない貴方じゃ私は聞かないわよ！桜花連脚！」

「ぐはっ」

そのまま足を離されると紅那岐と同じ技をその何倍の威力を持って放たれた

「ふう私はね能力面・・・貴方で言えば復元ダ・カーボする世界みたいなスキルね？そういった能力は低いのもそれを補っても足りないくらい肉体面は最強のつもりなのよ」

それだけ言つと紅那岐を見る、そこには立ち上がった姿の紅那岐がいた

「うれしいね、家族の中で最弱だった俺がお前のおかげで戦ってる間にも成長できる事が感じられるなんて」

トール話を聞いてたのか聞いてなかったのかは定かではないが紅那岐の目はギラついていた

「貴方は本当に凄いわねそれでこそよ！」

何を言つたか聞こえなかったが再び修行が再開されていった

.....

ところどころではのは達の修行の続きを教えに帰っていた紅那岐だが今全員が最後の修行（模擬戦前・・・修行内容3）入りがんばっている頃紅那岐はと言つと

「流石にやりすぎたわね・・・後は休みなさい貴方は十分強いから」

ポロポロになって倒れている紅那岐にそれだけ言っただけ言っただけ立ち去ろうとしたツールであったが

「まだ・・・まだだ・・・」

ポロポロの姿で起き上がる紅那岐、既にその体に力が残ってるとは思えないような姿だが目だけは死んでいなかった

「貴方の意気込みは買っけどその状態で修行を行ってもそれは力にならないわ」

きちんとした理由を言い終わらせようとする、普段はそれだけ言えれば大人しく従う紅那岐だが今回は何故か引かなかった

「未だだっと言ってるだろおおおおおっ!!」

紅那岐が咆哮する、すると紅那岐の周りに魔力の奔流が現れ紅那岐を包み込んでいく

「あの力は・・・まさか!?!」

紅那岐を見ると其処には黒い瞳が紅く輝いている姿があった

「うおおおおおツールハンマー総てを射抜く雷光!!」

紅那岐が総てを射抜く雷光ツールハンマーを放つとそのまま気絶してしまった

「お疲れ様、私」

そう言って入ってくるのは今まで修行していたはずのトールであった

「ええ、それにしても最後の一撃は凄かったわまさか唯の総てトールを射抜く雷光でここまでなるなんて」

そう言って話す二人のトールのうち紅那岐と修行していたほうは半身が吹っ飛んでいた、今の紅那岐の一撃で消し飛んだのである

「取り合えず、戻るわね」

「ええ、ご苦労様」

もう一度労いの言葉を送ると半身が無いトールは後から来たトールに取り込まれる形で消えたのである。今は分身体であり、トール本人だと今は未だ紅那岐と修行をやるうものなら瞬殺してしまいかねないので分身体にやらせているのであった

「これも因果かしらねこの子が持っているなんて・・・ねえ？速く強くなつて私を満たしてね」

どこか嬉しそうだが寂しそうな表情でそれだけ言うトールは紅那岐を別荘の部屋に転送させ寝かしたのであった

翌日起きた紅那岐は自分が最後何かしらをしたことは覚えていた
何があったのかは覚えていなかったのである

そして紅那岐もまたなのは達の修行の確認の模擬戦までは大人しく
休養を取ったのであった

End

くおまけく

「ふんふ、ふんふ、ふん」

楽しげに鼻歌を歌っているのはプレシアである、リンディなどとは違い正式な管理局員ではないプレシアは修行が始まる時を同じくして紅那岐に呼び出されていたのであった

「まさかこんな施設があるとは思わなかったわ」

プレシアがいるのは研究開発室である

「ママ、こんな感じでどう？」

其処に現れたのはフェイトそっくりの子でフェイトの姉たる存在のアリシア

「ん〜いいと思うわ、でもこんなのはどおかしら？」

そう言ってアリシアの持ってきたデータを改良してディスプレイに写す

「あ、いいかも！流石ママ！」

そう言って上機嫌に抱きつくアリシア

「いいのよ？親子なんだから当然じゃない」

そう言って鼻から愛を噴出しながら答えるプレシア、もちろんここにフェイトがいればこの程度ではすまないのだが現在は残念なが

ら修行中である

「それにしても紅那岐君も無茶な要求するわね」

そう言っつて一つのデータを見る其処には

「彼が管理局に入る時に使うデバイスを作れつて・・・確かに彼が持ってるの使うと下手しなくてもロストログアになってしまっわね」

そう、プレシアを呼んだ本当の目的は紅那岐が管理局入りした時使うデバイス作成の為であり怪しい機械を作る為ではなかった

「まあいいわ！こんな素敵な施設を貸して貰えるなら要望くらいこたえてあげるわ！」

「なっちゃんのためにがんばるよ私！」

そして親子は再び研究を進めるのであった

End

「七星達は何をしていたか？」

「はあああつ！」

「ええい！」

「・・・たあ！」

なのは達の模擬戦に呼ばれるまで3棘みの状態で模擬戦を行って

いた

各々苦手な部分の克服である、恋は近接は強いがその分遠距離・対魔力の向上に、すずかはルナと言う切り札を持つがその反面切り札が無い状態の時に対応できる為の訓練を、七星はなのはと同じように遠距離特化であるがタメの近接戦闘者の対応の訓練を行っていたのであった

A E P 7 三人娘修行 その他の方々編（後書き）

レティ「漸く修行編が終わる・・・）；、（チカレタヨ・・・」

ルーネ「ご苦労様です」

レティ「ツールは？」

ルーネ「流石に修行で疲れたそうですね、紅那岐さんの相手は分身体ですが作るのには疲れるそうですね、更に言えば修行中に溜まったツール様がやらなきゃいけない書類仕事してます」

レティ「遊んでるだけと思った」

ルーネ「言いつけますよ？」

レティ「そりゃ勘弁！」

ルーネ「でわゝ感想ありがとうございます」

レティ「次回は修行編ラスト！」

A E P 8 修行編最終話 模擬戦（前書き）

修行編がやっと終了・・・長かったよ）、）、（ママン…

フェイトの技名ちょっと変更
ブレイカー ザンバーに

A E P 8 修行編最終話 模擬戦

「全員揃ったようだな」

紅那岐があたりを見回すと修行した面々がいた

「それより何でリンディさん達がいるの？」

修行に関係ない人たち、リンディ・クロノ・ユーノ・アルフ・レティ（通信で特別に許可を貰ってる為見てるだけ）・エイミィ・マリー・プレシア・アリシア、見学組みに七星・すずか・恋・リースそして・・・アリサ

「それはな、俺達って管理局はいるだろ？ついでに魔導師ランクを見てもらおうとね」

「それよりアリサちゃんなんているの！？」

「ばれただろ？だから教えてやるって言ったんだ、魔法は決してフアンタジーじゃないって」

「で、でも幾らなんでも・・・」

「俺はきちんと聞いたぞ？覚悟はあるのかってな」

「やけど・・・」

「気にしなくて良いわよ、私が決めたんだから」

紅那岐達が話し合っていると其処にアリサが割り込んできた

「紅那岐に言われたわよ半端はダメだって、関わるなら覚悟を持って最後まで関われって」

「アリサちゃん・・・」

「其処までだ、アリサの覚悟にミズをさすなら俺は許さん」

それだけ言つと紅那岐は静かになのは達を威圧するが

「分かったよ、アリサが決めたなら私達は何も言わない」

「やね、何か困ったことがあつたらゆつてな？友達なんやから」

「そうだね、言わないとわからないこともあるから」

修行の成果か紅那岐の威圧にも怖気る様子無く話す3人娘

「さて、話は終わったな？最後にお前達に言うことがある」

そう言つて修行をしていた一同以外にも管理局含む全員に言うように言った

「これからお前達は色々な奴と出会うだろう、それは善人かもしれないしあるいは悪人かもしれない、仮に戦うことがあるなら相手の本質を見極める。唯がむしゃらに突っ込めば痛い目を見るのは自分だ、そして何より友人に迷惑をかけるというのも覚えておけ」

つまりとところ相手の力量を見極めたうえで戦えと言っているのである

「さて、始めようか」

それだけ言うと自分の愛機たちを構えるなのは達をみて紅那岐も己の愛刀輝紅を取り出して語りかける

「慢心することなく油断せず・・・いや、これは俺に言えることかなら言うことは一つだけだ、全力でかかって来い！」

紅那岐の一言で戦いは始まった

まずフェイト・シグナムの2人が高速で近づき紅那岐に斬りに掛るが紅那岐は輝紅を抜くと左手には銃をだし刀と銃で二人の斬撃を止めると

「デイベインシューター・・・シュウウト！」

「いけえ！ブリューナク！」

するとなのはとはやてが防御できない状態を確認した瞬間魔力弾を打ち込んだ、フェイト達は当たる瞬間離脱した
そして煙が晴れると其処には無傷の紅那岐がいた

「驚いたまさかここまで強くなっているとはね」

それだけ言うと、今度は此方の番と言わんばかりに攻勢に出た

「はあっ！」

刀を振ると其処には一つの斬撃が全員を襲おうとしたが

「ふん！」

一人の筋骨隆々しい男が割って入り煙があたりを覆うが晴れると無傷の男が現れた

「ザフィーラ、今の攻撃AAAはあったんだが何故に無傷？」

「修行していたら、傷がつかなくなった。衝撃は受けるが傷はつかん」

「アーマーかよ……」

なにやらザフィーラが特殊能力を手に入れていた……

「しょうがねえ……なら！」

紅那岐はそうすると刀をしまい双銃を構え問答無用で打ち出した

「任せて！」

「私も！」

するとなのははシューターでシャマルは結界防御を使い襲い掛かるものを防いでいた

「がら空きだぞ！」「食らえ！」「はあっ！」

魔力弾を撃っている為懐が開きシグナム達フロント組みが近づくが

「その程度の事分かってないと思ってるか？」

すると急に紅那岐の体がぶれ視認がしづらくなった

「ほらほら後ろがから空きだぞ！」

急に後ろに現れた紅那岐は双銃で魔力弾を連射するが、間一髪でそれは防がれた

「私は攻撃能力無いけどこういうこともできるわ」

シヤマルが転送魔法を使いシグナム達を一旦自分の場所へと召還し難を逃れた

「助かった」「ありがとうございます」「サンキュー」

「それにしても今のは」

距離が開いたので誰かが聞いた

「今のは俺の移動術で閃舞だ。言っとくがデバイスや機器で見たらそこにいるからな？」

言い終わると同時に紅那岐は再び乱射しだす

「無駄なの！行って」

なのはは修行の再現といわんばかりにシューターで打ち落としていく

「ちいっ！させといてなんだが厄介だな」

舌打ちしながらも手を止めずとにかく撃ちまくる紅那岐にこのとき誰も意図を知らずにいた

「みんなどきい！闇に沈め！ディアボリック・エミッション！」

すると紅那岐を包むようにはやての範囲攻撃が行われ回避不可能なほどの大威力攻撃が行われ、更に炸裂した瞬間紅那岐の状態を確認せず怒涛攻撃が行われる

「翔ける、隼！」

「ギガント・シユラアアアク！」

「エクセリオオオン・バスタアアア！」

「縛れ、鋼の軛、でいいいやああああ！」

「撃ちぬけ雷刃！」

5人の攻撃が追加攻撃として撃たれ煙は更に舞い上がった

「これなら、ダメージは」

「油断はしちゃだめだよ」

「せや、これで倒せたら苦労せんわ」

そう言ってるとき巨大な光が見えたと同時に全員は散開すると其処には一条の光が通り過ぎた

「はずしたか」

煙から現れたのは先ほどとは違い髪を金色に染め、その眼は翡翠に輝く紅那岐の姿であった

「やるな、まさかはやての攻撃の後間髪入れずに追撃をするとは。前のお前達なら間違いなく油断して食らっていたのにな」

そういうと紅那岐は何も持っておらず唯腕を前に突き出す形で喋りかけていた

トルハンマー 総てを射抜く雷光、紅那岐が得意とする魔法である、その威力は現在なのはスターライトブレイカーと同等であるが速さは高速の速さで駆け抜けるものである

「殲滅には殲滅だ」

そういうと紅那岐は手を上に上げた、他のみんなも上を見ると其処には黒と白の弾丸があった

「これくらい防げよ？ 正邪必滅の流星群！」
シュトルム・クロイツ

紅那岐が名を発した瞬間無数の弾丸はなのは達に襲い掛かる
各々打ち落したり、はじいたり、避けたりしている中避けている
面々はあせりだした

「なっ！？ 追ってくる」

驚いている中に紅那岐が説明を شدした

「俺のスキルが一つ、福音の弾丸ヴァイス・シユバルツって言って音を認識しターゲットを何処までも追っていく、紙一重で避けても無駄だ」

それだけ言うと紅那岐は一瞬でフェイトまで近づくと殴り飛ばす

「きゃあ！」

「フェイトちゃん！？こんのー！」

フェイトが吹き飛ばされなのはバスターを放つが

「頭に血を上らせて照準がずれてるぞ？」

一瞬の隙を逃さず紅那岐は今度はなのはに近づき攻撃しようとするが

「2度も同じ手をさせるか」「食らえ！」

シグナム・ヴィータが攻撃をしてきたのを

「なに！？」「ウソだろ！？」

紅那岐はそれぞれ白羽取りとボールを掴む感覚で二人の攻撃を受け止めた

「着眼点は良いが、攻撃が荒かったぞ？」

すると両腕がふさがっている為か足に魔力をためて

「フェンリスヴォルフ神討つ蹴狼の蒼槍！」

足を振るうと同時に二人を飲み込むくらいの攻撃を放った

「ぐは!」「がっ」

二人が吹き飛ばされたのを確認せずに今度は後衛の要のシャマルに襲い掛かるが

ガキン!

金属にぶつかったような音が聞こえてみるとザフィーラが体を張って守っていた

「盾の守護獣、守る対象は何人足りとも攻撃させん」

それだけ言うつとよると崩れ落ちる、アーマーがあるのが無防備に食らった状態で衝撃は和らげられなかった為にモロにダメージを食らった

「今度は守る奴はいないぞ?」

「私らを忘れんといてな!」

すると後ろから殺気を感じ振り返ると其処には大威力砲撃の準備を完了させていたはやてとなのはの姿があった

「響け終焉の笛!」

「全力全開!スターライト」

紅那岐は迎撃の為自身に使っていた雷光のエネルギー総てを右腕

に集めた、シヤマルはこの時既に転移し危機を脱していた

「ラグナロク！」

「ブレイカアアア！」

「トルハンマー総てを射抜く雷光！」

そしてラグナロクとスターライトブレイカーVSトルハンマー総てを射抜く雷光は拮抗しやがて途中で大爆発を起した
それを見ていた一同は

「なんて規格外な！」

「凄いわね」

「アレを相殺できるのか！」

など紅那岐の異常性とそれとは別に

「なのはちゃん達強くなったね」

「だね、前だつたら何も出来ずに倒されるのに」

「・・・強い」

「これが魔法・・・」

などなのは達を賞賛する声とアリサはこの世界の魔法を見て驚いていた

「はあはあ・・・なんちゆう奴やねん」

「我らはある奴と戦っていたのか」

「あの龍達よりすげーぞ」

「強いね、あの強さにあこがれたんだ」

などダメージを負った一同もシャルマルに回復して貰い紅那岐を見る

「さて、俺はまだ大丈夫だがお前らは限界だろう？撃つて来いお前らが今持ちえる最強を！」

それを聞いた一同は一瞬驚いた顔をしたが事実だった為お互いの顔を見て頷きあった後距離をとり最後の技を放つ準備を開始した

「集え星の光よ、不屈の心は明日へ向かい、星よ光よ打ち抜いて・・・全力全開！」

なのはの周りに特大の魔力が集まりだした

「轟雷・・・一閃！」

フェイトの構えると轟音が鳴り響きフェイトに落ちるとザンバーは眩い光とともに刀身を伸ばした

「鳴り響け、終焉を告げる笛よ、ラグナロクを起す災厄の笛、今総てを飲み込み無へと帰せ！」

何処からともなく聞こえる笛の音が鳴り響きはやては相手を見据える

「気高き黒龍王よ、一瞬でもいい私に力を・・・」

シグナムが構えると刀身に黒き炎が纏われた

「あたしの一撃は全てを砕く！白龍、爆碎！」

ヴィータがギガントフォルムのアイゼンを構えるとハンマーの部分に白き光がともる

「俺も相応に答えよう・・・解放レィギャルンされし九つの世界、4thキー解放！」

紅那岐が呟くと莫大な魔力が当たり一面が覆われ、攻撃しようとしていたものを止めたが

「ひるむな！貴様らはこの程度なのか！」

紅那岐に言われ我に返ったなのは達は再び最後の攻撃を放った

「レイジングスタアアアブレイカアアア！」

「ザンレイクリーブ・・・ザンバアアア！」

「ギャラルホルン！」

「黒龍・・・一閃！！！」

「エグゼキューション・・・シユラアアアクツ！」

5人の全力を超えた全力の攻撃が紅那岐に直撃した、流石のなのは達の紅那岐の反撃に警戒はしているが既に満身創痕のため警戒しているだけで何も出来ずにいた

煙が晴れると其処には服をボロボロにした紅那岐がいた

「見事だ！お前達は確かに今俺にダメージを与えた！」

それを聞いた一同は驚いた、あの紅那岐にダメージを与えたことを。特になのはとフェイトはだ

なのはとフェイトは最初に戦った頃に比べデバイスも強化され強くなつた事を実感していたが、紅那岐はそれ以上であった。最初に戦った頃に比べ紅那岐の強さは異常とも取れるくらい変わりなのは達の仲間のガンダムを余裕を持って相手にしていたからだ

「ご褒美だ、お前達に俺が持っている最強のうちの一つを見せてやる。避ける受けるは自由だ」

すると紅那岐は右腕を前に突き出し左で支え力をためだす、なのは達は避けてもいいと言われたが紅那岐が受けた為自分たちも協力し防御を選択していた

「フ・・・受けるかならば得と味わえ！全てをまとめたこの一撃を！」

紅那岐の前に極大な魔力が集まり溜まりだした、そして放たれるは極光の一撃その名も

「『オーバーロード・偉大なる穢れなき極光レヴァテインの世界！！！！』」

それは紅那岐の魔導砲の中でも最強の一つ、レトヴァティン 迷い無き光闇の剣でもなく一多重式屈折次元収束魔導砲でも無く全てを光へとかえる一撃なのは達は今できる最大の防御を張るが、極光の前に飲み込まれていった

「ふう・・・」

紅那岐が一息つく頃には霧が晴れ其処にはボロボロ姿なのは達が倒れていた

「終わりだ・・・よくやったなみんな」

そう言つて最後の戦いは終わり全員眠つたのであつた

後日行われた、すずか・七星・恋・リース達による模擬戦も同じように驚愕されたことをここに記録した

魔導師ランク測定結果

高町なのは

ポジション：センターガード

魔力量：SSSS+

戦闘技能：SSS

魔導師ランク：SSS+

フェイト・テストロッサ

ポジション：ウイングガード
魔力量：SSS
戦闘技能：SSS+
魔導師ランク：SSS+

八神はやて

ポジション：センターガード
魔力量：SSS+
戦闘技能：SSS+
魔導師ランク：SSS+
レアスキル：蒐集行使

シグナム

ポジション：フロントアタッカー
魔力量：SS+
戦闘技能：SSS
魔導師ランク：SSS-

ヴィータ

ポジション：フロントアタッカー
魔力量：SS
戦闘技能：SSS+
魔導師ランク：SSS+

ザフィーラ

魔力量：S

戦闘技能：SS

リアスキル：鋼軀執行ハイパーアイマー《あらゆる攻撃を受けても体に傷は付かないが衝撃や斬られたた感触などは無効に出来ない》

シヤマル

魔力量：AAA+

戦闘技能：AAA

魔導師ランク：AAA+

シヤマルは戦闘時の戦力としては回復などに特化し局の衛生兵の10人以上の能力を発揮

赤羽七星

ポジション：センターガード

魔力量：自身の魔力量はS 紅那岐の供給により最大でSSS+

戦闘技能：SSS+

魔導師ランク：SSS+

月村すずか

ポジション：オールラウンダー（フロントアタッカー並びにウイングガードが主）

魔力量：SSS

戦闘技能：SSS+

魔導師ランク：SSS+

呂奉恋

ポジション：フロントアタッカー

魔力量：SS

戦闘技能：測定不可

魔導師ランク：SSS+

リース（リインフォース）

ポジション：センターガード・フルバック・ウイングガード

魔力量：自身はAAA+ 紅那岐による供給でSSまで上がる

戦闘技能：SS

魔導師ランク：SS

レアスキル：理論行使（蒐集行使と似て異なるもので、見た魔法を自身の理論に置き換えて使用可能）

赤羽紅那岐

ポジション：全種（主はフロントアタッカーだが前面でセンターガ

ードの役割なども担うことも可能）

魔力量：測定不可

戦闘技能：測定不可

魔導師ランク：EX（存在しない為便宜上追加）

A E P 8 修行編最終話 模擬戦（後書き）

レティ「おわったー！」

トール「お疲れ、つかアレは使わないの？あの子アレ使ったかなきゃ持つてる意味無いわよ？」

レティ「次回以降使わせようと思う」

トール「そう、それにしてもみんな強いわね」

レティ「そりゃ、そうでしょwあの修行に耐えてこのくらいじゃないとえ？つてなるよ」

トール「そう、それにしても紅那岐は4th使ってあんなものなのね」

レティ「ん〜、4thは紅那岐の半分の実力だけどその全力は使つてないって感じかな？」

トール「そう・・・んじゃ私はあの子の修行に行つて来るわ、どうやらあの子の力解放されかけてるってあの子自身が言っていたから」

レティ「よろしく〜、では感想ありがとうございました！」

ルーネ「次回はマテリアル戦です」

A E P 9 マテリアル戦 前編(前書き)

時系列?気にしちゃいけないよ?

A E P 9 マテリアル戦 前編

今日は大晦日、紅那岐は家になのはやフェイト一家、はやてを招いていた

「よつと」

紅那岐は何をやっているかと言つと

「もう直ぐできるからなー、はやてつゆは？」

「安心しい！出汁からとつてばうちりや！」

年越しそばの準備をしていたが、其処に凶報が

『すまない、実は魔力反n・・・』ブチ

其処になにやら通信ウィンドが開いたようだが一瞬で斬り捨てる面々

『お前なんで行き成り消すんだ！』

「うるせえ！いいか？まだ俺達は管理局じゃないんだ、しかも今は大晦日で俺はそばを打つのに忙しいんだ！後にしろ」

『君はそばと事件どっちが大事なんだ！』

「そば！」×その場の全員

紅那岐の料理の腕を知っている面々+噂を聞いた人はそばを食べ

るほうが重要と取ったなぜなら・・・

「そばは任せろ！俺の好物であり、打つのも得意だ！粉から集めるか・・・」

と紅那岐が得意げに言ったので紅那岐と一緒に暮らしてる面々はもちろんの事他の人たちも期待して待っていたのであった

「お前管理局だろ？動員して何とかならんのかよ」

『いや、実はSランク近いのが3つ、SSSが1つ、それ以上が1つあるんだ、だから局の人員で対処が難しいんだ頼む』

通信ウインドの前で頭を下げるクロノに対し

「頼み方ちがくね？」

『おねがいします、協力していただけませんか？』

「最初から偉そうに頼まないでそうやって頼みな、俺は自分が偉いって思ってる奴が嫌いなんだよ。局に入ればそれ相応の対応をするけど、今は未だ違うんだよ。だから頼み方は・・・もういいや、めんどくせ」

それだけ言うと紅那岐は支度しだすと全員同じように支度しだした

- - - 移動したんだよ? - - -

「で、やって来たは良いけど其処まで強い魔力反のは無いぞ?」

紅那岐は機器異常の魔力探知能力を持つてるので現場へ来たは魔力探知には引つかかかっていなかった

「あいつがウソをつくとは思えんしなあ?」

あたりを見回すが気配はついてきた三人娘×2（紅那岐側の七星・すずか・恋になのは・フェイト・はやて）にリースだけであった

「うっん帰るか?」

そう言つて後ろを向くと紅那岐は信じられないものを見た

「なのは、いつの間に髪を切ったんだ?それになんか理知的だし」

え?と言葉とともに後ろを向いた七星達

「え?フェイトいつの間に髪染めたの?それにアホっぽいし」

「逆にはやてちゃんはいつの間にユニゾンを?それに尊大な態度っぽいけど?」

「・・・イメチェン？」

其処にはいつものバリアジャケットとは異なる三人娘がいた

「いや、確かに似合うけどさ態度とか色々込みで・・・ってかそっちのほうがいいんじゃない？」

紅那岐が感想を言うと突如として声が響く

「にゃ！？私はこつちだよ！と言うか酷いの！」

「そ、そうだよ！それに私をアホっぽくしたって似合わないよ！」

「せや！それになんか納得してるのが気になるわ！」

旧三人娘の声が聞こえたので振り向くと其処には旧三人娘がいたのである

「あれ？じゃあこいつらは？」

紅那岐が疑問に思い首をかしげていると

「私は【理】を司るマテリアルシュテル・ザ・デストラクター星光の殲滅者と申します」

スカート両端を持ちお嬢様が自己紹介する様子のようにし

「僕はね【力】を司るマテリアルレウイ・ザ・スラッシャー雷刃の襲撃者っていうんだよろしくね！」

普段のフェイトとは逆の感じ（アリシアっぽい）で挨拶をし

「我は【王】を司るマテリアル閻統べる王と言つ、覚えるのを許可しよう！」
ロード・ディアーチェ

名前に恥じぬ態度で挨拶をする

「うん、やっぱりこっちのほうが様になってね？」

「うん」×旧三人娘以外

「」「」「ひどいの！（よ！（わ！）」「」

なにやら漫才風になって来た時にリースが参加する

「主、どうやらこいつらは閻の書の残滓で出来ているようです」

リースの言葉に驚く一同だったが

「ふーん」

紅那岐にいたっては気にしてなかった

「お前らの目的は？」

軽い感じで聞く紅那岐に答えたのはシュテル・ザ・デストラクター星光の殲滅者と名乗った黒なのはだった

「我らの目的は一つ、閻の書の復活のみ。我らはそのために作り出されました」

「やっぱ、なのはより落ち着きあるし話してることもしつかりしてるな・・・色的にもあってるし」

なにやら余計なことを言い出した紅那岐に問答無用でレイジングハートを構えたなのは

「オーケー、取り合えずおふざけやめるから下ろせ、俺でも流石に今のお前に攻撃されると何かと痛い」

なのはを落ち着けた後紅那岐はマテリアルっ娘に語りかける

「とりあえずだ、闇の書の復活無理だけど？」

「其処にいるのは管制人格です、それに我らの力を加えれば」

「うん、取り込まれていららないの捨てられてお仕舞い。俺の紅天の書は一種のロストログイアクラスだからお前らごときの力が加わっても無駄の一言で終わるが？」

そう言って紅那岐は結論を説明する、紅天の書に関していえば違うが説明が面倒の一言になり言わなかった

「んで、どうする？お前ら時間ねーべ？」

紅那岐はマテリアルっ娘の状態に気づき問いかけると

「ではせめて最後はオリジナルと」

そう言ってそれぞれ似たような武器を構えた

「うんいいよ、私なんだよね？戦おう」

「私もいいよ」

「私もや！」

なのは達が答えたので紅那岐達は下がる

Side End

なのはVSシュテル・ザ・デストラクター星光の殲滅者 Side

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン行きます！」

「シュテル・ザ・デストラクター星光の殲滅者とルシフェリオン参ります」

お互い再び自身と愛機を名乗るとお互い駆け出した

「パイロシューター、シュート！」

同じようなデバイスに同じような魔法を打ち出した

「無駄なの！シューウウツト！」

10発ほどはなったシュテル・ザ・デストラクター星光の殲滅者に対しなのはは1発だけを打ち出し全て打ち落としたのだ

「そんな！？」

驚きを隠せないめんといのでいれ星光に対しなのはは言った

「ちょっと前までなら苦戦したけど、今は違つの!」

「っ!?!それなら!」

そついうと星光はなのはのエクセリオンモードと同じ状態にルシフ
エリオンを移行した

「アレは!・・・つてなら私も!」

なのはは一瞬何かを見つけ恍惚とした表情をしたが直ぐに振り向
き負けじと同じようにエクセリオンモードに移行する

「ディザスターヒート!」

星光からエクセリオンバスター級の砲撃が3連射されたが

「エクセリオンバスター・ミーティア!」

なのはも負けじと同じように3連射し相殺する

「オリジナルがここまでとは・・・なら!」

星光は杖を構え詠唱をします

「集え、明星」

なのはは次が最後になることを察し同じように詠唱を開始した

「集え星の光よ」

そして二人は同じように最後の時を迎えるために謳った

「全てを焼き消す焰となれ！」

「不屈の心は明日に向かい、星よ光よ打ち抜いて！」

「ルシフェリオン・ブレイカー！」

「レイジングスター・ブレイカー！」

同時に放たれた収束砲は中間で一瞬で均衡した後なのはRSBに打ち抜かれ星光は光へと消えていった

「きっと私もおなじだったんだよね」

なのはの寂しそうな呟きは空に飲まれていった

Side End

フェイトVSレヴィ・ザ・スラッシャー雷刃の襲撃者 Side

「負けないからね！」

「うん私も」

そうして駆け出すが、既にこの時点で優劣は決まっていた

「たあっ！」

雷刃が勢いよくデバイスのバルニフィカスを振るうがフェイトは紙一重で避け追撃する

「はぁ！」

「え！？きゃぁ！」

吹き飛ばされ驚いてる間に既にフェイトは雷刃に接近し攻撃をしていく

「ふっ！」

一息で一気に決めようとしたが雷刃の姿が一瞬で消えた

「あ、あぶないな！もう本気だからね！」

すると雷刃はフェイトのソニックフォームと同じ格好になり更にザンバーと同じ状態だった

「なら私も！」

フェイトも負け時にソニックになり、更にザンバーを起動した時

「！！！？？」

何か猛獣にロックオンされた気分になりあたりを伺うが何も無かった

「ねえ今……」

「うん、でも……」

二人は何も無かったように再び駆け出したが、条件が同じである異常雷刃に勝機は無かった

「くっそー！これでどうだあぁ！」

そうしてバルニフィカスを肩に担ぐように構える。最後の攻撃であろうことはフェイトも感じ同じように構える

「碎け散れ！」

「轟雷・一闪！」

そしてあたりに雷が木霊し二人に落ちる

「雷神滅殺！きよっこーざん！」

「ザンレイクリーブ・ザンバー！」

雷神が上から斬りかかるのに対しフェイトは下から振り上げる形で斬りにかかる

結果は分かるようにフェイトのザンレイが雷刃の攻撃を切り裂きそのまま消し去ったのである

「貴女の元気少し貰っていくね」

そうしてフェイトは顔を挙げみなの下へ向かったのである

Side End

はやてVS闇統べる王 Side

ロード・ディアーチェ

「むかつくわ！とつと消ええ！」

「黙れ！王に背くとは愚民が！」

ここは水と油の如く決して交わらない二人が喧嘩のごとき魔法を打ち合っていた

「沈みい！ミストルティン！」

「ちい！ならドウムプリンガー！」

そしてはやてが魔法を放てば王が相殺するといつ見ていればワンサイドゲームに見えなくも無い展開が其処にはあった

「塵芥の分際で王に逆らうな！」

「うっさい黙り！私は絶対にそんな性格やない！」

完全に子供の喧嘩状態なのだが撃っている魔法はどれも大きく巻き込まれれば一発KOもありえるのであるが

「こつなったらこれで終わりだ！」

一瞬で距離をとると魔力を貯めだす王

「私だって負けへん！」

はやても負けじと魔力を貯めた

「絶望にあがけ塵芥」

「総てを無へと歸せ」

「散れッ！エクスカリバーッ！！」

「ギャラルホルン！」

そして打ち出される極大魔法にあたり一面は碎け散りそして

「終わりや！」

「・・・ここまでか」

そうして闇の王は消え新たな夜天の王が残ったのであった

「あんたは認めたくないけど、誰にも揺るがせ無い信念だけは見習おうと思つわ」

静かに呟きはやてもまたみんなの下へ歸って行った

A E P 9 マテリアル戦 前編（後書き）

レティ「うん、マテ戦思った以上に長くなったしなのは達の態度が微妙に癪にさわる」

トール「なおしなさいな」

レティ「だが断る！」

トール「あっそ、てか何故に前編？」

レティ「書いたっしょ？SSSS以上がいるって」

トール「そういえばそうね」

レティ「では感想ありがとうございます」

トール「次回でね」

レティ「次回に久々あいつ登場！」

「さて、後は2人か？しかしいないな」

なのは達が戻ってきたので最初の報告に合った残り2人を探しているが見つかる気配が無い

「このまま帰っちゃダメだよな？」

めんどくさいから帰りたい意思表示をしたが

「ダメ！」×紅那岐以外

とやはりダメだしを食らい仕方なしにそこらへんを見てみると声が聞こえてきた

「おーっほっほっほ」

どこかのバカっぽいお嬢様のごとくの笑い声が聞こえたのでそちらを向いてみると

「おーっほっほっほ 漸く気づきましたわね」

うん、金髪ドリルじゃないけど何故か白っぽい銀の長髪女がいて笑っていた

「・・・誰？」

「あら？分かってるんじゃないですかオリジナル」

なんか言われたので周りを見たが全員首を振るんで自分に指を向けて俺？ってやると

「当然ですわ！ここまでの力を其処の小娘が持つてるわけありませんわ！」

って言ってるんだが、お前今全員を敵に回したぞ・・・てか俺と同じくらいの身長で小娘呼ばわりはどうかと思うぞ？

「あー取り合えずリース」

「は、はいなんでしょうか主」

きよっどってんなよ、俺のほうがりたいわ

「俺って蒐集受ける前にあいつらボコったよな？」

「はい、主は蒐集されていませんね」

「何故に俺のマテリアルがいる？そして何故女なんだ？」

疑問に思ってるのを素直にぶつけるとマテリアルが教えてくれた

「私が特別に教えてあげますわ！確かに貴方は蒐集を受けてませんが闇の書に取り込まれたとき貴方の力の一部を解析しそして私が生み出されましたよ」

親切に教えてくれたのは構わないが、取り込まれたぐらいであんなくらいになるか？少なくとものは以上なんだが

「取り合えず名前教えてくれ、そして消えてくんね？」

「なんですかその言い方は気に入りませんわ！しかし名前は教えて差し上げますわ私は・・・」

なんかタメに入ってるんだが、めんどくせえ・・・てかマテリアルって可能性つばい感じがしたんだが違うんか？

「私は【全】を司るマテリアル、名を終焉の抹消者ディマイズ・イレイザーと言いますわお見知りおきを」

スカートの両端を持ちお嬢様然として挨拶してくる

「あー紅那岐だ、知ってるだろうがな」

お互い挨拶をしているとマテリアルが話しかけてきた

「さて、私も時間がありませんわ。貴方に勝負を挑まさせていただきますわ」ビシッ！

効果音が聞こえてきそうなくらいに指を指してきた

「ええ〜」

「何でそこで不満そうな声を上げますの！貴方が戦闘狂バトルマニアってことは聞いていますわ！」

誰だそんな事を言ったやつは！俺は決してシグナムみたいな戦闘狂バトルマニアじゃない！

「七星変わってくんね？」

「だが断る！」

「すず「紅くん？なにかな？」なんでもないです、んじゃ恋」・・・
「寝てるし」

周りに味方がいないよ、やりたくないよこんな奴とてか認めたくない

「良いからやりますわよ！」タイビュランス疾風迅雷！！」

「え！？」×紅那岐以外

わーお、流石俺のマテリアル俺の技使えるんだ

「何を驚いてますの？私がこれを使えるのも其処にいるオリジナルヴァイス・シユバルツを読み取った結果ですわ！まあ、せいぜいこれと後は福音の弾丸くらいしか読み取れませんでした」

更にわーお、厄介な能力ないよこいつ

「紅那岐君がんばって」「ナギ、ファイトだよ」「くーくん、きばつてな？」

三人娘の応援が軽くイラつときたがやらなきゃダメなんだよね

「しゃーない、ほら掛って来い」

そうやって手で挑発すると掛ってきた

「行きますわ！はっ！」

「っつ」

喋り方はバカみたいだが実力は本物だな

「はいはいはいいいいー！」

「よっ、はっ、てあー」

連続攻撃を避けてるんだが相手が不満な声を漏らしてきた

「貴方マジメにやる気ありますか？先ほどから・・・それに私が疾風迅雷使っても貴方は使いませんし」
疾風迅雷

「やる気無いのにどうやって？てか俺は既に疾風迅雷使っても使わなくても速度は変わらなくなったからな、使う必要なくなったし」

アレを使うときは単純に身体能力上げるだけだしな、後は放電を応用して俺自身が対応できない速度で来た相手への対処くらいか？
殺気と音とアレでかなりの予測が立つようになったしな

「なっ！？あなた何処までチートになれば気が済むのですか」

「つつても全部修行による結果だし、何より疾風迅雷使う利点は単純に総てを射抜く雷光を使うときに腕に負担かからないってだけだし」
トルハンマー

相手も丁寧に説明してくれてんで俺もしてるんだが様子かな

「気に入りませんわ!」ノットウング「九つの世界!!」

「おいおいおい!お前それ使えんのかよ!」

聞いてねーぞ、アレ使われちゃ俺でも最低でもダメージだ

「切り札は取っておくものですわ!さあ行きますわよ」

「ちっ!」タービュランス「疾風迅雷・九つの世界!!」

俺は平気だが後ろの連中が食らったら最悪死ぬ、相殺するっきゃねえ。

そして俺達が打ち出す瞬間、何かの光が走った

Side End

三人称 Side

紅那岐達が戦いを行っているころなのは達は観戦していたのだが

「あれ?弱いのかな?」

なのはが首をかしげながら呟く、傍から見ればそれは紅那岐が凄く余裕があるように見えるからだ

「・・・違っ」

さっきまで寝ていた筈の恋が声を上げる

「え？でもナギかなり余裕そうだよ？」

フェイトもまたなのはと同じ意見なのか疑問に思い尋ねる

「ん〜、お兄ちゃんが前に言ったこともう忘れちゃったの？」

七星がヒントの如く答えを教える前に3人に尋ねる

「えっと、相手の力量を測れやっただかな？」

はやてが一番はまりそうな答えを言った

「そうだよ、もしもなのはちゃん達が戦ったらあれ避けれる？私は恐らくガードが限界・・・倒す方法はあるけどね」

すずかが答えを言うとなのは達は再び戦いを見て置き換えてシユミレーションをしてみると

「勝てないの・・・」「私の最速と同じだ」「私も一発でのされてしまっ」

と結論にいたったのである

「あと今のはお兄ちゃんに聞かれてなくてよかったね、聞かれてたら怒っていたよ？相手を嘗める行為をしていいのは相手がどうしようもない人だけって決めてるから」

説明を受けていた三人娘は軽く息を飲む、確かに紅那岐は戦いにネタを持つてくるが戦い方自体はマジメなのである

「あれは!？」

さすがが何かに気づいてそれを見ると前の戦いで闇の書のプログラムを消し去った紅那岐の必殺技の一つが見えた

「ちよっ!？あいつあんなの使えるの!？」

七星が驚いていると同じように紅那岐が構えていた

「・・・相殺するつもりだ」

恋が言うように紅那岐も同じように準備を始めていた、そしてお互いが打ち出す姿勢になった

「「総てを超越せ・・・」」

二人が打ち出す瞬間光が走り二人はそれに飲み込まれた

「え?」xそのばの全員

その場にいるものは一瞬何が起きたのかが分からなく止まってしまったが恋がいち早く元に戻り光の出所を見つけた

「・・・あそこ」

指を指す方向を見れば其処には剣をまるで銃のように構えた姿の装甲をつけた男がいた

「セツナ!？」「セツナ君!」

なのはとフェイトがその装甲の男のなを呼ぶとそいつは可笑しそうに笑う

「ふ、はあーはっはっは！どれだけ強かろうと無防備な状態でこれだけの攻撃うけりゃどんな奴でもひとたまりもねえだろ！」

倫理観など無視し笑い続ける男に対し

「セツナ今の殺傷設定だよな！なんでそんな事を」

「フェイトお前は何を言ってるんだ？敵を前にしてなんでそんな事言う・・・あきつと操られてるんだな、ちよつと待っている？直ぐに其処にいる奴ら皆殺しにしてキラの敵も討ってやるから」

どこか狂ってる言い方をしながらセツナは再び準備をしていたが

「！！？」ゾクッ

その場にいる全員が凍った、それは殺気である今までこれほどの殺気を受けたことも無いものは息をすることすら許されないほどの殺気である

「辞世の句はそれでお終いか？」

煙がはれると其処には血を流しながら鋭く睨む紅那岐がいた

「ゲホツゴホツ、な、何故ですの？あなたは私の協力者のはずなのに・・・」

マテリアルは既に消えかかっていた、そしてマテリアルの言葉を

聞いた紅那岐は更に殺気が溢れ出した

「なるほど、味方の命を餌に俺を殺そうと？」

静かに、本当に静かに紅那岐は言う。

「だからどうした！マテリアルなんて所詮はプログラム、それがどうなるうと知ったこっちゃねえ！」

セツナは再び突っかかるが

「そうか、それが辞世の句か・・・アイ・スペース発動」

紅那岐・セツナ・マテリアルを包み込むように結界が展開される、外にいるものは中の様子が見えない代わりに殺気の恐怖が無くなり漸く緊張から解かれた

「い、今のは！？」

「ナギは！？」

「それにマテリアルも！」

三人娘が今起こったことを確認すると七星から説明を受けた

「恐らくお兄ちゃんはみんなに負担をかけないよう隔絶結界で勝負をつけるんだと思う、だから待つてよ？」

そうしてその場にいる全員は結界があるほうを見るのであった

.....

「な、なんだここは!？」

「ここは転生者同士が戦う為の結果、お前に逃げ場は無い」

紅那岐はそういうとマテリアルの方へ向かう

「1分だ、1分だけまてるか？消える前に少しだけ話をしたい」

「か、構いませんわ貴方が最期に何を言うか興味がありますから」

マテリアルの言葉を聞いた紅那岐はセツナへと向かうその手には黒い外殻の剣を持ち

「て、テメエも転生者か!だったらいいキラを何処にやった!」

「誰かは知らんが誰も覚えてないのならそれは既にこの世界にはいない・・・お前ももう気づいてるはずだろ」

目を瞑ってその場に佇む紅那岐に押されながらもセツナは罵声を飛ばす

「ふざけるな!なんだって言うんだお前は!」

「俺は、誰だろうな?ただいえることは一つ」

そこで紅那岐は目を開け言い放つ

「誰よりもこのゲームの内容を把握してるってだけだ」

そう言っただけで紅那岐の瞳をみて驚くセツナ

「な、なんだよそれ！それにその目は」

今紅那岐の瞳を見るならば赤かった。味方が見ればそれはとても綺麗と言ってくれるだろう、しかし敵が見ればそれは鬼や悪魔・否、鬼や悪魔すら逃げ出すその瞳である

「何を言ってるか知らんがお前は俺の前で唯一つの間違えを起した」

紅那岐が持つ剣がひび割れていきながらも紅那岐は続きを言う

「お前は仲間の命を囮に攻撃をした、それがお前の死ぬ理由だ」

紅那岐は戦いにおいて罾や闇討ち、1対多果ては毒ですら戦いにおいて許容するそれらは全て気をつければ良いだけだからだ、ただし仲間の命を囮にすることだけは許さない。これは紅那岐自身が昔より命を奪ってきた故の拘りである。

ゆえに紅那岐は仲間と連携して戦うことよりも一人で戦う理由が自身の攻撃に巻き込まれてしまう可能性がある故にだ

「さあ終わらせるぞ」

そして紅那岐が持つ剣が砕けたように見えたがその中からは黄金に輝く一本の剣が現れたのである

「な、何だそれは！」

相変わらず混乱しているセツナが聞いてきたので紅那岐は答える

「これは魔剣にして聖剣、かつてスウアフルラーメが携えた剣」

そして構える紅那岐

「そしてこの名は・・・」

剣が輝きを増しセツナはあせりながらも自分も攻撃しなきゃと思い攻撃をした

「う、うわああああトランザム！」

そしてセツナから先ほどと同じように全てを飲み込まれるような攻撃を放った

「『ティルヴィング黄金色の約束!!』」

紅那岐は一瞬の間にその聖剣の真名を解放し剣を振ったその結果は

「終わったな」

何も無かった・・・否、ティルヴィング黄金色の約束による攻撃によりその存在ごと斬られたのである
そして結界が砕けた

.....

結界の中から出てきた紅那岐になのは達の認識はマテリアルとの

戦いでの勝利である

アイ・スペースによる戦いでは中で倒され消えたものはもともと存在せず、記録にも残らないものである。ただしその存在を知る物はその限りではない

「さて、マテリアル先ほどの約束だが」

そう言って倒れているマテリアルに近づく紅那岐

「ええ、私の最期になにを言ってくれるのかしら？」

紅那岐の戦いを見て満足していたマテリアルは紅那岐に聞く

「なに、お前を助けるのは無理だがお前の存在を消すのは惜しくなつてな。お前の力を吸収したくてな」

「出来るわけありませんわ」

どこか自嘲気味に笑うマテリアルに対し紅那岐は

「なに、元は俺の力の一部だろう？ならできさ」

そうして手を伸ばす紅那岐にマテリアルは迷うことなく手を重ねる

「じゃあな、本当はきちんと決着をつけたかったが」

「さよなら私、そんな態度は最初から見せて欲しかったですわ」

光になって消えていくマテリアルは紅那岐にかぶさるように消えていった

「終わったぞ……ってどうしたお前ら？」

紅那岐がことが終わり振り向くとなのは達は固まっていた

「紅那岐君だよね？」

「当たり前だろ？何言ってるんだ」

分からず紅那岐になのは達は微妙な表情をしている

「えっとナギこれ」

そう言つてフェイトが鏡を渡すと其処には

「……誰？」

黒い髪が長くのび、鋭かった目つきは若干垂れている姿が映っていた

「なんだか女の子っぽいね」

すずかの一言に紅那岐は慌てて自身の股を叩いて確認する

「マジか！？……無い！」

「そんな確認すなああ！」スパーン！

紅那岐の確認の仕方がアレなのですかさずツッコミを入れたはやて

「え、ええ！？お兄ちゃんがお姉ちゃん！？」

あたりが混乱する中七星が一番混乱していた

「くっそ、復元する世界使っても戻れねえ……」

その場に手を着きor zポーズで固まる紅那岐に

「これで一緒にお風呂は入れるね」

「……うん」

場にそぐわない声が若干聞こえていた、その後時間も時間だったので帰ったのであった

翌日起きた紅那岐は

「直ったぁー！ーっ！」

と喜ぶのであった、更に確認してみたところ女体化が自由に出来る能力を手に入れた

「うん、変身魔法使えなかったから丁度いいや」

となにやら得した気分であったとか

A E P 1 0 マテリアル戦 後編（後書き）

レティ「マテ戦終了！紅那岐の女体化！」

トール「あの子も難儀な」

レティ「まあ、いいじゃんw後は紅那岐の最後の武器を漸く出せたので説明を」

黄金色の約束：かつてオーディンの血縁者のスウアフルラーメが作ティルウインゲらさせた狙った敵を決して逃さず斬れないものは無いといわれる剣である

それを振るえば全てを切り裂き勝利をもたらすといことで聖剣としての能力を持つが3度振るえばその身に破滅をもたらすと言うことで聖剣でもあり魔剣である

また、剣自身に意思があるように思われ主と認めなければその切れ味が也を潜め外郭による鞘を纏い能力は発揮できない

能力は距離や大きさ、概念を全て無視し狙ったものを斬り伏せるものである

トール「扱いは宝具って感じかしらね」

レティ「だね、真名解放しなきゃ使えないし」

トール「因みにあの子があの状態ならマイナス要素はでないわ」

レティ「まあ紅那岐が使う魔法自体宝具みたいなもんだしね」

トール「読者に説明すると紅那岐の使う魔法は本来あるであろう宝

具を擬似的に魔法に応用してるわけよ」

レティ「レーヴァテイン迷い無き光闇の剣は災厄の杖って呼ばれるように世界を破壊させるもの故にアレを本気で打てば世界とは行かないまでも町消し飛ばせる威力はでるよ」

トール「トールハンマー総てを射抜く雷光なんて私が持つ雷槌然りだしね」

レティ「というわけです、では感想ありがとうございます」

トール「次回は日常編よ」

A E P 1 1 〽海だ！水着だ！罰ゲーム〽（前書き）

因みに独自設定が入っています

色々な騒動があつたが無事管理局した俺達だが実際はまだ小学生、ぶつちやけ其処まで忙しくは無いんだが何故かなのはが異常に働いてる気がする。

んで、それを危惧したフェイトやはやてはなのはの息抜きにと遊びに行くことを誘つた

「どつかええ遊ぶ場所ないかな？」

と俺に聞いてきたがぶつちやけ俺はこの町にきてまだ2年ちよいしたつて無いから正直分からん

「と言うわけでバーニングスお前の家つて別荘もつてない？」

「あんた聞く態度間違つてるって気づいてるわよね？去年の大晦日に説教垂れた奴が言うことじゃないでしょ！」

燃える拳をひらひら交わしながらからかつて疲れたのを待つと

「はぁ・・・はぁ・・・まあ良いわ、別荘なら南の島にあるからみんなで行きましょう」

流石金持ちつてか？マジで別荘持っていたそれも南の島とは

----- 移動中 -----

「着いたあああつ！海だあああつ！」

取り合えず叫んでおくお約束は必要だね

・・・すまん、若干テンション上がって変な風になった

「さてと、女性人が来る前に設置は終わらせようぜ？」

そう言っつて男性人、土郎さん・恭也さん・ユ一ノ・クロノに声をかけ設置し終わる頃には女性人がぼつぼつと現れた

「お待たせ、紅くん」

最初に現れたのはさすがであり水着は紫を基調としたワンピースタイプにパレオをつけていた

「どっ・・・かな？」

うっすらと頬を染めて聞いてくるすずかに対し俺は

「似合ってるよ」

そう言っつて褒めていると今度は恋が来た

「・・・来た」

恋には珍しく白のビキニ下はパンツタイプの水着でやってきた、肌とのギャップでこれはこれで・・・

「似合ってるぞ恋」

と褒めると頭のアホ毛をピコピコと動かして嬉しそうにしていた

「お兄ちゃん私の水着でいちころだよ！」

「その言い方古くないか？」

ツツコミを入れながら振り向くと其処には胸に「ななせ」と書いた旧スクを着た七星がいた

「七星よく分かっているな！お約束は大事だ」

「でしょー！」

無い胸を張って誇らしげの七星だが

「だが俺には旧スク属性は無い！以上！」

「なん・・・だと・・・」

その場でorzで鬱っている七星を放っておくと

「あ、主・・・ど、どうでしょうか？／／／」

顔赤く染め、水着もまた顔と同じで赤いビキニを着たりースがやってきた

「お前は黒を選ぶと思ったが似合ってるな」

「あ、ありがとうございます／／／」

テレながらも嬉しそうなリースである。

「後、4年もしたら私だって」

「そ、そうだよ！私達はまだ成長するもんね！

「・・・？」

リースの胸を恨みがましそうな視線で見つめるすすかと七星・・・
七星よ前にも言ったがそれはフラグだぞ

「兄ちゃん！早く海に入ろうよ！」

アスカは運動が得意じゃないから今日は珍しくヒトリが出ている
が無邪気がかわいいなっておいフェイト！遠くでハアハア言うな！
危なすぎるぞ！

紆余曲折ありながらもその他の皆さんも似合っていたよ？

「ちよつと待て！」xその他の皆さん

「なんだよ、褒めただろ？」

「なんで、はしよるの！？」

「時間。以上！」

メタっぽい発言は許してくれ
そして、海と来ればすいか割りにカキ氷、美味しくないはずなのに
美味しい焼きそば

「なんか凄く偏ってない？」

「気にするな」

ある程度やった後はチームごとのビーチバレーになった

「チーム分けは完全にランダムです！」

「私達は、見てるわね」

参加しなかったのは桃子さん・プレシア・リンディのおり「ヒュンッ！」お姉さまがた！

「恭也同じチームになれるといいね？」

「あら、恭也は私と同じになりますからフィアッセさんはあまり者でござぞ？」

フフフと黒いオーラを出しながら笑いあう二人に俺達は距離を取らざるえなかった

「恭也お前はいつの間にかそんなたらしに……」

「恭ちゃん……」

士郎さんと美由紀さんが嘆いてるな

「つか、完全にくじだろ？同じに……いやあるかもな」

「紅那岐ぶっそうなことを言っていないで助ける！」

「ギャグ補正に挑めと？断る！」

またメタっぽい発言を許してくれ、んでチーム分けはこうなった

Aチーム：なのは・ユイノ

Bチーム：フェイト・アリシア

Cチーム：クロノ・はやて

Dチーム：美由紀・忍

Eチーム：ファイアツセ・すずか

Fチーム：恋・七星

Gチーム：アリサ・恭也

Hチーム：紅那岐・士郎

他の皆さんは見学となった

「ちょっと待て！」×AとGチーム

「なんだよ？」

「明らかにHチームはオーバースペックだよ！」

「くじで決まったんだから文句言っな！」

いや、マジで俺もオーバースペックだとは思っただが、くじなら仕方ないだろ？

「文句なら作者に言え！」

因みにマジで乱数使ってこうなりましたw BY作者

「よろしくね紅那岐君」

「よろしくお願いします土郎さん」

文句を言う奴らを見無視し試合が始まった

Side End

三人称 Side

第一試合：A V S B

「なのはごめんね？勝負だから手加減は出来ないよ」

そうしてフェイトは鋭いサーブを打つが

「させないよ！」

流石は補佐なら1位2位を争うユーノが拾いあげるが

「へび」

流石の運動音痴、顔面で受けると言うギャグをやったのけた

「なのは・・・」

「さすがなのはちゃんだね」

相手チームの同情の視線を最後まで受けながらAチームは最後までポイントを取れず敗北した

第二試合：C V S D

Cチームのはやてだが未だに足が不自由であるので特別にセットアップし足の補佐のみの魔法のみ許された

「いくでクロノ君！」

「ああ！」

「なんで恭也と同じじゃないのよ・・・」

「まあまあ忍さん楽しみましようよ」

やる気十分のことは裏腹にDは忍のテンションが駄々下がりであった

「イクで！」ポス

はやてがかっこよくサーブを放とうとしたが此方も見事にからぶったのである

「あ、あれー？お、おかしいな」

冷や汗を流しながら言い訳をするはやて、実際今までは足が不自由だった為スポーツにとことん縁がなくなのはとは違った意味での運動音痴であった

「なにやってんだか」

結局美由紀と忍の運動神経抜群Dチームが難なく勝利した

第三試合：E V S F

始まった第三試合だったがここで予想外の事が起きた

「「「うっ！」「」「」

始まったのは良いが其処にいる一人の女性がある意味災厄を振りまいていた、その名はフィアッセである

何故彼女が災厄かと言うと

「恭也？」

「クロノ君？」

「土郎さん？」

「ユーノ君サイテーなの」

さて、このくだりで分かった方は多いだろうが説明しよう、彼女フィアッセの最大の武器それは・・・胸である。彼女に似合う白いビキニでビーチバレーをやっているものなのでその武器が遺憾なく発揮され縦横無尽に揺れるのである

それを見た男性陣は当然その胸に釘付けとなってしまうておりあるものは前かがみに、あるものは鼻から赤い液体を出していたのである

「・・・」

因みに紅那岐はと言うと賢者モードに入り何とか事なきを得てい

たが未だ背に凄いプレッシャーを受けている為下手な反応は出来ないのである

「・・・ふっ！」

恋が強烈なスパイクを放つもファイアッセの真正面だった為レシーブをするが

「うそ!？」

その胸に着けていた薄い布地・・・要は水着がはだけてしまう

「見るなああああ!」×女性陣

「ぐはあああつ!」×男性陣

一斉に攻撃を食らい吹っ飛ぶ男性陣をよそに試合はファイアッセが胸を両手で隠したためにFチームの勝利で終わった

第四試合：G VS H

「さつきはよくも俺に集中攻撃をしてくれたな？」

「恭也、大人気ないが八つ当たりさせてもらっぞ?」

「ちょ、ちょっと待ってくれ!俺だって被害受けたのに」

「し、知らないわよそんなこと!アンタが悪いんでしょ!」

そうして始まった試合はハンデ（Hチームは最初から相手に5ポ

イントある状態（9ポイントで勝ち）があるにも関わらず圧勝で幕を閉じた

第五試合：B V S D

この試合はある意味で順当に勝ち上がってきたためいい勝負に見えたが実際は年長者の美由紀・忍には届かずDチームの勝利で終わった

「ちよつとはしよりすぎじゃない!？」

「作者が途中でダレたらしい」

第六試合：F V S H

この試合もまた紅那岐・士郎対恋という形で試合が成り立ち、最終的に力尽きた恋が対応できずHチームの勝利で終わった

因みに七星はトスを何とか上げるので一杯一杯で恋に負担をかけるだけであつた

「ひどいよ!」

「ひどくない!恋にどれだけ負担かけてんだお前は!」

最終決戦：D V S H

ある意味順当に勝ち上がったモノ同士の戦いは熾烈を極めた、美由紀も幼い頃より御神の技を継ぐべき鍛錬を行っている為一般人とは一線を期した動きを見せ忍もまた夜の一族の恩恵か一般人を遙に上回る動きを見せていた

しかし、だがしかし相手は御神の現継承者の士郎とチートな存在の紅那岐である。美由紀・忍がどれだけ一般人と離れた存在でも、公式チートと転生チートの二人には遠く及ばず

「ほい終わり」「ズバン！・・・ドゴン！

なんかありえない効果音を出しながらも結局は当初の予定通りHチームの優勝が決まった

「さつてと、罰ゲームは何にするかな」

「え？」×負けた方々

驚いてる面々をよそに紅那岐は楽しそうに考え込むのである

「紅那岐君、あんまり無茶なこと言っちゃダメだよ？」

大人の貫禄か士郎が紅那岐を注意し回りはうんうんと首を縦に振るが

「ダメですよ士郎さん、こういうのはある程度ひどい罰じゃないとやり返そうと躍起になるのが目に見えますから」

さすがは紅那岐、悪ノリときは容赦が全く無かった

「そ、そうかい？」

「まあ、これも修行ってことで」

最後の言葉を聞いた士郎もそうだねと納得し罰ゲームが決まる

「じゃあ、女子は定番のコスプレで！あ、因みにどんなのになるかはクジで決めるよ？」

女性陣はある程度納得しホッと息を吐いたが男性陣の対応は未だ発表されてなかった

「そうだね・・・そうだ昔若かった時にこんなことが」

そして士郎から語られる昔覗きをやった時、食らった罰ゲームは

「首だけ出して隣にスイカを置いたスイカ割りだね」

「そうか、それで誰かの頭をカチ割ったら良いのか・・・」

悲しそうな顔をしながらも口はにやけっぱなしの紅那岐が死刑宣告をしたが

「士郎さん？」

士郎にも地獄への招待状が出たような感じで南の島のバカンスが終わったのであった

「あれ？最初はなのはの慰安じゃなかったっけ？」

「……忘れてた！」

どづにもしまらない面子だったのであった

A E P 11 〽海だ！水着だ！罰ゲーム〽（後書き）

レティ「あつるえ〜？最初な短くして短編集のはずが長くなった」

トール「いいんじゃない？紅那岐も久々にのんびり出来たんだし」

レティ「そうやね、感想ありがとうございました」

トール「次回からはS t sの空白期をやっていくわ」

レティ「ある程度紅那岐が成長（身長や年齢）したら別世界へ行き
ます」

トール「まったね〜 私も海いつてこようかしら？」

S t s への軌跡 E p 1 紅那岐初めての敗北(前書き)

F a t e / Z E R O の 3 話を見ましたが・・・

なにあのアイリの無邪気な表情は！可愛くて綺麗じゃないか！私を
萌え死にさせる気か！？

でも私にはイリヤが・・・

S t s への軌跡 E p 1 紅那岐初めての敗北

さて、時空管理局入りした面々が何処に配属ないし所属したかを語ろうと思う……

まずは・フェイト・はやてはそれぞれ原作と同じようなのはは教導隊、フェイトは執務官の為アースラに、はやてもまた捜査官としてレティ提督の元それぞれ所属した

では原作には存在しない紅那岐達一行はどうなったかと言うと、まずずかば武装隊員の資格を持ちつつも開発室所属にまたプレシア・アリシアも同時に同じ部署へ、恋は地上部隊108へと一応への所属となる、七星はシグナムと同じように航空武装隊に配属となった、リースは古代ベルカにまつわるものとして聖王協会に身を寄せていた

では紅那岐はというと……

「はぁ……俺に何でこんなに誘いを出すんだこいつらは？」

「君くらいの実力者がふわふわいろんな隊を行ったり来たりしてるって言うなら誰だって自分の手元に欲しいわよ」

「そうね、それに何で空を飛べるのに陸にいるのかも分からないし」

紅那岐は何でもこなせる故に色々な隊に配属され足りない部分を補わされる渡り鳥のような状態であったが基本は今いる場所に配属されているのである

そしてボヤキに紫の髪を後ろで結んでいる女性とストレートに下ろしている女性が紅那岐のボヤキにツツコミを入れる

「君の実力は、ってぶつちやけ欲しいなら素直に來いって命令すればいいじゃんか」

再び深い溜め息をつくと同時に勧誘勧告を捨てたのである

「君の若さでSS+の実力を持つてるなら誰だって欲しいわよ」

「いや、クイントさんお願ですから言わないで、ってか公式記録俺AAくらいなんですが？」

ポニーテールの女性、クイント・ナカジマに恨みがましそうな視線を送りながら溜め息をつく

「あら？結構局じゃ有名よ、めつちや手加減をしてパスした人だつて」

「メガーヌさんそれマジで？」

ストレートの女性、メガーヌ・アルビーノに驚いた表情でたずねる紅那岐はメガーヌの肯定の言葉を受けると手と膝を突いて嘆いた

「手加減していたのは認めるが、それは実力者から見えてぐらいだったのに・・・」

「その時にうちの隊長が丁度見てたらしくてね。アレは相手が弱すぎてぎこちない故の動きだつて」

クイントの一言によって更に打ちひしがれる紅那岐であった

「戻ったぞ・・・どうしたんだ紅那岐？」

其処に現れるは壮年の男・・・実際は若いが周りからはあまりの老け顔にあわなすぎると弄られてる人である

「うるさいこのオッサンが！何俺が手加減してるの見破ってるんだ！」

「貴様上司に向かってオッサンとは何だ！それに俺は未だ　歳だ！」

「『なん・・・だと・・・』」

其処にいた三人は年齢を聞いて固まった

「貴様ら後で覚えとけよ・・・さて我々が追っているものである施設が見つかった」

固まっていた三人と他の隊員に緊張が走る

「今回はかなり黒だろう、心して掛れ！」

「了解！」

「あいあい」

そうして彼らは向かった・・・戦闘機人のプラントへ

.....移動したんだよ.....

「ここが機人プラントか、みな心して掛れこれから先は命の危険がついて回る」

「了解！」

「あいあい」

マジメに敬礼している二人に対し紅那岐はなんとも緊張感が無かった

「お前は何故いつも緊張感がないんだ」

呆れ顔で聞くゼスト

「気は張ってますよ？ただそれを表に出さずか出さないかの違いですね」

そう言っている程度問答した後紅那岐達は施設の中に入って行ったのである

「なるほど、まさかここまでとは」

施設が既にもぬけの殻である大体のデータは消されていたが何故か施設の設備は残っており其処からデータはある程度取り出せたのである

「収穫は十分か、撤退する・・・ぬっ!？」

何処からかナイフが飛んできた為弾くゼスト、それに呼応し臨戦態勢に入る隊員達

「ここを知られたからには生かしては置けぬ」

現れた3人の女性たち、姿形は違えど身に纏っているボディーツは同じであり、そしてその中でももっとも小さい女の子がナイフを持っていた

一方で紅那岐達は

「ほへ、戦闘機人ね・・・何故に男がいない？いやいたらいたでイヤだけど」

「お願いだから、こんな状況でものん気でいないで！」

クイントの叫びに慌てることなく周りを見渡す紅那岐

「ええ・・・」

「何でそこでいやそうな顔をするのかな？」

メガーヌの言葉にもあるように紅那岐はますます不満顔をしていた

「だって、戦闘の為にうみだされたんしょ？なら俺が終わらせてやるうと思ったら何？機械が出迎えるって」

因みに紅那岐達の今の状況はというと、紅那岐・クイント・メガーヌの三人は機会軍団に囲まれている状況である
数が10程度であるならば其処まで危惧することは無いかもだが、実際は100以上あるためあせっていたのである
そんな時に通信が入った

「スイマセン！隊長が自分たちを庇って怪我を！」

隊員からの通信に流石の紅那岐も焦りが表れる、いつも老け顔と言っただけからかっではいるが実力は本物、その隊長が怪我をする事態が起きたのである

「マズいな・・・」

紅那岐がポツリともらす言葉に息を呑む二人、二人もまた隊長の実力を知りまた紅那岐の実力を知ってるが故紅那岐の一言がどれだけ重要かと言うことも悟った

「二人は隊長の下へ！道は切り開く！」

「何言ってるの！子供をこんなところに・・・」

クイントが反論しようとした瞬間に紅那岐からは轟音が鳴り響く、すると紅那岐は普段の黒髪ではなく金髪碧眼になっていた

「その姿は・・・」

紅那岐は管理局に入るときには自身の能力の大半を晒さず入っており、魔力が高く身体能力も抜群としてしか入っていなかった為初めて見る姿とそのあふれる力に驚く二人である

「いいから！隊長の位置に直進で進めるよう切り開く！」トール総てを射抜く雷光ハンマー！！！！」

紅那岐が放つ雷光の槍により其処に存在するもの全てを穿ち道が出来た

「行って下さい！」

その言葉に我に返った二人は紅那岐に声をかけ去っていった

「さて、機械風情が俺に勝てると思うなよ？」

そして紅那岐は瞬く間に機械軍団を殲滅すると隊長の下へと二人を送る為に作った道を同じように駆けた

「なっ!？」

そこで紅那岐が見たものは血濡れで倒れる三人の姿であった、三人の実力を知る紅那岐は驚くしかなかった。ゼストやクイント、メガー又はそれぞれスタイルは違えど実力は本物、それを倒す存在がいることに驚いていた

そして三人に近づこうとしたときに殺気を感じそちらを振り向くと

「未だいたか・・・それに未だ子供ではないか」

右目から血を垂らしながらも語りかけてくる銀髪幼女

「お前に言われたくは無いがね・・・隊長達をやったのはお前を含めてそつちの背の高い奴か」

紅那岐が言うと同時に現れる後二人の姿

「ほう、驚いたな我々を見つけられるとは」

「はっ!姿は消せても気配は消せてないからな」

紅那岐は既に来た時点で隊の三人以外の気配を察知していた

「悪いが形跡を残すわけにはいかん、死んでもらう！」

そして高速で接近してくる相手だったが

「嘗めるなよ？」

紅那岐が放つさつきに止まってしまった

「ああ、俺が実力を隠さず最初から本気でやればよかつたんだな・
」

悲壮な顔をしながら紅那岐は三人を見つめるが

「か、かはっ！」

聞こえた声に思わず振り向いてしまった

「今だ！」

銀髪幼女から投げられた無数のナイフを簡単に避けるが

「イスランブルデトネイター！」

ナイフが刺さった場所から突如として爆発が起こり紅那岐を巻き込む

「やったか？」

「わからん、油断をするな」

「お姉さま〜チンクちゃん〜、どうやら無事のようですわ」

髪を三つ編みにした女性から報告を受ける二人に煙が晴れると其処には無傷の紅那岐がいた

「驚いたな、爆発が起こるなんて」

対して驚いた表情をしてない顔でいうものなので相手側のほうが焦りの表情が浮かぶが・・・

「く、紅那岐・・・」

突如として聞こえた隊長の声に反応した紅那岐

「隊長！」

「く、クイントをつれて引けあいつが一番軽症だ」

隊長の報告を聞いても引く気が無い紅那岐は断ろうとしたが

「俺ならこいつらを・・・」

「引け！命令だ！」

怒声で怒鳴られる紅那岐、紅那岐ならばそれくらいへっちらだ
があまりの隊長の雰囲気思わず飲まれかけてしまったのである

「・・・了解」

返事をするクイントを抱える紅那岐

「申し訳ないクイントさん、旦那さんいるっていうのに」

いわゆるお姫様抱っこで抱える紅那岐に三人の戦闘機人は逃がすわけには行かず襲い掛かるうとしたが

「・・・動いたら殺す」

あまりに静かな声で言われた三人は固まるしかなかった、先ほどのような殺気は出てもないのに何故か動けなかった

「お前らは運がいい・・・これが俺の初めての敗北だ」

それだけ言うと紅那岐は一言呟いて魔法陣が展開され消えたのであった

「頼むぞ紅那岐・・・」

それを見守ったゼストは息を引き取ったのであった

「クイントさんある程度は復元したけど、精神的にはダメージは直ってないからここにいてください」

クイントを復元する世界で戻し怪我自体は無くなったが意識は未だ戻ってないクイントを安全な場所に寝かせた

「俺はケジメはつけてもらおうと思うのでちょっと行って来ます」

そして紅那岐は先ほどの施設の前に来ていた

「さて、八つ当たりになるが全てを消させて貰うぞ・・・たとえばここにあの二人がいようが関係ない」

涙こそ流れては無いがその顔を見れば親しい間柄のものならば泣いていると思うような顔をしていた

「隊長もうちよつとマジメに対応してやればよかったですね、メガー又さんスイマセンでした娘さんに会って約束が守れなくて」

そして紅那岐に溢れんばかりの魔力が生まれる

「手向けだ受け取れ！『オーバーロード偉大なる穢れなき極光の世界！！』」

そして紅那岐から放たれる極光により施設はもとより近く似合ったものは無に返したのである

クイントを病院へと運んだ後に紅那岐に更なる凶報が訪れたのであった

「な、ナギ！な、なのはが・・・」

この少し後に『特殊戦技教導隊』と言うものを作りエース又はストライカーを作ることを目的とした一人で戦局を変える人材育成を開始した『特殊任務実行部隊・イレイザー』と言うものを担い表と裏であらゆる状況にも介入できる部隊を作った

因果なことに表と裏でマテリアルと同じ名の「終焉の抹消者」と呼ばれた

この後の紅那岐はと言うとこの事はきちんと記憶はしているが気にせずいつものように仕事をこなしていったのである

Stsへの軌跡 Ep1 紅那岐初めての敗北（後書き）

レティ「紅那岐の弱点露見！」

トール「強すぎるが故の弱点ね」

レティ「だねえ、あの状況がたった一人でやったらならば被害を受
けずに帰還もできたのにな」

トール「そうすると紅那岐の課題はチームワークかしら？だったら
私は教えられないわね」

レティ「いいんでね？個人が強ければいいんだから」

トール「ま、そこは紅那岐が考える課題としましょ」

レティ「んじゃちょっと部隊説明を」

『特殊任務実行部隊』

隊員は紅那岐を隊長とし隊員は恋・七星・すずか・リースの合計
5人で形成され隊員が少ない代わりに全員リミッターは存在せず自
由に動ける

また紅那岐は特佐という役割になり佐官・尉官以下の全員に命令
権が存在し誰にも囚われなくなっている

レジアス・三提督などの信頼も得ているので地上・本局ともに強
力な後ろ盾も存在する為結構我まま放題で仕事をしている

『特殊戦技教導隊』

特務隊としての仕事が無い時に紅那岐が思いついたもので、あの

時もう少し実力があればと憂いた結果考えた結論である

エース・ストライカーなどはどの隊にも存在するわけではないのでこれに大しては大いに反響を呼んだが、あまりの訓練内容につぶれるものも出るとか出ないとか

因みに、教導隊と違うところは一度に受け入れるのは最大で2人までしか受け入れられない

レティ「こんな感じかな？レジアス・三提督などの信頼はご都合主義と言っことで」

トール「んじゃ、感想ありがとね」

レティ「最後に、文法がぐちゃってるのは自覚してるのでツッコミは無しでお願いしますでは次回は話最後に出てきた凶報の話ですでは」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5587w/>

神々のゲームと転生者

2011年10月17日03時00分発行